
エロイムエッサム

絶対勝利

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エロイムエツサイム

【Nコード】

N0987Y

【作者名】

絶対勝利

【あらすじ】

魔術×記憶障害×萌え、のコテコテなラノベチック物語。

序章だと思う、うん。(前書き)

特になしかな

序章だと思う、うん。

「『マグスマグヌサム』……！　ハア……ハア、……ぐうッ！」

身体中から悲鳴が上がる。背中からズシリとした重力に押し潰されてしまいそうだ。

挫けそうになる心をどうにか奮起させようと試みるが、どうにも難しい。

——どうしてこんなことになったんだろうか。

先程から同じ疑問が頭上でぐるぐると飛び回るが、頭が朦朧として答えが見つからない。

俺はただただ、自身から滴るトス黒い血に戦慄するばかりであった。
——身体中から悲鳴が上がる。これ以上はぴくりとも動けそうにない。

徐々に瞼が重くなってくる。

暗闇の中、ザ——……と降り注ぐ雨の音だけが聞こえていた。

製鉄業の発展により工業革命が起きた。そしてそれが可能にした大量生産。途中、労働問題などの障害もあったが人類は確かに、着実に繁栄を遂げていた。そして近代化以降——現在、人類は更なる繁栄を求めんと電子工学^{エレクトロニクス}、情報処理技術（ＩＴ）にまで手を染めていた。

しかし、得られるだけではなかった。そこには犠牲が伴った。それは宗教の衰退である。『聖なるもの』の俗化により『神なし』の世界が構築されていく。世界は魔力の呪縛から解放たれ、世俗化が波及していた。

——師匠は言った。

『魔術に溺れることなかれ。魔術は常に人びとを救うために用いなければいけない。決して私利私欲のために用いてはいけない。もしこの掟を破ればそれは自らを破滅に向かわせることだろう』

俺はそんな師匠の言葉を思い出しつつ支度を整え始める。

途中、窓から覗かせる外の風景についっい感嘆が漏れてしまう。

ああ、今日はなんて快晴なんだろう。これで気分が上がらないわけがないじゃないか！ 自然の神に感謝だ！

——さて、支度も整ったことだしそろそろ向かうとするか。

俺は気分上々、先程飯も食べたしお腹も一杯、さあ出陣だと咆哮せんばかりに戸口を開けた。

眩しい太陽が俺の瞳を刺激する。青空には雲ひとつなく、それでいて心地よい風が俺の髪をなびく。

ああ、気持ちいい！

俺は想像通りの心地よさに歓喜する。

やっぱり風はいいな。

——そう、とにかくにも風は良いのだッ！

風にも色々と分類されていて、『そよ風』、『涼風』、『春風』、『秋風』などがある。しかし、『からっ風』は格別だッ！ 山越えてきたその風は一切の不純物を持ち合わせておらず、その純正たる息吹で俺の身体に蓄積された負の産物を全て、払拭してくれる。そしてさっきのがそれだ！

「フンフンフンフンフン」 ついっい鼻歌を歌ってしまふ。

俺は自転車に軽快に乗るとペダルを漕ぎ始めた。

——ああ、ちなみに俺は魔術師だ。人里離れた樹海にひっそりと住んでいる。そして今日は、久しぶりに食材を求めて遠出するのである。

元来、魔術師は住処とする場所に引き籠り、魔術の研究に没頭する性質であるのだが、どうやら俺はその枠から外れているようだった。

風通しが悪くて湿気が多い場所は好きにはなれなく、密閉された部

屋で長時間研究に没頭するなんて、罰以外なんでもない——体中から力ビが生えてきそうだ！

俺にとっての研究は、書物を読みあさり部屋に引き籠るのではなく、知識を得ては外に出て即実践を繰り返すことだった。

実際この処方得ている成果は大きいし、今のままでもいいと思っている。

ではなぜ湿気の多い樹海に住んでいるかと問われたら、魔術師のデフォルトだからしかたがない——というわけであまり追及はしないでほしい。

それはさておき——

思案を巡らしている間に、目的地まであと少しに迫っていることに気が付いた。到着するにはあと一マイルぐらいだろうか。自転車の速度なら短い距離だ。

視界の悪い道中に、俺は目的地までの距離をいち早く察知する。

魔術師である俺には魔力を用いることで数マイル先までの音が感じ取れ、それらの詳細までとはいかないが、およその周波数を感知することができた。

そして、人間の声の周波数は基本的に三百〜七百ヘルツと言われている。

つまり、一定の周波数を局地的に感知できれば、そこが人里だということが分かるわけだ。このように沿道を森に囲まれている視界の悪い道路では、非常に便利な魔術だと言える。

徐々に神秘的な森の匂いとは異なる俗物的な匂いを感じ取りながら、俺はペダルをこぎ続けていく。

そして数刻後、目的地であるミツイヤに到着した。

『ミツイヤ』——首都郊外の丘陵地帯にある緑豊かな街。それとは対照的に、ほど近くにある川を下れば広大な青い海が広がる資源に恵まれた地方である。

「おうツ！ 久しぶりだな、ボウズ」

店先に着くなり景気の良いしゃがれ声が耳を打つ。

「オヤジさん、ご無沙汰しています。最近の案配はどうですか？」

俺は声の持ち主に対し、軽く会釈をしながら決まりごとのようなやり取りを行う。

「最近も何も、生まれてこの方景気の悪かった日がありやしねえ。

今年も安定した気候で漁は順調だよ。ホント、良いご時世なもんだ。ダハハハッ！」

目の前の店主であるオヤジさんはそう言うと、手を腰につけながら豪快に笑い飛ばす。

樹海に住んでいる俺にとっては、ここの魚屋は貴重な食材を提供してくれる場所であり、行きつけの店になっていた。

今ではオヤジさんとは親しい仲になっている。

しかし、当然ながら俺が魔術師であるということは言っておらず、相手も樹海に住んでいる変わった若者だとしか認識していないはずだ。あくまで表明的な付き合いというわけであり、どこまでいっても『魔術師である俺』と『ただの人間であるオヤジさん』という本質的な関係を崩すことはないだろう。

まあ、たまにこの人に魔術を披露したらどうなるだろうかと、ほくそ笑みながら妄想をすることもあるが——きっと腰を抜かして間抜けな顔をするに違いない。

「……くふう」、とつい笑みがこぼれてしまう。

俺は仕切り直す。優秀な魔術師である俺はそんな愚行を犯すわけもなく、無難に会話を進めるのだ。

「——いや、羨ましい。俺もあやかりたいものです。ところで、なにか新鮮でお勧めの魚はありますか？」

「ああ、今朝獲れたばかりの活きの良いヤツがある」オヤジさんは待っていましたとばかりに応え、間髪いれず言葉を続ける。「しかも今回は大漁だったからな。十匹買えば特価大サービスだ！」

オヤジさんはそう啖呵を切ると大きな掌を俺の顔面に突き出し、値

段を提示する。

——安い。

俺は直ぐに、提示された値段を一匹当たりとして計算し唸った。しかし、考え直してみると予定の出費を超えてしまっし、なにより湿気の多い樹海では保存環境が悪くて長時間保存することはできないことに気付く。それでも提示された値段の安さに俺は悩んでしまい、答えを出すまでに数刻を要した。

結局は一部を干し物にすることで結論づき、オヤジさんがただの豪快な男ではなく、商売人としての一面も持っていることを再認識した次第だった。

「まいどありー!!」という言葉で送られ四苦八苦しながら次の店へと向かう、俺。

その両手には、大量の魚が押し込まれた袋が携えられていた。

なんというか——

腑に落ちない気持ちで俺を支配していた。

もしやこれはまんまと口車に乗せられた末路では？ いや、断じてそんなはずはない。冷静さを欠いて、甘言にのせられるなど愚の骨頂じゃないか。

自称だが、優秀な魔術師である俺がそんな愚行など犯すわけがない……はずだ。

そんな葛藤に悶えながら、俺の鼻を強烈な魚臭が刺激していた。

「ありがとうございましたー」

——やっと終わった。

買い物を終えた頃には、すでに夕日が落ちようとする時刻になっていた。辺りは橙色の世界が覆い、家族団欒で過ごしていた人々も家路に向かうべく町の広場を中心に東西南北へと散らばっていく。そんな俺も人混みにもぐり込み、重たい足を酷使しながら帰路に向かっていた。

そして疲労困憊の身体を癒すのは鼻をくすぐる旨い匂い。

——その正体は屋台にあった。

町は夜になるともう一つの顔を見せる。あちらこちらで屋台が立ち並び、町中漂う匂いが人々を誘惑するのだ。

かくいう俺も毎度ながら匂いに釣られてついつい立ち止り、足を運んでしまう。

今回もちよつと寄って行こうかなーつという自分がいるわけだが、両手に持つ大荷物をみて気持ちが萎えてしまった。

大荷物を持って他のお客さんに迷惑をかけるのも気が引けるし、なにより、魚臭くて敵わないと言われるのは目に見えているわけ——

魔術師である少年が異変に気が付いたのは、そんな「今日は諦めるか——」という言葉を言い終わるか、言い終わらないかの瞬間だった。

「——ああ、もうっ！」

唐突に女性の声が俺の耳に入ってくる。

人垣の向こうでなにやら揉め事が起きているらしい。

肩越しに覗きこんで見ると、同世代ぐらいの少女が黒軍服をまとった男たちにどこかへ連行されているようだった。

「——っ。逃げないから、もう少し優しくしてくれてもいいじゃないですかぁ!？」と叫ぶ少女を男たちは問答無用とばかりに、腕を後ろに組ませて乱暴に彼女を歩かせる。

「何が起こったんですか？」

俺は自然と、隣にいたおばさんに事の説明を尋ねていた。

「えっ、ああ……、なんでもあの娘がねえ、国のお偉いさんの家で忍び込んだらしいのよ!——」

急な質問に快く応えてくれたおばさんは、幾分興奮しながら言う。俺はもう一度、連行されていく少女を凝視してみるがどうにも腑に落ちなかった。

少々つり目ではあるけれど——

その凜とした表情。

すらっとした艶やかな――

腰まである緋色に染まった長髪。

水も滴るような――

白い肌。

とてもじゃないが、悪人にはそぐわないような美しさだった。

だが、どうして――犯罪を？

そんな俺の交錯する考えにおかまいなく、隣のおばさんは言葉を重ねていく。

「ほらっ！ よく見たらあの娘、『不能者^{ガラクタ}』なの。なにを企んでいたか分かったもんじゃないわね。あんなに可愛らしいのに、やっぱりアイツらの考えることは理解できないわ。あー恐ろしいっ！」

ふと、聞き慣れない言葉に俺は違和感を覚えた。

『不能者^{ガラクタ}』……なんだそれ？ ――聞いたこと無い言葉だ。

「すいません、『不能者^{ガラクタ}』ってなん――」

質問が終わらない内に、おばさんはさらにまくしたてる。

「きつとあの娘、キツイ取り調べが待っているわ。そう――拷問じみたような……！」

「――えッ」

さっきまでの疑問が嘘のように消え去り、代わりに『拷問』という言葉が自分の肩に重くのしかかってきた。

「……『拷問』って、あの『拷問』ですか？」

「ええ、そうよ。心身ともに虐げて、相手を屈服させるあの拷問」俺は拷問という言葉は他にはないということを知っておきながら、ついつい聞き直してしまっていた。

それはあまりにも非現実的で、突拍子もない言葉だったから――動揺してしまっていたんだと思う。

だってそうじゃないか。

拷問なんて行為は、大昔に絶えた時代遅れの産物だ。一部の国では未だに行っているらしいが、この国ではすでに廃止されている。

一瞬、おばさんがただの虚言癖の持ち主で、全ては口から出まかせだったんじゃないかと思ってしまった。

しかし、おばさんの悲痛な横顔を見るかぎりとても虚言とは思えない。

俺は無意識のうちに、連行されていく少女を見つめてしまう。

彼女に怯える感情はなく、堂々とした面持ちで歩んでいた。

——奇妙なくらい凜々しかった。

どうして彼女はあそこまで堂々としていられるのだろう。

成人にも満たない少女であるというのに、どうしてこの後訪れる苦痛に怯えないのか。

もしかしたら、彼女はなにも知らないのかもしれない。歩む先には絶望が待っていることを知らずに、足を進めているだけなのかもしれない。

たとえ彼女が犯罪に手を染めたにせよ、それでは——

あまりにも哀れだ。

込み上がる感情に、俺は思わず「その先には苦痛しか待っていないんだ！」と叫ぼうとするが、言葉を飲み込んだ。

今真実を告げたところで、結果はなにも変わりはない。逆に、彼女に余計な恐怖を与えるだけだ。

それならば、一時の安らぎを与えた方が幾分かマシというもの——
「……………」

自分自身で結論づいときながら、吐き気が込み上がってくる。

しかし、どう足掻こうと結果は——変わらない。

一瞬。

「お前がいるじゃないか。お前なら彼女を救ってやれる——救えるだけの力を持っている」と頭に木霊が響いた。

しかし——俺はそれを否定する。

たしかに魔術師である俺なら——彼女を救うことはできるかもしれない。

でも——できないんだ。

ただの人間に自分が魔術師だということがばれることは、魔術師の禁忌だから。

さすがの俺でも、この大勢の人間を欺くことはできないからだから――

不可能。

それに、所詮は人間だ。

俺は師匠と違って正直、人間が好きではない。確かに良い人もいる。だが、総じて見るとやはり好きにはなれない。困ったときだけ魔術師を頼るヤツらなんて――助けなくてもいいだろ？

俺はそう自分に言い聞かせると、彼女を見るのを止めようと目をそらそうとした。

が、その刹那――

「――ッ!？」

少女と目があつた気がした。

すでに彼女との距離が広がっていたから、確信は持てないが。

でも、驚いたのはそんなことじゃなかった。

彼女の眼の奥に――悲しみを感じたんだ。

それは――俺の勘違いかもしれない。

でも、一瞬だが、目の奥に潜む悲痛な叫びを見た気がした。

そんな俺の意識に、再び葛藤が飛び交う。

本当にこれでいいのか？ 彼女をこのまま連れて行かせてもいいのか？ はたして俺は彼女を見捨てて、後悔はしないのか？

しかすると、自分を守りたいあまりに怯えているのかもしれない。

俺は臆病で、卑劣で――

自己中心者なのかもしれない。

もしかすると、彼女は救いを待望しているのかもしれない。

本当に――

本当にこれでいいのか!？

《人々を救うために魔術を用いなさい》

……くッ。

——駄目だ！

俺は魔術師だ！ 確かに人間は好きにはなれない。——でも、やっぱり俺は魔術師であり、助けを求めている者に手を差し伸べる存在であるはず、あるべきなんだ！

だから、俺は魔術を研究している。

このタイミングで使わなくて、いつ使うつていうんだ。そのための力だろ！

俺はそう決断すると、人垣をこじ開けるように前に進み始めた。

「えっ……ちょ、ちよつと、あんた！ なにをする気だい！？」

後ろから悲鳴のような声が聞こえてくる。

徐々に人々の視線が自分に集まり、周囲がざわめきだす。

でも俺はそんなことは気にしない。

視界にあるのはただ一人——救いを求めているあの少女だけだ。

俺は腰帯にくくりつけている巾着袋の一つを手取る。

「結局、俺もアンタと同じだったってことらしい。——なあ、師匠？」

——そして黒軍服の男たちがけて放り投げ、娘に被害がいかないように最小限の魔力で詠唱した。

あらかじめ小麦粉を袋一杯に詰めていた巾着袋は、少女を拘束していた男の背中に命中し、大気中に粉が舞う。

しかしその刹那——粉塵爆発が起こった。

「——あぎッ！？」

パンッ！ という乾いた音が辺りに響く。

小規模の爆発は対象にショックを与えるには十分な威力のようだった。

男は苦悶の表情を浮かべながら、ふらつく。

俺はその瞬間を見逃さなかった。

男が少女を拘束していた手を離れた隙に慌てふためく残りの黒軍服

たちの横をすり抜けた俺は、少女の手を無造作に掴む。

そして、そのまま一目散に逃げ出した。

「へっ……、ちょ、ちよつとッ!？」

「もう大丈夫。心配しないでいい。俺が絶対に助けるから!」

俺はおろおろしている彼女をなだめるように言う。

追手の様子を確認するため後方を一瞥すると、一人千鳥足になっているものの残りが慌てて追いかけて来ているのが分かった。

前方にある広場を一直線に走り抜ければ、町の外付近にある駐輪場に辿り着くはずだ。

そこに自転車があるから、そこまで行けば遠くまで逃げられる。場合によっては森の中に身を潜めればいいし、最悪、樹海にある俺の住処に逃げ込めば安全だ。

俺たちはどよめく群衆の間を縫っていき、あらん限りの力で駆け抜ける。そうして、やっとの思いで群衆から抜け出すことができ広場に踏み込んだ俺たちだったが、息をつく暇もなく直ぐに走り始める。日中は大勢の人々で賑わっていた広場だったが、幸いにもすでに人氣は少なく、走り抜けるには好都合だった。

だが、それは追手側も同じであり、俺たちに続いて群衆から飛び出してきた彼らは、広場に踏み込むなり、瞬く間にこちらに迫ってくる。

手前には可憐な少女が並行しており、この状況はある程度予想出来ていたから問題はなかった。

ただ問題があったのは——彼女ではなく、俺が足手まといになっていたということだ。

その可憐で一見か弱そうな少女は、猛烈なスピードで大地を駆け抜け、さながらギリシア神話に登場する『狩猟の女神アルテミス』のような風貌を感じられた。

「ハアッハアッ……ここを真直ぐ突き抜けて……大通りに出てから、そ、そのまま真直ぐ進めば……外の駐輪場があるから……た、頼んだあッ!」それにひきかえ俺は、彼女のスピードに追い

付くもとい引きずりまわされるだけで精一杯になってしまい、拳句の果てには彼女に進路を教えるはめになってしまった。

男子たるもの、女子にエスコートされるとはなんたることかッ！だが、しかし——これはしょうがないことだった。少女が速すぎただけだ。

元々肉体を売りにしていない自分だったが、女性にここまで身体能力を完膚なきまでに圧倒されたことはさすがに無かった。

彼女が特別であり——すなわち、自分に非はない——と願望する。

「ゼエイハアー！　ゼエイハアー！　グフッ……ハアッ、ハアッ……チ、チョット……マッテエ……ク、ク……クレエエエ——ッ！」

それにしても、可憐な少女に引きずられてハアハア言っている男つて——なんて間抜けな光景だろう。

——冷汗三斗の思いだった。

広場を抜けた俺たちは、町の外へと一直線に続く大通りに出た。

すると突然、俺を導いていた少女は何を思ったのか、直進すべき大通りを弧を描くようにして曲がってしまう。

目的地まで遠回りしてしまうぞッ、と焦燥感を覚えた俺は声を荒げて彼女を制止させようとした。

が——すんでのところで、その軽率な行動を抑えることに成功した。熟考すると、このまま直進を続けていけば主に自分の足手まといが原因でこちらが追手に追いつかれるのは容易に想像できるわけで——それならば、遠回りをしてでもいいから、入り組んだ道並みに入り込むことによって、追手を翻弄できるかもしれない——結果、彼女の選択は正しいものだ和理解できた。

——視界が急に暗くなってくる。

俺たちが入り込んだ先には街灯が一つも機能していなく、夕日の淡い日差しだけでは十分な照度とはいえなかった。

どこからか、生ゴミと人糞をかき混ぜたような、耐えがたい異臭が漂ってくる。

たしか——数年前に住人の反対運動で、ある工場が移転を余儀なくされてしまったらしいということを聞いたことがある。もしかしたら、ここはその工場跡地で、未だに工場の臭気が残っていたのかもしれない。

先導する少女は右折、左折を繰り返して、できるだけ追手にこちらの背中を見せないように足を進める。

「……」

ふと俺は、最初の狼狽以外終始無言の少女が心配になってしまった。涙と鼻水撒き散らした努力の末、やっとの思いで彼女と肩を並べることが成功し、横顔を見ると心なしか険しい表情になっていることに気が付いた。

さっきの魔術でどこか怪我をさせてしまったんじゃないかと焦り、聞いてみる——が、なにも言わない。

本当に大丈夫かと尋ねても、無言のままだ。

——どうしたのだろう？

もしかして不安のあまり言葉が出ない——とか？

俺は思案にふけるが、結局答えはでなかった。

徹頭徹尾仏頂面の彼女を見て、ほとほと困り果てた俺は頭を掻いてしまう。

しかし。

ああ、もうお手上げです……体力も限界です、と思った瞬間——彼女は唐突に足を止めて、ついにその重たい口を開いた。

「はあ——……。余計なことをやり腐って……」

「ハアハア……ゼイゼイ……ヘエ？」

予想もしなかった彼女の反応に、俺はつい間抜けな声を出してしまった。

「ウプツ！……え、えっと、どういうことだ？……あのまま連

れてかれたら、間違いなく……ひ、酷い目に合っていたんだぞ！？

だからお前をこうして救ってやったん………だッ！」

俺は咳きこみながらも、なんとか最後まで言い終わることができた

——が。

「あー本当にありがとうございました……って言えば満足ですか？
貴方の自己陶醉に付き合わされた私は、今、絶体絶命に瀕しているわけですが？」

彼女の切れのある皮肉めいた言葉に、俺は「うえ！？」と面食つてしまう。

「まだ理解できませんか？　つまり、私は助けなんて必要なかったんですよ。自分の身ぐらい自分で防衛できますから。……肉体を売ればヤツらなんて、どうとでもできたんです。それが貴方の腐れお節介のせいで、どうとでもできなくなつたわけですよ。ああ、穴があつたら貴方を埋めたい気分です」

俺は彼女の言葉に耳を疑つてしまった。

肉体を売るだと——！？　コ、コイツは自分の身体をなんだと思つているんだ……。

この少女は見た目とは裏腹に、かなり過激な人間なのかもしれないあと、しれっと殺人願望してるし。

いや、それ以上に——絶体絶命に瀕しているだつて？　なにを馬鹿なことを言っているんだろう。俺の隣が一番安全だというのに！？　俺はそう憤慨しながらも、徐々に距離を詰めてきた追手に対して再び巾着袋を放り投げ、対抗する。

一切手加減なしの今度のそれは、轟音とともに追手たちを爆熱で覆い尽くし、辺りの砂を撒き散らす。

ふう。——やはり俺は優秀な魔術師だ。

最大限の魔力を注いだ結果、さっきとは比較にならないほどの爆発が起こり、追手全員を一瞬にして、無力化してしまった。

これを見たら、もう同じことは言えないはず——自然と歪んでしまう口元。

「ハア……もう気付いているかもしれないけど、俺は普通の人間じゃないんだ」

俺はここで一瞬口を噤んでしまうが、どうせバレてしまうことだ。

——言ってしまうおう。

「……いわゆる魔術師、と言えば分かるかな？ 簡単には信じられないとは思うけど、本当なんだ。だから不安にならなくていい。」

「俺の隣は安全だからな！」

俺は爽やかな笑みを浮かべつつ、彼女を見返してみる。

「……なッ！？」

ちなみにこの驚愕は自分のものだ。

俺の正体に驚愕する、もしくは心強さに感動するはずだった彼女とはいうものの、依然として険しい表情をして、呆れたように溜息をついていた。

「……ホントおめでたい人ですね。というか、『マジユツシ』ってなんですか？ 聞いたことない言葉ですけど。——もしかして妄想癖の類をお持ちの方とか？」

——え？

本当に彼女はなにをいつているんだろう。

魔術師を知らない？ あの魔術師だぞ？ 創作物によく頻出してくるあの魔術師を知らないだ！？

そんな馬鹿な！

俺の心の喚き声を遮断するかのように、彼女は言葉を続ける。

「いや、だからあーあんな弱々しい爆発でヤツらがやられるわけないんですよ！ ここは現実であり妄想の世界ではないんです！ ホント今の私たちの危機的状況分かってますかあ！？ 貴方腐れバカですかあ！？ 『死』という終着点へ急行中なんですよ！？ 死んだら腐れちゃうんですよ！？」目の前の少女は頭をぶんぶん振り回しながら、うおーっと烈火のごとく捲し立てる。

彼女の急な豹変に、俺はうろたえてしまった。

しかし——

「弱々しい爆発だつて！？ なにを言ってるんだ？ あの爆発を見ただろ？ 魔術師の俺だつて無事じゃすまない。生身の間人なら、なおさらだ！」

俺は至極当然の異見を述べる。

それでも、目の前の少女は緊張した面持ちを変えず、漏出した俺の焦りを否応にも煽り立てる。

「——ッ。そ、それに後ろをしてみる！ 誰も追って来てはいないじゃないか！？」

慌てて後方を遠望してみるものの、追手は確認できず、砂塵が辺りを舞っているだけだった。

「ああ、腐れたくない………腐れたくないよ」

「——だ、だから、なんでそんなに怯えているんだ？ お前の隣には心強い魔術師がいる。後ろを振り返っても、追手は来ない。——どこに不安要素があるっていうんだ！？」

空空寂寂。

「……なるほど、分かったぞ！ お前こそ妄想癖のなにかを持ってるんだろ？ じゃなきゃ、あの爆発を弱々しいだとか、魔術師を知らないだとか言うはずがない！」

「ぐすつ………」

なおも無言で頂垂れている彼女に、次第に俺は支離滅裂なことを口走ってしまう。

「ははーん、分かったぞ。あれだろ？ 俺が魔術師なんて突拍子もないことを言うものだから、気が動転してるだけだろ？ ……もしくは魔術師の俺をひがんで、意地悪をしてるとか？ ——きっとそうに違いないッ！」

「……そ、それとも俺から魔術の教えを請うために、わざと気を向かせるようなことを？ ——でもそれは難しいな。魔術って天性的なもの的重要で、多くの人間は扱えないものなんだ」

「………」

「……え、えつと——なにか言ってくれないか？ 頼む………」

「……可愛そうな人」彼女の俺を憐れむ表情は、とても儚くて、真実を告げているように思われた。

——なにかがおかしい。

漠然とした違和感を覚えた——いや、覚えていた。

『拷問』、『不能者』^{ガラクタ}、『マジユツシってなに——？』。頭の中に羅列された言葉が浮かんでくる。

俺の常識と、周りの常識とのずれを感じる。

あの爆発で普通の人間が無事でいられるのか？

手加減は——してなかった。最大限の魔力を注いだ詠唱だった。

しかし、目の前の少女は断言する——あの程度では彼らを打倒できないと。

もう俺には、俺の常識と、少女の常識のどちらが正しいのか判断できなかった。

だが、信じたかった。

——俺の常識がこの世界の常識だということを。

——きつと、さっきの爆発で彼らを打倒できたということ。

「『マグスマグヌサム』……」

スパアッ——！！

「——？」

一筋の光が少年の頬をかすめた。

序章だと思う。うん。(後書き)

あざっす！

序章の次。つまり、一章になるかな、うん。

人生一度は不条理な疎外感を味わう宿命にある。万人がそうであり、そこに例外はない。

一例をあげるとするならば、自分以外の学校のクラス全員がよってたかって、作り話をあたかも本当のことかのように話し、お前は知らないのか？ と意地の悪い問いかけをしてくるようなものだ。彼らは冗談のつもりだろうが、こちら側からしたら不条理な疎外感を強制されるわけで、はた迷惑な話だ。

そして――まさに今の俺の心理状態は、そんな感じだった。

だが、決定的に違うのはこれが洒落た冗談ではないということだ。頬を伝わる鮮血がそれを物語っている。

これがただの冗談ならどんなに良かったことだろうか。

「ドッキリでした！ ハハハハ――ッ」といった具合に板を携え、大勢の人が自分を笑い物にしていたらどんなに良かったことだろうか。

だが――残念ながら俺の周りにいるヤツらは皆が皆、大真面目だった。

突如として現れた光芒は無音の音を立てながら、俺の言葉を遮る。そして瞬刻遅れで「シュッ！」という鋭い音が耳を打った。

その音速を超える光速の一筋は、俺の頬の皮を抉ると同時に、その先にある分厚い鉄筋コンクリートの壁を貫く。

壁は瞬く間に、暗赤色に染め上がり――亀裂ができた次の瞬間、凄まじい音を立てて粉碎してしまった。

少女は俺の背中にしがみつき、縮こまっている。彼女の吐息が俺の耳朵を震わせ、妙に艶めかしかった。

しかし――その時の俺はというものの、そんな心地よさに浸る余裕などなく、棒のように立ちすくんでしまっていた。

開いた口が塞がらない。カッと見開いた目を閉じることができない。

汗腺が開きっぱなしで、汗水たらしまくり。涙腺も同上——まさに吃驚仰天だった。

少女の言っていることは正しかったのだ。ならば、俺が正しいと認識していたことは全て、間違いだというのか？

足元を支えていた大地がぐらぐらと揺れ動く錯覚に陥ってしまう——今まで常識だと思っていたことが全て崩れ落ちてしまうかのよう

に。

彼女の常識が世界の常識であり、——では俺の常識は？
なにか根本的な違和感が俺の脳裏にちらつく。——が、それがなんなのか明確な答えが見つからず、焦りと苛立ちが胸中に蠢いてしま

う。

しかし、そんな俺の狼狽をよそに事は一方的に進む。
「許可を確認——。これより先、抵抗ある場合は警告なしに武力行使を行う」唐突に、無機質な声が辺りに反響した。

徐々に薄れいく砂塵の中心から、にゅっと突き出た腕が視界に入ってくる。

その俺たちに向けられた拳には、紅玉の指輪が妖しい光を放ちながら備えられていた。

一瞬、「あの指輪は？」と頭に疑問が浮かんだが、少女によって遮られた。

このままでは、俺たちは格好の的以外なんでもない——とでも思っていたのである。

俺は彼女に強引に引きずられ、工場施設内へと導かれた。

うっとしてしまうほどの強烈な臭いに、俺は思わず咳きこんでしまった。建物の中は外とは比べ物にならないぐらいの臭気が立ちこんでいた。辺りを見渡すと巨大な大蛇の乱舞の如くホースが纏れ合い、散乱されているのが分かる。

決して移動しやすい場所ではなかったが、先程の理不尽な攻撃を見るかぎり、いたしかたない選択だったと納得する。

あれはなんだ——？ どういうカラクリだ？ あれは魔術だったの

か？

俺はもう一度、先程の出来事を脳内で映像化してみる。

いつの間にか自分の頬を掠め、いつの間にか巨大な壁を破壊していった光線。

あれは——魔術……だよな？ 気は動転していたが、一瞬魔力を感じたから間違いないはずだ。——ってことは相手も魔術師？ そんな馬鹿な！？ そこら中に魔術師がいてたまるか！

魔術師になるには、それはもう、かなりの素質がなければいけないのだ。それに加えて、血の滲むような努力をしなければいけない。必然的に魔術師は希少な存在となる。

それなのに、こんなあつさりと他の魔術師に出会うとは——信じられない。

自分のアイデンティティ的なものを汚されたようで、俺は憤慨してしまった。

しかし魔力を感じたのも事実であり、俺は否応にも、相手も魔術師であるということ認めざるを得なかった。

だとしても、どうやってたらあそこまでの高密度のエネルギーを具現化——いや、それ以上にそれを一寸の狂いもなくコントロールできたのか。さっきの攻撃は警告としての意図的に外されたものだった。認めたくはなかったが、あんな芸当は自分にもできない。

——脳裏にちらつく紅玉の指輪。

もしかしてあれを媒介に？ しかし、あんな小さい物で具現化できるだろうか。さっきの光線は相当の魔力が必要になるはずから、それ相応の大きさの器が不可欠のはずなんだが——

「『悪魔の紅石』^{デーモンズストーン}」

そんな思案に苦しむ俺に、少女はまるで俺の心中を見透かしたかのように呟いた。

彼女は続ける。

「——持ち主に対して、望みを叶える石。私たちは『悪魔の紅石』と呼んでますけど、一般的には『祝福の石』と呼ばれてます。まあ、

貴方も知っていると思いますが」彼女はそう言いながら、俺を一瞥した。

「——『悪魔の紅石』？ 『祝福の石』？ どっちも聞いたことがないな……」

「それは妄想？」少女は間髪いれず、俺の質問に対して質問で返す。「断じて妄想ではない……はずだ」と俺は返し返した。——が、すでに自分自身の常識が覆されてしまっていたため、最後は声のトーンが落ちてしまう。

なおも納得しかねる彼女ではあったが、真剣そのものの俺の表情を見て、なにも言わなかった。

「……では仮に、貴方を信じた上で話します——貴方が記憶欠陥者だということを条件で」

『記憶欠陥者』という言葉に反発したくなる気持ちが漏出してくるが、実際のところどうなのか自分自身も分からなかったため、なにも言えなかった。

「先程も言いましたが、『悪魔の紅石』^{デーモンズストーン}とは持ち主に対して望みを叶える石のことで、巨大なエネルギーを凝縮させ、石に詰め込んだもの——と言えば分かり易いでしょうか。で、この世界の主な動力源になっているのが、この石なんです。さらに言うと、人類の全ての『文明の遺産』^{インベーション}にはこの石が埋め込まれていて、その動力をもとに機能するってことです。まあ、まっとうな人間生活を営むには、必要不可欠な便利な石ところってわけですよ。まさに祝福の石って感じですよ……例外もありますが」

最後に言葉を濁した少女が気になったが、切羽詰まった状況が状況だけに俺は本質的な質問をしてみる。

「てことは、さっきの光線もその『悪魔の紅石』^{デーモンズストーン}ってのが生み出したものなのか？」

「そういうことです」彼女は俺の質問に即答し、また次のことを付け加えた。「でも、あれは特別ですよ？ あんなもの、皆持ってたから今頃世界は滅亡してるとしています」

「……確かに」ちよつとした口論でも、悲惨なことになることは容易に想像できる。

ではあれは一体なんだ？　そして、それを持っていたヤツらは——？
「そう。あれはいわゆる、選ばれし者だけが持つことを許された特別な石みたいなものです。そして、ヤツらは——政府の腐れ犬野郎ですよ」

「お……おう。なるほど」俺は彼女の毒舌に少し怯んでしまった。政府に私怨でもあるのだろうか。まあ、いいか。気を取り直して——
「……そうか、残念だ。お前もそんな石を持っているのかと、期待してしまつたよ」

「ああ、私は『悪魔の紅石』^{デーモンズストーン}なんて使えませんよ」

……………え？

どういうことだ？

当然だと言わんばかりの彼女の態度に、俺は混乱してしまう。

「説明不足でしたね。悪魔の紅石って個人がそれに対して念じることで、それは反応します。そこで初めて、『文明の遺産』^{インベーション}は機能するんですよ。でも、私の場合は念じてもそれはなんの反応も示さないんです。——いわゆる、私は『不能者』^{ガラクタ}ってわけです」

『不能者』^{ガラクタ}——また、この言葉だ。

「もしかして『不能者』^{ガラクタ}も知らないとか？　——マジですか？」彼女は俺の同意を確認するとなにを思ったのか、おもむろに身体を密着させてくる。

「えッ、ちょ、お前がマジですか——ッ!？」甘酸の匂いが鼻につく。俺は彼女の色香に惑わされそうで、ドギマギしてしまった。

決して疾しい気持ちがあつたわけではなかったが、俺の期待を裏切り——もとい期待通りに彼女は俺に背を向ける。

ああ、心地の良い双丘が離れてしまい遺憾千万の思いだあ……なんて断じて思っていない！　ただ、気持ちよかつたことだけは認める。

——しかし、そんな複雑な気持ちは、すぐに消え失せることになった。

「これは——なんだ？」俺の目に入ってきたのは、十字マーク——いや、バツマークのような紋章だった。彼女は後ろ髪を手の甲ですらし、俺にうなじを見せつけたのだ。

「なかなか洒落たものでしょ？」彼女の皮肉めいた声が耳を打つ。

「政府が私たちに強制した紋章です。バツマーク、つまりガラクタの人間——『不能者^{ガラクタ}』ってことです」

彼女は乾いた笑顔で、そう言い放った。

「ホントすんごい確率なんですけど極稀に、石になんの反応も示されない人が生まれてくることがあるんです。その誰も望まない幸運を掴んだのが、私たち『不能者^{ガラクタ}』ですね」

俺は彼女の言葉に衝撃を受けてしまう。

「……それってかなり深刻なことじゃないのか！？ 君がさっき、まっとうな人間生活を営むには石が必要不可欠だと言ったよな？」

「まあ、たしかに深刻なことですよ。でも——なんとか生きることにはできるんです。あくまで私たちに反応しないだけであって、大半の人々には反応するんで、その恩恵にすぎれば生活には困りません——例えばテレビジョンにしても代わりにつけてくれれば、私たちだって見られますし、車両にしても自分が運転しなければいい話です。他の場合も同様です。こんな感じで意外と人に頼れば、なんとか生きることにはできるんですよ」

俺の質問に対して、彼女の反応はいたって冷静なものだった。

「……ッ」俺は言葉につまってしまう。

彼女の言葉通りなら、たしかに生きる上では問題はないんだろう。でもこの世界の主な動力源が扱えないってことは、殆どのことを他者にやってもらわなければいけない——つまり、一生他者に依存しなければ生活もままならないってことじゃないか？

もし自分がそんな境遇に立たされたと考えてみたら、とてもじゃないが耐えられそうになかった。

少女は苦笑いをする。「ただ、ホントたまにですけど——見知らぬ人に罵声を浴びせられるのだけは、慣れませんか……。『ガラクタ』、『無能』、『お荷物野郎』、『犯罪者予備軍』、あと、まあ色々……。しかも的を射ている所が辛い話なんですよ。はは……。俺は啞然としてしまう。

——耐えがたい境遇の上にそんな仕打ちを？
そんな不条理があつてたまるかッ。

俺はこの世界をあまり知らない。正しくは、知っていたのだろうが今は知らない。認めたくはないが、断片的に記憶に障害があるらしい。

だから、今の話を聞いて全てを処理しきれたかと尋ねられたら、否と答えるしかない。しかし今の話を聞いただけでも、この世界の異様を感じるには十分だった。

目の前の少女はそれを当然のように話し、あまつさえ許容してしまつていた。

もちろん俺は彼女の苦しみを知らないし、知るよしもない。それでも、言葉以上のものを経験してきたであろうことは想像に容易い。

俺はそんな彼女をここまで苦しめ、しかもそれを認めさせているこの世界に対し、激情が込み上がってきた。

なおも、彼女は俺に同意を求めてくる。

「貴方もそうは思いませんか——？」その乾いた笑顔が俺の胸を刺す。

これ以上は限界だった。

「——もう、なにも言うな」

「……え？」彼女の笑みが停止する。

「俺はそうとは、微塵も思わないッ！」俺はそう断言した。そして憤慨した。

「いいか、人間とは総じて、小勢をいたぶることに夢中になるでしょうもない生き物なんだ。そう——気にしてはダメだ！俺も魔術師だから、よく分かる。そういう輩は、力でねじ伏せれば直ぐに

静かになる。方法はなんだっていい。ヤツらが情眠を貪っている間に、その寝首を掻けばいい。毒を盛って、内側から破壊するのもいい。火でくべるのも一興だ。正攻法なんて必要ない。ただし、ここで重要なことはやられる前にやり尽くせ、だッ！徹底的に痛めつけることで、ヤツらを屈服させる」俺は鼻をフーフーと荒らげながら、捲し立てる。「なんなら代わりに魔術師の俺が手伝ってやろうか？遠慮することはないぞッ」

つい興奮気味に口走ってしまい羞恥心に駆られてしまったが、少しの後悔もなかった。

——俺はそういう連中が大嫌いだった。

大昔では魔術師が標的にされていたと聞いている。そのせいで、多くの同胞が犠牲になってしまったとも。

彼女の代わりと言わず、神の鉄槌ならぬ魔術師の鉄槌を下してやるうか。

そんな俺の意気込に対し、少女はなんと——

「ぷっぷぷふ……ふあはあはあっ！」

笑いやがった。

「——なッ!?」突然の彼女の大笑いに、俺はみつともなくも顔面紅潮してしまう。

「な……な、なにをそんなに笑っているんだッ!?何が可笑しいッ!?俺はお前の為だと思って言っただのにッ!?」慌てふためく俺。

「……くふふふうっ」なおもケタケタと腹を抱えて笑う少女。

信じられない……なんてヤツだッ。好意がこんな形で返されるとは

……。

「……ぷふうっ」

よし……てめえは俺にケンカを売った。なら俺はそれを買うまでだ。まずは、目の前の下劣な輩に鉄槌を下さねばなるまいな……!

俺はそう勇断すると、曲がりなりにも男性特有である武骨さを備えた拳を少女に照準を合わせる。

「くうふふつ。ふう……ぷふつ……す、すいません。予想もしなかった反応に、思わず嘖いてしまいました」

ふむ、どうやら彼女は運のいい人間だったようだ。笑いが止まるまであと少し遅ければ、自分の愚かさを呪っていたに違いない。俺は、握り締めていた拳の力を緩めた。

「はあ、もう大丈夫です。久しぶりにこんなに笑いましたよ。——なかなかの笑いの才能をお持ちで」

——なおも彼女はケロツと失礼なことを述べやがる。

「いやいや、別に笑わせるつもりは毛頭なかったんだが!? お前はホントに見かけによらず、酷いやツらしいな。というか、そんな才能いらんわツ!」

俺は傷ついた心を押さえながら、彼女を非難する。
がツ!

「まさか無意識で!? それはとんでもない才能ですよ! 貴方はもつと笑いの才能を伸ばすべきだと思います。ホント、もつたいないですよ?」全くもって反省の色が見当たらなかった。

「——ッ。だ、か、ら、別に笑わせるつもりなどなく、俺は真剣に

——
「まあそれはともかく——」

まあそれはともかく。そんな彼女の非情な一言で、俺の談判は呆気なくも崩れ落ちてしまった。

くう。負けるものか! 目の前の冷徹な女に俺は決して屈しないぞッ! と誓う俺であったが、米粒ほどの自信もなかった。

そんな俺の苦悩も露知らない少女は、言葉を続ける。

「まさか、あんな反応をされるとは夢にも思いませんでしたよ。普通、『失敗作』^{クラシカ}って聞いただけで大抵は見る目が変わるっていうのに、貴方ときたらまったく逆の反応をするなんて——」彼女は満面の笑みで、俺を見つめる。

「本当に笑えました」

一瞬、またも俺を馬鹿にするのかコイツと、憤慨しようとしたが踏みとどまる。

今回はなんというか——彼女の天真爛漫の笑顔すごく魅力的に感じ、止めてしまうには勿体無く思ってしまったからだ。

それでもなんだか釈然としないことに對し、俺はブスツとしかめっ面をしてしまう。

「ふふ、可笑しな人」彼女は唇に指を添えながら、ほほ笑んだ。

「……ッ」

なにが可笑しいのか全くもって理解できなかったが、そんな表情もできるのかと不意打ちを食らった俺は、不覚にも少女にドキッとしてしまった。

誓つてすぐの敗北。屈してしまった自分に嫌悪感。どうやら俺は、この少女には敵わないようだ、畜生。

「——でも、本当に記憶が無いんですね。じゃないと『クランカー失敗作』を擁護する言動をするはずがないですもん。しょうがないので、貴方がこの世界に對して無知であるということは信じてあげますよ」少女はやっぱり少女だったようだ、こんちくしょう。

「……ここはとりあえず、感謝するべき所なのか？」

俺は込み上がる感情をぐっと抑え込み、形式だけの『ありがとう』を行う。

相手が一見華麗、性根は黒い少女であろうとも、今はとにかく話を進める為に尽力を尽くさなければならぬのだ。そう、広大な心を持つている俺だからこそその判断なのだ。彼女に屈してしまったとか

——そういうのは一切関係ない、うん。

「はい、どういたしまして」彼女はいけしゃあしゃあと応え、直ぐに神妙な顔つきに戻る。

「そのくせ、悪魔の紅石の使い方は知っている。なんとも奇妙な記憶障害ですね、それ」

「ん？ いや、知ってるはずないだろ」

「——は？　じゃーどうやって先程の爆発を起こしたんですか？」
「え——だから、俺はそんな紅石を使わなくても魔術をだな——」
「さすがにそれは妄想ですよね？」彼女の切れの良いツツコミ入る。
「そういう腐れ戯言はもういいんで、本当のことを言ってくださいよ」

鼻で笑う彼女に俺は青筋を立ててしまいが、我慢をする。

そう——もう一度言うが広大な心を持つている俺はむやみにことを荒らげ、不毛な争い事は起こさないのだ！

ここは正念場だぞ、俺！

「いや、だからだな——」

それにしても、どうしたものか。言葉に詰まってしまふ。

記憶に問題があるのは認めるしかなかったが魔術という存在、そして、それを行使する自分が魔術師であるということはどうしても否定できなかつたし、するつもりもなかつた。

根拠はなかったが、確信的な想いがあつた。

だが面倒なことに俺にはこの少女を納得させるだけの言葉を持ち合わせていない。

そしてまたまた面倒なことに、「だ、か、ら、なんですかあ？　はつきり言つて下さいよ——！」と彼女の容赦ない問い詰めが俺を苦しめる。

——はあ、しょうがないか。

溜息をついた俺はあまり余計な魔力を消費したくはなかつたがいた仕方ないと覚悟を決め、

おもむろに地面に落ちていた石ころを拾い、空中に放り投げた。

そんな俺の行動を彼女は馬鹿にしたような目で見つめながら、悠然と構えている。

「はあ……ホント貴方はなにをしているんです——」
しかし。

「——かあ！？」

そんな彼女の物腰も、一瞬にして砕け散ることになった。

空中に放り出された石ころは弧を描きながらそのままあっけなく地面に打ち付けられる——予定だった。

だが、実際には重力に引き寄せられてしまふというところで、その石ころは砂塵へと急変し、風と共にどこかへと舞っていつてしまったのだ。

「今のが——魔術」俺は茫然としている彼女を見下ろしながら、呟く。

内心少し不安ではあったのだが思った通りに魔術が扱えて安心した。「これで俺が言ってることは信じてもらえるか？」

彼女は俯きながら少しの間黙っていたが、面白くないことに直ぐに顔を上げ、いつもの彼女に戻ってしまっていた。

「いやいや、信じてもらえるか、って？ 今のは不意を突かれて、ほんの少しビクリしただけですよ。いや、ホントに……うん。――

それに貴方がそんな力を持つていることは既に知っているわけで、貴方の言葉を私に信じさせるには明らかに紅石を使わないで、証明してくれないと話にならないです——分かりますか？」

ピシャリと言い放つ彼女に感心を覚える。しかし、俺には余裕があった。

一見、悠然とした態度で臨んでいる彼女ではあったのだが、よく観察してみると汗ばんだ額、そこから伝わる一筋の滴。そして、なんと——手先がプルプルと震えているではないかッ！

なんだか急にこの少女が、ものすごく可愛く見えてきた。実際の、この容姿でこんな反応をされたら、誰もが『イチコロ』になつてしまふのは仕方がないことだ。

俺は楽しくなってきた。

「ああ、もちろんノー問題さ！ やってやる」

俺はそう彼女に告げると、身体のだこにも紅石を身に付けていない、衣服の中にも忍ばせていない、ということ十二分に確認させ、もう一度同じ魔術を披露してやった。

「うそ……でしょ？」

ああ！ 彼女の完膚なきまでに敗北した表情を拝むのを、どれだけ待ち望んだことか！

開いた口が塞がらない彼女を見て、歓喜に身を震わせてしまう。

俺はもう一度、彼女に問いなおしてみた。すると――

「うん……。未だに信じたくはないけれど……これは……信じるしかないでしょう……？」

彼女は動揺を隠せないといった表情をしながらも、全面的に俺の訴えを認めた。

――そう、この少女に俺は勝利したのだ。

ふははッ。この感じだ。こうでなければいけない。これでやっと、元の主従関係に戻れたというものだ。

今振り返ってみると、どれだけの苦汁を嘗めさせられていたことだろうか。よくあれだけのことを耐えきったものだ。

俺は自分自身を褒め称えたかった。

「おい、腐れ野郎。……いつまで悦に浸っているんですか？ ぶっ飛ばしますよ」と彼女は物凄い形相で俺をじっと見据えているが、羞恥に頬が染まり愛くるしい。

はあ……なんて無粋な少女だろうか。少しぐらいは悦びを噛み締めさせてくれよ。まあ、今の俺ならばどんなことでさえプラスのベクトルへと変換可能だから、別に気にはしないが。

「おっと、すまない。で、なんだ？」

「調子に乗ってますね……。まあ、いいですよ。いつまでも馬鹿面を晒せばいいんです！」彼女はそう吐き捨てると、そっぽ向いてしまった。

少し意地が悪すぎたか？ 以外と少女は繊細な人格のようだ。――しょうがない。

俺は互譲の精神の下彼女に謝り、協力的な態度を見せた。俺は不毛な争い事は望まないのだ。

「ふ――……。」「彼女は一息をつく。」「――とりあえず、話を

戻しますよ？ え——つと、で、その力が貴方の言う『マジュツ』
なんですね？」

どうやら彼女は機嫌を戻してくれたようだ。良かった。

「ああ、そういうことだ。正しくは『魔術』だが」

「魔術……」少女は少しの間考える。「では、その魔術なる力は、
どんなことができて、どんなことはできないんですか？ できるだ
け詳細に教えてください。もしかしたら、今の状況の打開策が思い
つくかも」

ようやくこの少女も、俺の力がこの状況下でどんなに重要なことが
理解し始めたようだ。

今まで誰にも行わなかった分、この少女に魔術を説明すると思うと
心躍るような気分だ。

俺は魔術について存分に、饒舌に語り始める。

「うむ——魔術とは自然科学に基づいていて、特定の条件を満たし
ていれば基本的にはどんなことでもできる。だが、逆に言えば条件
を満たしてなければどんなに簡単な魔術でも行使することはできな
い。例えば、炎を出すにもそこに可燃物ないし連続的な酸素の配給
がなければ出来ないってわけだ。また中には俺にもできない魔術も
あるし、魔力も無限ではないからそう何度もできるものでもない。
あとかなりの集中力が必要で結果、行使した後の脱力感は酷いもん
だ。こんな感じで多くの弱点がある魔術ではあるんだが、まあ——
それでもゆうにお釣りが来るぐらいの力が魔術にはある」

俺は得意げに「フフン」と鼻を鳴らすと、不意に少女の猛烈なタツ
クルに襲われた。

「それって——最強ですよね!？」彼女は俺の両肩を鷲掴み、大声
を上げる。「ようは条件さえ合えば、状況に合わせて適当な魔術が
使えるってわけですよね？ 紅石の場合は、その一つに対して一つ
のことしかできないのに……。もしかすると、ヤツらを出し抜くこ
とも可能かも！」

ドキィッ。ちよっとというか、かなり顔が近いんですが！

興奮している彼女は恥ずかしくはないのだろうが、俺はとても恥ずかかった。

彼女の爛々とした瞳がすごく魅力的で、ずっと鑑賞していたという気持ちが湧いてくる。しかし——はあ、残念だ。彼女に現実を見てもらわなければならない。

「実際、魔術は最強だと思ってたよ、ヤツらに出会う前は。正直、あれは——反則もんだ。お前のさっきの話を聞く限り、どうやらヤツらは『悪魔の紅石』を使って魔術を行使していたようだ。しかもヤツら自身の魔術じゃないから詠唱も必要ない、魔力も必要ないから半永久的に行使できる。極めつけはどんな状況でも紅石さえ持っていれば、その力を使うことができてしまう。まさに自然の摂理から外れた反則技だ」

俺は両肩をすくめながら、お手上げだという素振りをする。

俺の言葉に、彼女は落胆の表情を隠せなかった。爛々と輝いていたその瞳が見る見るうちに輝きを失っていくのが、手に取るように窺えた。

俺は罪悪感に苛まれる。一時的とはいえ、彼女に絶望という感情を与えてしまった。

だが、俺には現実としての希望もあった。

「ただ——お前の言った、一つの紅石に対して一つの力っていうのが本当ならそこに付け入る隙があるかもしれない。俺の場合は条件さえ満たしていればどんなことでもできるからな。ここだけは俺の方が勝っているはずだ」

俺は力強く言い切ると、意気消沈としていた彼女も徐々にその息吹を取り戻していく。

「……なるほど。現状は厳しいけど、光明がないわけではないんですね」

彼女は二つの拳を握りしめながら、頷く。

なんというか、彼女はずるいと思う。いつもは人を小馬鹿にしたような態度を取るくせに、そう思うと素直になったりもする。

これはなんだろう——ギャップ萌えというヤツか？

俺がそんなくだらしないことを考えていると、少女は唐突に言ってきた。

「冬桜ミフユ」

「？」

「私の名前ですよ。名無しでは色々支障があると思うので」

「——なるほどな。確かに呼ぶ名があった方がいい」

俺は少しだけ間を置く。一瞬、自分の名前を言うべきか躊躇してしまっただからだ——魔術師にとって無暗に自らの名を語るとは愚行にあたる。

対して、目の前の少女もとい冬桜ミフユは固唾を呑みながら待ち構えていた。

ならばしょうがないと、俺は決心する。「ごほんッ。名を名乗られてこちらが名乗らないわけにもいかない。この優秀な魔術師である俺は——………」

——？

と、ここで俺は何か重大なことを忘れているような気がした。

「どうしました？」

冬桜ミフユはじれったい気持ちを露わにさせ、俺の顔を窺ってくる。

「あ——……ちよつと待て。今何か脳裏に過ったんだが……しかも、それがとてつもなく重要な気がするんだ。ただそれが何なのか分からない……」

分からない。一向にその正体は何なのか掴めない。しかしそれは確かに、とてつもなく重大なこと。——決して疎かにしてはいけないこと。

それならば、と俺はまず自分の立ち位置を再確認してみる——人は思っている以上に自分の周りの状況を把握しきれていない傾向にあるからだ。

俺は今工場施設内にいる。隣には冬桜ミフユがいる。ここで彼女に世界の状況と、それに対して俺の記憶の錯誤を指摘される。その後俺は彼女に魔術たるものを見せ、教え、腰を抜かせる。ふふふ——あれは傑作だったな。あの時の彼女の表情と言ったら……と、これは関係ないか。そして、今に至る？——いやいや、その前に何故俺たちは工場の中にいるんだ？

ああそうそう、俺たちは敵に追われていたんだ。だから俺たちはこの工場施設内へと逃げ込んだ……。

「や、やばいぞ……」

俺たちは致命的なことを忘れていた。

「……？」冬桜ミフユは怪訝な顔をする。

俺は自分自身を罵りたかった。

——油断が過ぎたと。

どうやらとんだ茶番劇を繰り広げていたようだ。

気が付いた時には、俺たちは周りを完全に囲まれていた。

俺たちが建物内で茶番を繰り広げている間に、敵——つまり冬桜ミフユの言う政府の追手たちは、着々と包囲網を築いていたのだった。俺がとつさに魔術を行使し付近に神経を尖らせた時には既に遅く、幾人もの追手たちが建物の周辺を包囲していた。

「どうしたんですか？ なにか、とんでもない過ちを犯してしまっただかのような酷い顔をしていますけど？」なおも状況を把握していない彼女が羨ましい。

俺は彼女に説明をした。

「……………っ！」

彼女の人を茶化したような表情は一瞬にして凍りつき、俺同様の酷い顔へと成り下がってしまう。

こんな憂慮すべき事態であるというのに俺は、なんだか俺たち似た者同士か？などと、くだらないことを思ってしまった。

にしても、どうしてこんな単純なことを忘れていたのだろう。

あの状況下で追手たちが俺たちを見逃すはずもなく、ヤツらの気配を感じない時点で気付くべきだった。

長時間話すばかり、頭からヤツらの存在が抜け落ちてしまったのであろうか。

俺は猛省する。

しかし、こうなってしまうては仕方がない。後悔など後からいくらでもできるわけで――俺は今、しなければいけないことに集中しよう」と決意する。

まずは、取り乱しているであろう少女を落ち着かせ、次の行動について話し合わなければ。

俺はそう思い、彼女を落ち着かせるために彼女の方向へと身体を向き合わせる。――が、どうやら俺の杞憂だったようだ。

冬桜ミュフは既に冷静さを取り戻し、次なる打開策について思案を巡らしていたのだ。

俺は彼女の不屈の精神に舌を巻くとともに、なんとも男心の分からないヤツだなとついぼやいてしまいたくなる。

「はあ……、一生の不覚とはこんなことを言うんですね」

彼女は深いため息をつきながら、地面を見つめる。

しかし、先程の俺の話を聞いた彼女には諦めの色など見当たらなかった。

「でも、今は貴方の魔術を信じて行動するしかないですよね？

――よし！ 私は何をすればいいんですか？ もう少し時間があればもっと考えることが出来たんですが、そもいかなので貴方を主導に作戦を練っていきましょう」

本当に優秀な少女だ。色々と思うところはあるのだが、今回に限っては隣に居るのが彼女で良かったと切に感じた。

俺は彼女の旨を了解し、頭に浮かび上がった案を説明していく。

最初はどこまで本気なのか判断しかねていた彼女ではあったのだが、俺の説明を聞き終わった後にはその頬が吊り上がり、妖しい笑みを

浮かべていた。

俺たちは期待と不安を抱きながらも、誓い合う。

さあ、これからヤツらにひと泡吹かせようじゃないか。

俺は全神経を集中させ、詠唱を行う。

目の前には想像した通りの光景が広がっている。

幾人もの兵士が隊列を成す。——兵士と言っても別段主だった武装はしていない。しかしその拳には妖しい光を放った指輪が一人残らず装着され、こちらに形容し難い威圧を感じさせる。

徐々に敵の数が増えてくる。こちらが姿を現したことで包囲の必要無し、と考えたのか敵方は一か所に結集しつつあった。

俺は少しずつ足を進め、彼らの方へと向かう。

途中「停止しろ！」という警告が辺りに飛び交うが、気にも留めずひたすら前へと進む。

一定の距離を達したところで、ふいに、敵の一人が腕を挙げた。と同時に、一斉に数え切れないほどの拳が俺へと照準を定める。

敵の有無を言わさない表情が窺え、これはただの脅しではないことが感じられた。

しかし、無論そんな言葉に耳を貸すはずもない俺はただひたすらに目的を遂行するため、じりじりと足を進めていく。

そして——敵の腕が振り下ろされた。

視界には銀色の世界が広がり、あまりの光景に神々しさまでも感じてしまう。しかし——それも束の間、神の裁きに貫かれた俺の身体の奥深くから形容しがたい熱が込み上がってくる。

徐々に熱度が増す俺の身体は最後に、胸元から膨張してくる何かを感じた刹那——ボンツという音を立てて呆気なく爆発してしまった。爆発音の余韻が残る中、一人の男が呟く。

「むやみに我らに向かってくるとは馬鹿なヤツだ——」

「……くふう。ああ、ホント馬鹿なヤツらで助かった」

俺は消滅した自身から目覚め、胸を撫で下ろす。場所は工場内。

「まさかあれがただの泥人形だとは思いませんよね」これは冬桜ミユフだ。

「案外遠くから見ると気付かれないもんだ。それに魔術で動かしていたからなおさらだ」

「最初貴方に説明されたときは驚きましたよ。泥人形を敵に向かわせ、敵に攻撃させる。そして——予めその中に充填させていた工場中の臭気を蔓延させるとは」

「ふふふ、我ながら妙案だった。今頃あいつら、あまりの匂いに大変なことになっているはずだ」

そう、俺たちの作戦とは俺を扮した泥人形を登場させ、それを敵に攻撃させる。そして、予め魔術により工場に漂っていた全ての臭気を集め、凝縮させ、人形に充填していたのだ。

当然、人形が爆発すればたちまちその臭気が辺りに蔓延し、凝縮された強烈な臭いが敵を襲うっていう寸法だ。そして、その間に俺たちは混乱に乗じてここから逃走するのがこの作戦になる。

「でも最後まで逃げ切れますかね？ この作戦って結構力押しな感じがして、足の速さが重要になってくると思うんですよ。その点私は問題ないんですが——いかせん貴方の足ではやはり……」

そんなこと分かりきっていることだ。

「う……うるさい！俺の足が遅いんじゃない、お前が速すぎなんだよ！それに……そう！俺には魔術があるから、最悪魔術でカバーすれば問題ないだろ」という先程のやり取りを思い出しながら、もう一度彼女を説得する。

「まあ、ここは魔術師である俺を信じてみろ」

俺はそう力強く言っと、彼女の手を取り先程の敵の攻撃で生まれた壁の穴から外へと打って出た。

外の光景は予想以上に混沌としていた。

化学物質などの有害なものが含まれた臭気を吸いこみ、咳きをする者、涙を流す者、鼻水が止まらない者たちなどで辺りは溢れかえっていた。

もちろんこちらは俺が、臭気を吸いこまないように魔術でコントロールしているから問題はない。

「よし、行くか——とその前に」とここで、俺は思い出したかのようにある魔術を詠唱する。

瞬く間に辺りは砂塵に包まれる。

よし、これで俺たちの姿が見えることはなく、安全にここから抜け出すことができるだろう。

「さあ、今度こそ行くか」俺は彼女に再度確認を求め、砂塵の中へと歩み出した。

道中、こちらは視界を確保できていたためさほど苦もなく前へ進むことができ、混乱に陥っている敵の動向にさえ注意を払えばよかった。

ただ難点があったとすれば、身体のおちらこちらに砂がくつき気持ち悪くしてしまうがなかった。

視界を確保しているように俺が、魔術で砂塵をコントロールすればいい話ではあるが、ここは少しでも魔力の消費を抑えておきたい——というわけで我慢する。

備えあれば憂いなしというわけだ。

不意に冬桜ミフユが独り言のように感嘆する。

「……魔術って凄いですね。まさかここまで上手くいくとは思いませんでした」

「——今回は環境が俺たちに味方してくれたに過ぎない。じゃなければさすがの俺もあの人数は対処できなかっただろうな」

実際のところ冷や汗もので、包囲されたことに気付いた瞬間もう終わったと正直思ってしまった。

「へえ——……らしくない回答ですね。てっきりいつものように」

ガハハッ！ 魔術師である俺に不可能などないのだ——！』的なことでも言うものかと」

「失礼な！」俺は眉間にしわを寄せる。コイツはどうも勘違いをしているらしい。

「俺が傲慢に満ちた人格を持っているとも思っていたのか？ 確かに自身に誇りを持ってはいるが愚かものではないはずだが！？」

「——っ！ それに対して驚愕の一言です」

まだ言うか、コイツは！

「ったく。たまに謙遜なことを言ってみれば、お前というヤツは」

「たまに謙遜なことって……。では自分が傲慢に満ちた人格だということを認めるわけですね？」

「……」

そうこうしているうちに俺たちは砂塵から抜け出すことができた。

隣でニヤニヤと下品な笑みを浮かべているヤツなど俺は気にも留めない。

にしても、予想よりも遥かに早く抜け出すことができた。なんだが拍子抜けしてしまう。

冬桜ミユフの話を聞く限り、敵が有している悪魔の紅石はこの世界で絶対的な力を持っていて、誰も歯向かうことができないらしい。今までもろくに抵抗というものを受けたことがないのなら、ヤツらに油断があってもおかしくはなかった。そこを上手くつけ込めたようだ。

なおも狼狽している敵に背を向け、俺たちは早々に町の外へと向かうとした。

しかし、油断大敵とはよく言ったものだ。

「——ッ！？」突如、背中に走る悪寒。

魔力を感じた時には既に光線が目前に迫ってきているところだった。俺は間一髪コンクリートの壁を創り、直撃を避けることに成功するが完全にその衝撃までは防ぐことができず、俺たちは成す術もなく地面に叩きつけられてしまった。強烈な衝撃により身体中から悲鳴

が上がるとともに、強制的な視界の揺らぎに吐き気を催してしまう。
「——つつつ。あ………だ、大丈夫ですかっ!？」

「あ、ああ。なんとか……な」

俺が反射的に盾になったおかげで、幸いにも彼女はそこまで傷を負っていないようだった。

俺も直撃は避けることが出来た為、なんとか致命傷だけは防げた。

——まあ、全身悲鳴を上げてはいるが。

「あ——やっぱりそう簡単にはいかないかよ」

魔力を感じた方向を遠目で見てみると一人の兵士が狂ったように喚き散らしているのが分かった。どうやら気が動転するあまり見境なく攻撃したのが天文学的確率で俺たちに直撃した、としか考えられなかった。

俺は舌打ちをしながら、ことの深刻さに頭を抱えてしまう。

不意の攻撃に、俺の集中が途切れてしまった。

すなわち、

俺たちを庇護していた砂塵が去ってしまったのだ。

一度魔術を詠唱しただけで継続的に起こるものもなく、連続的な魔力の配給がなければいけない。しかし、今、その配給が止まってしまった。

結果——砂塵は去り、俺たちは敵から丸裸の状態になってしまったというわけだ。

生気が薄れていく俺たちを対照的に、息を吹き返していく敵方。視界を塞ぐものがなくなった今、目標が姿を現し、彼らの土気が上昇していく様はこちらからすれば朽ち果てた屍がみるみるうちに蘇ってくるようで、悪夢のような光景だった。

数えきれないほどの殺気が俺たちに向けられてくる。少しでも動けば殺すともいうような鋭い目つきに俺たちは一步も動くことができない。

——やばいやばいやばい。体中からふつつつと嫌なものが湧き上がってくる。

何か——何か良い打開策はないのか！？

そんな俺の切望もむなく、一向に頭には焦りと虚脱感しか浮かんでこない。

というか普通、乱射した攻撃がピンポイントで直撃するものなのかッ！？ 運が悪いのにも程があるだろ！

どこぞの術師が呪いをかけたんじゃないかとさえ思えてくる。俺はこの状況を作った架空の対象に無性に腹が立った。

だがそれ以上に——この時、俺は腸わたが煮えくり返るほどの怒りを覚えてしまっていた。

仁王立ちしていた。

それはもう立派なほどに。風格を感じさせるほどに。

冬桜ミフコは仁王立ちしていた。

なんだよ、それは……。こんな、こんな最悪な時に何て面してやがる……。悠然と、凜とした、貫禄ある、気品のある、でもそこに弱さは微塵も感じられなくて、威風堂々とした表情を、どうして今できるんだ——？

なに、一人で無我の境地に達してるんだ。そんなに俺のことが信用できないのか？

——くそッ！ コイツは会った時からそうだった。

風貌からは想像できない程の強さを持っていて、冷静沈着に物事を考える。現実的で、この世界を諦めているようにも感じられる。

彼女は——あまりにも少女からかけ離れてしまっていたのだ。この世界が今の彼女を作ってしまった。そうしなければいけない何かがあった。

俺はそれが気に喰わなかった！ 個人の思いは関係なく、否応にも気質を矯正しなければいけない環境を作ったヤツらが。俺は深く同情した！ そんな環境を余儀なくされた彼女に。

少女は少女らしく、振る舞えばいい。少女は嫌な時は嫌だと言えば

いい。悲しい時は悲しいと言えいい。助けて欲しければ、叫べばいいんだ。

だから——……頼むから、そんなに簡単に命を諦めるんじゃないやねえよッ——！

「——止まれッ——！」俺は咆哮する。「これ以上近付いたら、コイツを殺すぞッ！？」

「……………は？」

冬桜ミユフは俺に首を絞めつけられながら、驚愕する。

「ちよっ、貴方はどうしたらそうなるんですか！？」

俺は後ろから彼女の首を腕で絞め付けながら「うるさいッ！ お前も黙らないと命はないぞ！？」と有無を言わせない叫びで、彼女の驚きを無理矢理押さえ付ける。

俺の常軌を逸した行動に敵も動揺を隠せず、どよめきが起きる。

——思った通りにいった、か？ 俺は一か八かで彼女を餌に脅しをかけてみたが、敵の反応を見る限りどうやら上手くいったようだった。

これだけ追跡に人数を割いてるんだ。どうせ主人に彼女の身柄を確保するように命令されているに違いない。それに今思えば、紅石の力を使えば敵はいつでも攻撃できたはずだ。俺の隣に彼女がいたら、なかなか手出しが出来なかったのだろう。

——以上が俺の思惑だった。別に勢いだけで行ったわけではなく、れっきとした作戦だと言えなくも、ない。

まあ、結果よければ全てよし。——素晴らしい言葉じゃないか！

徐々にだが後退していく俺。

もちろん敵への牽制も忘れない。少しでも動こうとすれば、俺の掌が彼女の頭に添えられる。

敵の喚き声が辺りを飛び交うが、そんなことは気にしない。というか、そんな余裕が無かった。

敵の圧倒的な圧力に急激に消耗する精神。

敵は狼狽しているがこちらは所詮、孤軍奮闘だ。結局のところ、こ

ちらの命は相手のさじ加減によって左右するわけで、心の臓を鷲掴みされていると同義だ。

不意に敵方の挙動が一転する。誰かと連絡を取り合っていたようだった。だが、それが終わったらしい。

「……ッ」
心臓が絞め付けられる。

両方始末しろ。——そう聞こえた。

いよいよもって、『死』のワードが脳裏にちらつき始める。

「ちよつと……あと、ちよつとで……ッ」

いつの間にか額に浮かぶあぶら汗。

それが頬を伝わる。

そして――

冬桜ミフユの胸元にポツ…………と滴り落ちた。

「うあ ああああああ ああああああ ああああああ ああああああ ああああああ
あああああああ ああああああ ああああああ ああああああ ああああああ

「ッ！！」

俺は発狂した。

「……ひっ」
怯える少女。

「……」敵の一人が眉をひそめる。

無声の号令の下、一斉攻撃された――

今度こそ、生身の身であればひとたまりもないであろう絶対的な力が俺たちへと向かって来る。

その場にいた全員がこのくだらない追跡劇も幕を閉じることだろうと確信した。少女は瞳を閉じ、自らの生涯の終わりを待つ。俺も瞳を閉じ、終わりを悟る。

詠唱した。

俺の詠唱に呼応した大地は瞬く間に盛り上がり、巨大な防壁へと化

し、敵の攻撃から俺たちを守る。それに比例して、敵が足を付けていた地盤が急速に沈下していく。

「——ッ!?」驚きが場を支配する。

俺たちの前方には優に三十フィートはあるだろう巨大な壁が聳え立っていた。

「……間に合ったあ……ッ」俺は張り詰めていた緊張の糸が切れ、地面に尻をついてしまう。

「へっ……へえ？」まだ状況を消化しきれていない冬桜ミュフは呆気にとられながら、突然生まれた巨壁を見つめる。

「俺たちは助かったんだよ」

「え……でも、ヤツらは悪魔の紅石を持っていて……この壁だって直ぐに破壊されるはずでは……?」

彼女の言うとおりこの重厚な壁を持っても敵の攻撃は凄まじいものがあり、直ぐに綻びが表れた。

だが——

「岩石を熱すると思う?」

「——あっ」

「およそ千度でそれは溶ける。つまり溶岩と化すんだ。だから——俺は暗赤色へと染め上がる壁を眺める。「ヤツらは自分らの攻撃で自らの首を絞めたわけだ」

亀裂の間から溢れ出す溶岩が重力の法則に従って、敵方へと流れ始める。その灼熱の流動体は容赦なく敵方を襲う。

「さっきのは、ある程度距離を取らないとこっちにも飛び火するだろ? だから——まあ、お前を利用しなければいけなかったんだ」俺は少し申し訳なさそうに冬桜ミュフを一瞥してみると「……じゃあ私たちが助かったんですね?」彼女は俺の言葉が聞こえていないのか、巨壁が溶岩へと変わる様をじっと見つめながら俺に質問してくる。

「ん? ……あ、ああ」

「本当に?」

「ああ、本当だ」

「……本当に、ホント？」

「——だから言ってるじゃないか。俺たちは助かったんだ」

俺は彼女の見が分からず少し混乱してしまい、首を傾げると――

「――……った！ やった！ す、凄い………ヤバ凄いじゃないですかあ――！！」

うえ！？ 急に身体に衝撃が走る。

――えッ、いきなり俺に飛びついて来た！？ 彼女の驚くべき行動に俺は面食らう。

どうやら歓喜するあまり――何というか、大事なタガらしきものが外れてしまったらしい。

「こ、これってホントに凄いことなんですよ！ ヤバイですよっ！？ 未だに信じられないですよ！――さすが優秀な魔術師さんですね、見直しました！！」

「……………ッ」

――まあ、なんだ。別に彼女が嬉しさのあまり理性を失ってしまったことに対しては何も言わない。豹変っぷりにもなんてことはない。さあ、一緒に、存分に歓喜し合おうじゃないか。

だが――その……あれだ。……………女性特有の膨らみを押し付けるのは……駄目だろッ。

――ッ。いや、別に興奮しているわけじゃ、ない！ ただ……何か嫌なものが湧いてくるというか――そう！ 生理的反応はそうもいかない、のだ！

これは必然と言つべきもので、これを否定する者は偽善者と言つ他ないだろう。

しかし。

抗うことなく、場に流されてしまうのも愚かだと言える。俺の本意でもない。

まあ、俺ぐらいの魔術師になると自我を統制するなど容易いものだ。――え？ そんな油断していいのか？ 抜かりはないのか、だ

って？ くッ、何を愚門を……。ああ大丈夫だ、問題な――

俺が甘かった。そんな俺の油断を突いて、冬桜ミフユは執拗に余りある双丘を不躑に擦り付ける。そして、爛々と輝く彼女の情熱的な瞳が相まって俺は思わず――

「あッ――！！」

序章の次。つまり、一章になるかな、うん。(後書き)

あざした！

二章！

次第に照度が増す視界。やっとの思いで入り組んだ工場地帯から抜け出すことができた俺たちは、街灯の明かりの強さに目を細めてしまふ。

少しずつその輝きにも慣れ、目をしばしばさせてみると光景が広がってきた。町は平穏だった。

顔を赤めて談笑する者、お互いの腕を組むカップル、外食後家路に向かう親と子どもが大通りを行き来している。

先程の出来事がまるで嘘かのようにだった。

通りに設置されている時計を一瞥すると、思ったよりも時間が経っていないことに驚く。それだけ先程は切迫した状況だったのだろう。俺たちはあの後直ぐにあの場から立ち去った。いつ何処でまた敵が現れるか分からなかったし、少しでも早く安全な場所に身を落着かせたい一心で、力を振り絞った。

そして、今やつと町の中心部へと戻ることができたわけだ。

俺は頬にできた巨大な瘤をさすりながら、冬桜ミフユを睨みつける。

「……なんですか？」彼女も負けじと睨み返してくる。

「お前に殴られた頬が非常に痛いんだが、どう思う？」

「そんなこと知りませんよ。……というか、貴方がとんだ変態野郎だったとは思いませんでした」

彼女はまるで汚い物を見るかのように俺を睥睨する。

「くッ……どの口がそう言える！？　そもそもお前が急に飛びついて来たのが全ての原因なんだ。まったく、女性が軽々しく抱擁なんてするもんじゃないぞ。……こういう人間がどう呼ばれるか知ってるか？」俺は適切な言葉を探し、頭上に電球が浮かび上がる。「――

――そう、痴女………ヒッ」

俺は思わず悲鳴を上げてしまふ。

般若のような形相をした彼女が、今にも襲いかかって来そうな勢い

だった。

「あ、あれは……！ 貴方が無理矢理抱きついて来たんでしょっ！
？ …… 私はどうにか抵抗を試みたけど、男性の力には敵わな
かった……！ ああ、女性である自分が悔しいっ！」
彼女はそう言いながら、顔を紅潮させそっぽを向く。

「そんな馬鹿な…… 事実を隠蔽しようとする悪意が感じられる！？
——くッ、俺は再申立てを所望する！ 権力に断じて屈するもの
か！ ——というか、お前の方が力強くな？」

般若再来。

「犯行を認めますか？ …… それとも『死』？」

「認めまスッ！」

父さん母さん、冤罪はこうして生まれるのですね。

「何一人でぶつぶつ馬鹿なこと言ってるんですか？ 早く行きます
よ」

——俺は素直に冬桜ミフユの後に続いた。

「——多い。それにしても人が多くないか？」

早く町から出たいというのに、なかなか前に進めないほどの混雑さ
に苛立ちを感じてしまっていた。先程から何度肩をぶつけ怒鳴られ
たことか。そんな俺を対照的に隣ですいすいと難なく前進する彼女
の身体能力が恨めしい。

「え——つと、敵に見つからないようにあえて人混みの激しい大通
りを選んだんですが……。それに町の外まで一直線ですし。も
ちろんそれを承知の上で私に従っているものだ——」

そんな俺の不満に彼女は少し驚き、大部分呆れた感じで答える。
なるほど！ 確かにこの人混みでは容易に俺たちを特定できない。
それならば、少し時間が掛かるうとも安全な道を取るのが賢いとい
うものだ。

もちろんそんな内心を赤裸々に告白するはずもなく――

「も、もちろん分かっていたぞ？　ただ、予想以上に人が多くてお前もきつと悪態をつきたかったはずだ。しかし自分が選んだ手前――言いづらい、うん。ならばこそ俺は利他主義的考えの下、代わりと言ってやつたん……だよ？」

俺はどうか最善の言い訳を言うことに成功した――が、流石は冬桜ミフユ。瞬時に俺の嘘を見破り、彼女の十八番である人を馬鹿にしたような溜息をついた。

――くッ、負けらんねえ！

俺はすぐさま、さらなる追撃に備え臨戦態勢に移る。

「何やってるんですか……。はあ、本当に貴方という人は――」とここで彼女は急に視線を移し、黙り込む。

「――ん？　どうかしたか？」臨戦態勢解除。

「……」

「お、おい」

すると突然冬桜ミフユは何を思ったのか「すいません、少し待っててくれますか？」と言い、俺の答えを聞かずにその場から走り出した。

最初彼女の突拍子もない行動に俺は呆氣に取られ、その場で立ちつくしていたが直ぐに我に返り、彼女の後を追いつ始める。

途中、四苦八苦しながらもなんとか彼女の元へと辿り着いた俺の前には幼い男の子、女の子、そして屈んで向かい合う彼女がいた。

幼い子ども二人は建物の壁を背に蹲っている。

「君たちどうしたの？　お父さんお母さんは？」

冬桜ミフユはなだめるように質問をするが、先程から幼い二人は何も答えない。それどころか、片方の女の子はすすり泣いてしまっている。

「――もしかして、迷子なのかな？」

それでも彼女は優しく問いかける。

すると、片方の男の子が今まで伏せていた顔を上げた。

「うん……」

男の子は今にも泣き出しそうに、声を震わせながら呟いた。

「そうなんだ。偉いね。今までずっと妹の傍で頑張ってきたんだよね？」

「……うん……二人で遊んでたら、いつの間にかお母さんたちいなくなつてて。それでもここで待つてれば、いつかは見つけてくれるつて思つてたけど……来ないんだ」

「そっか。ずっと怖かったね？——でも、もう大丈夫！お姉ちゃんが一緒に探してあげる！あと、この人もおまけで」

……ん？

「だから安心して？ 貴方も、もう泣かないの——」

「——ッて、待て——！俺も探すの？ というか、俺の扱い酷くない！？」

「えっ、むしろ探さないんですか？——貴方は非情にもこの子どもたちを見捨てるといいますかあ！？」

冬桜ミフユは 本当に信じられないといった表情で俺を非難する。

「いやいや、そういうわけではないんだが——俺たちは追われている身なわけで、そもそも俺たちが探さなくても親御さんから見つて来るつて。それに俺たち捕まったら死ぬんだぞ？」

「なるほど……私は助けるけど、この子たちは助けないと。私とこの子たちの間に何の違いがあるというんですか？」

彼女は俺の話をちつとも聞いちゃいなかった。

「はっ、まさか！？——くっ。やはり貴方はとんだ腐れ変態野郎だったんですね！」

彼女はそういうと急に胸を隠しだす。

「どうしてそうなる！？」

件の子どもたちも俺をじと……つとした視線で見つめてくるではないか！ いつの間にか女の子は泣きやんでいるし。——てか君も自分の胸を見て、溜息をつくんじゃない！

——くッ。なんて理不尽な世の中なんだ。何故か俺だけ悪者扱いさ

れてるこの疎外感。不覚にも、女の子が自分自身の胸と冬桜ミフユの胸を見比べて、むーっとふて腐れる表情に胸がキュンとしてしまった俺自身に罪悪感。もちろん俺にそんな属性は無いんだが多分、うん。

こんな状況で自分の意見を貫くことができるか？ いや、無理だろ。少なくとも俺には無理だった。

「よし、皆で探そうじゃないかッ」俺は爽やかに言い放ってやった。すると先程の非難の目は何処に行ったのやら、冬桜ミフユは母のような面立ちで「この人もこう言ってるわけだし、一緒に探そっか？」と二人の肩に手を添える。

「……ホントに？」男の子が俺を見上げながら再度確認する。

「ああ本当だよ」

俺がそう言っていると、見る見るうちに男の子は泣きだしてしまった。それに釣られて女の子も再びしゃくりを上げ始める。

えッ？ どういうことだ？ 普通ここは嬉しいじゃないのか。——たくッ、子どもは可愛いけど扱いが難しいな。まあ、可愛いけど。俺は予想外の展開に、どうすればいいのかわからず、思わず頭を掻いてしまう。

そんな幼い二人を見てか、急に冬桜ミフユは何か閃いたような顔付きで「少しそこで待っていて下さい」と俺に言いながら踵を返す。そして彼女はまた俺の返事を聞かずに通行人の行進の中へと消えてしまった。

数刻後。

俺が泣きじゃくる子どもたちとその光景を冷たい目で見つめる通行人に挟まれ気が気じゃなかったところに、やつとのことで冬桜ミフユは舞い戻ってきた。——その両手にはアイスクリームが携えられていた。

「ほら、ソフトクリーム！ 大好きだよね？」

彼女は泣きじゃくる二人の目の前にソフトクリームを突き出す。

「ははッ。そんな簡単に泣きやむわけが——」

あつた。

先程の様子がまるで嘘かのように、子どもたちは「わあ!」と歓声を上げ、泣きやんだではないか。

そんな俺の反応に冬桜ミフコはふふんと鼻で笑う。「子どもは甘い物が大好き。これ、常識です」

「なる、ほど」

子どもたちはそれはもう、凄い勢いでアイスクリームをたிரらげていく。

「——もう。口元がクリームだらけだよ?」

冬桜ミフコは口先を尖らせながら、女の子の口元のクリームを拭いとる。しかし、そこに怒りなどの感情は感じられなく、まるで母親が子どもをしつける時に垣間見せる優しさそのものだった。

「ん……。ねえ、おねえちゃんそれ何?」

不意に女の子が一体全体それは何なんだろうといった具合に質問をしてくる。

「——え、なあに?」冬桜ミフコは尋ね返す。

「それ」

俺は女の子が指さす方向へと目を向けてみる。

——冬桜ミフコのうなじだった。

冬桜ミフコの顔色が蒼白へと急変していく。

「あ……これは……」

「え……ちょっと、お姉ちゃん。隠さないでちゃんと見せてよ」

急に男の子が身を乗り出してくる。その表情からは疑心と失望が感じられる。

「……………」

「……見せないっていうことは認めるってこと? やっぱり……」
ガラク
「不能者」なんだ

「……………あぁ……!」

対して冬桜ミフコは身を丸くし、男の子の顔すら見ようとはしない。
「おいおい……どういうことだよ一体? 君もそんな怖い顔してど

うしたんだ？」

俺は豹変した男の子に動揺を隠せなかった。それだけこの光景は異様だった。

「え……おねえちゃん？ おにいちゃん？ 『不能者^{ガラクタ}』ってなに？」
女の子は豹変した男の子と、急に震えだす冬桜ミフユに首を傾げながら尋ねる。

「『不能者^{ガラクタ}』は悪いヤツ——人殺しのレジスタンスなんだ」

——『レジスタンス』？

「ち……違う！ 私はそうじゃ——」

「違うもんか、『不能者^{ガラクタ}』は全て『レジスタンス』だって皆言ってる……！ どうせ、優しいこと言っつて、そのあと僕たちを殺すつもりだったんだろ！？ そうやっていっぱい殺してきたんだろ！？

——僕の友達も死んじゃったんだぞ、この人殺し！」

男の子は目を真っ赤にしながら、喚き散らす。まるで鬼のような形相だ。

「……ああつ」冬桜ミフユは男の子の言葉に衝撃を受け、身を震わせる。

ベチャ

——アイスクリームが落ちた。いや、男の子が故意的に落とした。そして男の子は女の子にも落とすように促す。

「それを早く捨てるんだ！」

「え……でも、おいしいよ？ それにもったい——」
ベチャ

男の子は女の子が手に持っているそれを叩き落とす。

「……う、うわあああん！」

「ごめんよ……。でも本当に危ないんだ。毒が入ってるかもしれない」

その表情は本当に妹の心配をしているようだった。

男の子はもう一度こちらを振り向く。

「お兄ちゃんは、違うみたいだね」俺のうなじを確認しながら言う。

「——ちよ、ちよっと待てくれ！ さっきから君は何を言ってるんだ？ 『不能者^{ガラクタ}』は人殺しのレジスタンス？ ということなんだ？ なあ、おい——お前も何か言ってくれよ」

しかし冬桜ミフコは頂垂れたままで、何も言わない。

「ああ、お兄ちゃん——それはね……きつと、お兄ちゃんもコイツに騙されてるんだよ。僕らを油断させといて、その隙に殺すつもりだったはずさ。ああ、そうに違いない……そうに違いないんだ！」

「——？」

俺は急すぎる展開に頭がついてこれなく言葉に詰まってしまう。

『不能者^{ガラクタ}』はレジスタンス？ 人殺し？ ということなんだ？

『不能者^{ガラクタ}』は人々に恐れられているのか？

俺の頭から次々と疑問の言葉が浮かんでくる。と、同時に混乱を覚える。それに拍車をかけたのが冬桜ミフコの異常なまでの怯えた。た。

先程から地面に押し付けるように顔を伏せ、全身を震わせている。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」その口からは悲痛の叫びの様な懺悔の言葉が漏れる。

「ぼ、僕は絶対に許さないぞ……！ お前らなんか全員消えてなくなればいいんだ！」

男の子は冬桜ミフコを睥睨しながら吐き捨てる。

そして、妹の腕を半ば強引に引き寄せ——この場から立ち去って行った。

此処に残るは俺と頂垂れている少女だけ。気まずい雰囲気包まれる。

——一瞬のことだった。本当に一瞬だ。

俺は何が何なのか理解することができずに、その場に立ち尽くしていることだけしかできなかった。

ポツ、ポツ——……。水滴が少女の頬を伝う。水滴がアスファ

ルトに染み込む。

放り出されたアイスクリームは水滴により辺りを白濁する。

—— 気が付くと雨が降っていた。

なおも震えが収まらない少女。

俺ははつと我に返り、彼女の肩に手を添える。彼女は一瞬ビクつと
するが、次第に震えは収まっていった。

それでも顔を伏せたままの彼女に俺は声を掛ける。

「—— えっと、大丈夫か？」

「…………… つ。は…………… はい、大丈夫です、よ……………？」

明らかに大丈夫な様子ではない彼女に反論する。

「いや、大丈夫ではないだろ！？ さっきのは普通じゃな——」

「—— 大丈夫ですから！！」 彼女は掌で俺の言葉を停止する。「本
当に…………… 大丈夫ですから、それ以上何も言わないで……………！」

「……………」

彼女は顔を上げると卑屈な笑顔を俺に向ける。

「あーあ、もつたいない。アイスクリームがぐちゃぐちゃですよ…

…。 ははは、本当にみつともないですね」

「……………」

「…………… すいません。私嘘ついちゃいました」

「……………？」

「レジスタンスじゃなかったんです。—— でも、もうレジスタンス
なんですよ」

俺は彼女の要領を得ない言葉に混乱してしまう。

「初めて運動をしたんです。傍から見ればただの犯罪かもしれない

けど、私たち『不能者』^{ガラクタ}にも人権のある理想の社会を実現するため

に。だから、今日初めて私はレジスタンスの一員になったんです。

それなのに…………… 理想の為に思ってたのに、まさかあんな小さい子
どもまでも犠牲になってるなんて……………」

「……………」

「も、もちろん覚悟はしてましたよ？ 理想のためには人の犠牲も

必要だと納得してました。でも、あんな子どもが犠牲になつて……それも実際にあの憎しみに満ちた目を見たら、凄く恐ろしくなつて。震えが止まらなくなつて……。それでも……私は運動をやめるわけにはいけないですよ！ 私たちを虐げてこの世界にのさばっているヤツらを打倒しないと駄目なんです！ こんな私に期待してくれてる大切な人の為にも頑張らないといけないんです！」

冬桜ミフユは雨に打たれながら自分自身に言い聞かせるように咆哮する。俺の目にはその姿が涙を流しながら泣き叫んでいるように見えた。

しかし、この世界に対して無知である俺は彼女にかけてあげる言葉が見つからず、ただ目の前の少女に相槌を打つことだけしかできなかった。

先程まで大勢の通行人で埋め尽くされていた大通りも今では閑散としている。徐々に勢いを増す雨が俺たちの体温を容赦なく奪っていく。

「——まあ、とりあえずだ。身体に障るからどこか雨を凌げる場所に行かないか？」

「……………もういいんですよ？」

「……………」

「だから、もう私を守らなくてもいいんです。だって私犯罪者ですし——人殺しの集団の一員ですから」

「……っ。何馬鹿なこと言つてんだ！ いいから来いッ！」俺は無理やりにも彼女を連れていこうと腕を掴む。

「——離して下さいッ、ホントもういいですから！ ……吐き気をするんですよ。何なんですか、同情ですか？ 憐れみですか？ そんなに私が哀れに見えますか！？ ……『不能者^{ガラクタ}』でもない貴方が私を助けて何の得があるっていうんですか。もし優越感に浸りたいだけなら止めて欲しいです。正直迷惑なんですよ！」

「なッ……………！？」

俺は予想外の彼女の言葉に衝撃を受ける。そして怒りが込み上がっ

てくる。

「お前よくそんな事が言えるな。俺がどれだけお前を助けたと思ってるんだ！？ それに同情とか憐れみとかそんなじゃない！ ましてや、優越感なんて——」……いや、少なからずあったかもしれない。

そ、そうだとしても！

「——とにかくだッ！ 同情とかじゃなかった。気が付いたら助けに行ってたんだよ！ 人を助けるのに理由なんて必要ないだろ？ ……もしかしてさっきの事を気にしているのか？ それなら気にするな。『不能者^{ガラクタ}』ってのは酷い扱いをされてるんだろ？ ならしうがなないじゃないか。俺だって気持ちは分か——」

「分からない」

——蹴。

「……やっぱり貴方もそうなんだ。口ではそう言っけど何も分かってない。知ったような口で言うなよ。はは……所詮、人間と出来損ないの人間は相いれない関係なんだ。………もう近寄らないで下さい」

彼女はそう吐き捨てると俺に背を向け、此処から走り去ろうとする。俺はもちろんそれを阻もうと彼女の腕を掴もうとするが——

「触るなッ！！ ………ほっとして下さい。ホントもう辛いんですよ……」

これ以上とない彼女の拒否に、それ以上俺は身体を動かすことが出来ず、脱兎の如くこの場から立ち去る彼女の後姿を見つめるしかなかった。

——何だっと言うんだ。

俺は彼女の豹変に戸惑いを隠せなかった。しかしそれ以上に激情に駆られてしまっていた。

なんなんだ、まったく！ 急に取り乱しやがって……。さっきの事

だったら分かるって言ってるだろ！？ 俺は気にしないって言うのに。……ッ。なのに――

最後の彼女の悲痛な顔が 脳裏に過る。俺は走り行く彼女の姿を遠望する。

その姿はどんどん、どんどん小さくなっていく。それはまるで今にも散ってしまいそうな儚い花のように感じられた。

一片の不安が脳裏にちらつく。――ここで追わなかったら、もう会えないんじゃないか？

そう思うとその不安は急激に増してきてしまい、もう抑えることは出来なくなっていた。

「……ッたく」俺は直ぐに冬桜ミフユの後を追った。

――しかしそれは困難を極める。

俺はなんとか、疾走する彼女のそばに近付くことが出来たが何度彼女を引き留めようと――空振り。あと少しだ、と彼女へ腕を伸ばそうとも――空振り。

しかも体力は無尽蔵ではないのだ。俺は徐々に走る速度が遅くなってくる。対照的に、彼女は俺同様に体力は有限だというのに向に走る速度が衰える様子はない――無尽蔵の体力を持っているのではないかと思いたくなるほどだ。

――にしても、コイツ本当に早過ぎだろ。

あのしなやかで細い肢体からどうやってあんな馬力が出るんだろうか。対して俺はというと、男だてらに女を追いかけてヒ―ヒ―言っている。あれ――この状況に強いデジャブを感じる！？

と、くだらない思案にふけている内に彼女との距離が徐々に徐々に離れてくる。

俺は焦燥感に駆られてしまう。また、降り注ぐ雨のせいだろうか。全身が重く感じ、思ったように走れない。地面もいつもと違う状態で気持ちが悪く、足を取られてしまう。視界も最悪だ。魔術でどうかしたいが、先の戦いで既に魔力が尽きてしまっている。

次第に頭が朦朧としてきた。酸素が足りない。肺がはち切れそうだ。

足が鉛のように重い。俺は見る見るうちに、既に遅かった速度が更に失速する。

「ち……くっしょうっ……」

やっぱり無理なのか？ 俺は冬桜ミユコの背中を追うことしかできない自分自身に腹立ち、悪態をつくしかなかった。

——俺、不甲斐なさ過ぎだろ！

しかし——どんなに自分を罵っても、後悔しようとも結果は変わりはない。現実ではそう都合よく秘められた力が発動するわけもなく、俺は情けなくも打ちひしがれ地面に膝を屈しそうになる。

「——きゃっ！？」突然耳に悲鳴が聞こえてくる。

俺は意識が朦朧とする中、揺らぐ視界を前方に向けてみる。すると——「つつっ……」冬桜ミユフがお尻を摩っている姿が見えた。

どうやら彼女は通行人にぶつかり転倒したようだった。

俺は少し心配するが彼女の反応を聞く限り大丈夫そうであ堵する。

しかし、それ以上に結果的に彼女を引き留めさせることができ、ほつとした。

再び彼女が走り出す前に、俺は最後の力を振り絞り衰弱きった身体を酷使しながらも、冬桜ミユフの元へと向かった。

「あ——……や、やっと、ハア……お、追い付いたぞ……！」

俺は冬桜ミユフを睥睨しながら吐露する。しかし、そんな俺の心情にも彼女は顔を伏せたまま無言を貫く。

「えっと、大丈夫ですか？ こちらの連れがすいません」

俺は俯いている彼女の代弁者として、彼女と同じく尻餅をついている男性に頭を下げる。

「……」

「？」何の反応もないことに俺は頭を傾げる。雨のせいではつきりとは表情が分からないが、どうやら大変お怒りらしい。

俺は「本当にすいません！」と再び謝りながら男性に手を差し伸べてみる。

すると——「……ひッ」と男性は悲鳴を上げ、俺の手を払いのけた。

—— おかしい。俺は只ならぬ雰囲気を感じ取り、男性の顔を凝視してみる。

「お前は——」

俺はこの男性を知っていた。あの時の状況が状況だけにはつきりと顔を見てはいないが、確信が持てる。

—— 最初に俺の魔術で千鳥足になっていた追手じゃないか！！

そう気付いた時には、ヤツ突き出された拳が俺の目の前にあった。刹那、目が焼き尽くされそうなほどの閃光が辺りを支配する。

「—— ぐうあああッ！！」 耳に激痛が走る。

一瞬、昼間以上の照度が辺りを支配し轟音が鳴り響いた。

「「キヤ——ッ！！」」

辺りは騒然とし、人びとの悲鳴が飛び交う。

ぐう……！ 耳が焼けつけるような痛さだ！ な、何でコイツがここにいるんだ！？ さっき敵を一掃したときに、あそこにいたんじやなかったのかよ！？

頭の中でぐるぐると疑問が浮かび上がってくる。

—— 敵は今何処にいる？ ミフユは何処にいる？ 今周りはどうな状況だ！？

だが、一向に答えがまとまらない。それ以前に痛みが強すぎて、失神してしまいそうだった。

俺はふらつく身体を起こし、状況を把握しようとするが視点が定まらない。ならばと、怪我を負ってない片方で耳をすましてみるが降り注ぐ雨の音と人々の悲鳴の混沌とした雑音が聞こえるだけで、どうにも役に立たない。

「——ッ！？」

そんな中俺は驚くべき物を見てしまった、気がした。

俺はもう一度確認しようと懸命に目を凝らして見てみると、確かにそれは先程の女の子で間違いなかった。

彼女は怯えながら立ちすくんでいる。

俺は気が動転してしまう。

どうしてさっきの女の子が一人で、

そして——どうして彼女の頭上からコンクリートの巨塊が落ちてきているんだ！？

「おいおいおいおいおい！」

度重なる展開に頭がついていけない。

しかし、こうしていてもコンクリートは彼女に迫るばかりだ。

——俺は自然と走り出していた。

身体がふらつきながらも形振り構わず走る。逃げまどう人々を縫うようにして走り抜ける。

しかしそれでも間に合わない、と直感する。俺は即座に次の行動に移った。

そうだ、魔術があつた！ 急展開すぎてその選択肢が思いつかなかった。だがこれで助けられるはずだ。

俺はそう安堵すると、自分の掌を掲げ詠唱した。

——ッ？ が、何も起こらない。

何故！？

当然の疑問が湧いてくる。——が、それは直ぐに明らかになった。

……魔力が既に尽きていたんだつた。

一瞬にして俺の全神経が硬直し——

「終わった……」

俺の脳裏に『不可能』の文字が浮かび上がった。

実際これ以上打つ手はなく、後は女の子が無残にも碎け散るのを見守る他なかった。無力感が俺を支配する。

そんな自嘲の笑みを浮かべるしかなかった俺の横を何かが通り過ぎた。

——ミフユだつた。

彼女は俺の横を通り過ぎると風の如く駆け抜け、女の子の方へと疾走していく。

それはまるで、本当に『狩猟の女神アルテミス』の風貌——いや、それ自体だつた。

彼女は俺が諦めたものを懸命に拾おうとする。

そして、女の子の身体を掴むことに成功した――

「――ッ！！！？？」

その瞬間、形容し難い爆音が町中に轟いた。辺り一面に砂塵の渦が広がる。

俺はあまりの衝撃に呆気にとられてしまう。

一瞬にしてミフユ達の姿が消えてしまったのだ。直ぐに不安が漏れ出す。

――無事なんだろうか？ いや、今の衝撃で無事で済むわけが無い！俺は込み上げてくる不安を払拭するために、視界がまだ悪い中彼女たちの元へと急ぐ。

「おいッ！ 大丈夫か――！？」

「……」

俺は走りながら呼びかけるが返事はない。いよいよもって最悪の事態を考えなくてはいけなくなってきた。

暗雲が垂れ込める。

「嘘だろ……」

――アイツが死ぬなんて。――いや、そんなはずがない！あの減らず口で、冷徹女で、稀に見る性格の悪さであるアイツが簡単に死ぬなんてことがあるはずがないッ！だってそうだろ？ さっきまで男泣かせな走りを見せてたじゃないか！――なあ、おい、頼む……返事をしてくれ。くそッ……俺はまた……守れないのかよ？」

吐き気が催してくる。それに伴い強烈な頭痛が俺を襲う。

――怖い。現実を見るのが怖い。現実を目のあたりにして、また錯乱してしまうかもしれない自分が恐ろしくて仕方が無かった。

………ううッ、なんなんだこれは……？ 頭の中がぐちゃぐちゃで気が狂いそうだ――

「――やん？――ちゃん？」

半ば諦めかけた時に砂塵の向こうから声が聞こえてくる。

俺は即座に、声がする方向へと目を向ける。

すると、人間のシルエットが見えてきた。

えっ、もしかして無事なのか!?

俺はひよつとするとひよつとするかもしれないことに歓喜する。

「——ミフユなのか? 頼む、返事をしてくれ!」

少しの静寂——そして——

「……ホントしつこい人ですね。私はここです……」

「——ッ」

かなり小さい声ではあったが、確かにミフユ本人の声で間違いなかった。

——ははッ。やっぱり無事だったようだ。それもそうか、アイツがそう簡単にくたばる様な人間じゃないはず。

ふんっ、見るからにあのツンとした顔が悪運の強さを物語っているってわけだ。

「ふ——……心配させやがって。直ぐそっちに向かうから待ってる」

周辺は瓦礫だらけで足場がかなり悪かったが、そんなことは気にはならなかった。先程までの身体の重さがまるで嘘かのように身軽になったからだ。

徐々に近付いていくシルエット。そして、その目の前にようやく到着した俺は開口一番に「大丈夫か?」と尋ねてみる。

すると——

「——おねえちゃん? ……うう………ねえ、おねえちゃんだいじょうぶ……?」

そこに立っていたのはミフユではなく、すすり泣く女の子だった。

「ごめんなさい、ごめん、なさい……。ただ私……アイスクリームのおれい言ってなかったから、言わないといけないって思って……。そしたら……いきなり何かがばくはつして——」

俺は周辺を見回すがミフユは何処にも見当たらない。

「ああ……う……。い、いつのまにかこんなことに、なってる……」

おねえちゃんが……私を……かばって——」
俺は足元を見る。

「ごめんなさい、ほんとうに……ごめんなさい……」
ドス黒い血で覆い尽くされていた。

「あ……え……？」

よく見ると肉片があちらこちらに散らばっている。

最初俺はその物体が人間であると認識できなかった——が、巨大な瓦礫の下に覗かせる顔が辛うじてそれが人間であるということだけ認識させてくれた。

「……っ……はあ……はあ……。うぐ……。ひ……。酷い顔……です……。よ？」

——！？

「——お、お前大丈夫なのかッ！？」俺はとつさにミフユの顔を覗き込む。

「はは……こ、これが大丈夫に……見えますか……？」

彼女の声は今にも消え入りそうなほど弱弱しく、誰がみても明らかに大丈夫ではなかった。未だに生きているだけでも奇跡なほど肉体の損傷は激しく、形容することすら憚られるものだった。

「……しょ、正直……もう全身に感覚が無いんですが……ぐっ……あ……わ、私の身体どうなってます……？」

——言えるわけが無い。

「……だ……黙ってないで何か、言っして下さいよ……」

「——ッ。……す、すまない、身体を覆い被さっている瓦礫で……よく分からないんだ」

「なら……どかしてく……くれませんか？」

「——なッ！？　そ、そんなことしたら余計に身体を傷つけてしまっぞ！　俺一人だけの力じゃ無理だ！」

「た……頼みます……瓦礫に潰されたまま……死にたくないんですよ……」

——ッ。

ああ……う……く、くそッ！　くそ……くそ……くそ、くそッ！
なんでこんなことになったんだ！？　……うう……俺にはど
うすることもできない……彼女の言うことを聞くしかできない……
のか。

「ああ……分かった」

「……ありがとう」

グチャ……パキ……バキィ……ブチ……ズウ――

――ッ。

俺はミフユの願いを叶える為に、必死にやった――やるしかなかった。

途中、思った通り俺一人の力では持ち上げることが出来なくなっても彼女が「お願い」と言うから、瓦礫を引きずり――退かした。もちろん、さらに彼女の身体を痛めつけることになった。

彼女は「別にもう痛くもなにもないから大丈夫」と言い、俺に笑いかけてくる。

その生気を失った笑みが俺の胸を抉り取る。

――正気の沙汰ではなかった。

戦慄する光景が俺の精神を蝕む。生々しい臭気が俺の頭を麻痺させる。

――もうどうしようもなかった。

「――ナナミ！」

招かざる客は招かざる刻に来るものだ。

何の前触れもなく現れたその人間は、俺の隣で泣き崩れている女の子を見つけるや否や抱きしめる。

「……えっ……お……おかあさん……？」

「――ああ、よかった！……怖かったよね？　でも、もう大丈夫。お母さんが来たから安心しなさい」

「……え？」

その『お母さん』と呼ばれた人間はこちらを見下ろすと、腐った汚物を見るかのように睨みつけてきた。

「よくもうちの娘を……！ この人殺しっ！」

「ち……ちがうのおかあさん。この人は私をかばって——」

「何言ってるの！ コイツはね、『不能者^{ガラクタ}』なのよ！ 人殺しの集団が人を助けるわけがないでしょ！？ ——アンタはコイツらに誘拐されそうになったのよ！」

「え……でも——」

「——いいから、早くここから離れるの！ もう虫の息だけど何するかわかりやしないんだから」

その人間は女の子を抱き抱える。

「ふん…… 良い気味よ、自業自得だわ——」

そして、呪いの言葉を吐き捨てるようにして去っていった。

——少年は佇む。

……どうしてだ？ ミフユがこんな姿になってまで救ったのに——
なんで、なんで人殺し呼ばわりされないといけないんだ？

そんなに『不能者^{ガラクタ}』ってのは悪いのか？ 人殺しなのか！？

「——そう、人殺しなん、です……」

「……ッ。にしても、お前はちが——」

「——同じですよ。じ、実際……レジスタンス活動をしてた、わけですから……人殺しを手伝ったと同義です。だから……う……わ、私も人殺しと同じ……です」

俺は、そんな笑顔で言う彼女が理解できなかった。

——実際にミフユが人を殺しているわけじゃないんだろ！？ こんな身を呈して救ったのに、それなのに……この仕打ちはあんまりだ。

「——でも」夜空を見つめる彼女の目から一筋の涙が零れ落ちる。

「……うぐ……ッ……ア、アイツらだって……いっぱい……いっぱい殺してるんですけどね……！——」

彼女の口元が奇妙に歪む。

「っ……う……ク、『不能者^{ガラクタ}』というだけで、虐げて……。奴隷のように……扱い……こ、子どもや女性は……性行為の玩具として辱

めるう……！　そして……いらなくなれば、ゴミのように棄てやがる……！　っ……くそう……くそう……　本当に——腐った世界だ」

彼女の目は血走り、もはや止める者はいない。

「本当は……あう……ぐっ……あんなヤツらの子どもなんか助けたくはなかった……！　あんなヤツら……く、苦しめばいい。血の涙を垂れ流し、絶望の淵に立てばいい……。それが、ヤツらの業だ……。こちらが助ける、義理なんて……無いんだ……！」

俺は彼女の本心を知り、衝撃を受ける。

「……うぐっ、がはっ……う……はは……み、見損ない、まし
たか？　これが私の……本当の姿なんです、よ……」

「……。——でもお前は救った」

「……はい、それが最大のミスでした……。っ……、その、結果
が……ああっう……がっ……、これですよ……。でも……でも
何故だか、うご、いてしまいま……した。な、なんで、ですかね……
……。た……ぶん、アイツらみたい、に、は……なりたく、なかった
んですかね……？　まあ……結局は、ア、イツらの……思っつぽに、
な……ってしまっただけ、です……。が……。ゴミが一つ……消えて
も、なんの痛手もない……わけ、で、すか……。ら……ぐうああっ」
「おい……しっかりしろッ！」

喋ることもままならなくなり、急激に衰弱していく彼女の様を見て
俺はうつろたえる。

「……頼む。お前は消えていい存在なんかじゃないんだ……ッ！
だから——」

「……ありがとう。……でも、も、う、むり……みたいで、す。
……はあ……っ……ぐう……感覚は、ない、の……に……
……凄く、寒い……。……ああっ……もう、死ぬんです、ね……
……わた、し。……ぐっああ……っ、つらい、じ、んせい、
……だった、な……。……っ……ごめん、な……さい、みんな
……や、やくに、たた、なくて……。っ……はあ……は……あ

「……っ……うっ……」

「ああ……ちく、しょう……！」

「……さよ……うなら……まじゅっし……さん……」

「……」

そして、

こちらを見つめ微笑むと、

冬桜ミフユは息絶えた。

「レジスタンスの一員と見られる女性一名の死亡を確認した。直ちに正体不明の男性の捕縛、もしくは排除を行う」

いつの間にか、数え切れないほどの武装した兵士に取り囲まれていた。

——本当に、何だよ、これ……。

「はは……哀しすぎて……笑えて、くるっ……！」

俺は大粒の涙を流しながらミフユを見つめる。

血で赤く染まった顔が妙に艶めかしい。

——また救えなかった。

俺の思考が真っ赤に塗りとくられる。

……っ……ああ……頭が痛い。痛い痛い痛い痛い痛い痛い

痛い痛い痛い痛い憎い。

真っ赤、真っ赤。この世界は真っ赤しかないかと思いたくなるぐらいに辺りは真っ赤だ。

俺の足元には既に血肉の塊となった物体が転がっている。それが俺

を狂気へと誘う。

——ああ、既視感。これは何だ。

俺はこの悲壮感、絶望感、失望感、憎悪感を知っている。

だが、しかし。今にも腹から飛び出てこんとするこの衝動は何だろ

う。そしてどう対処した？

「この人数では抵抗は無駄だ。もしそれでも抵抗するならば——」

「……」

蚊帳の外から何かが聞こえてくる。
うるさい。

耳元でチリチリと聞こえる小蠅の如く五月蠅い音に無性に俺は殺意が湧いてくる。

これも、既視感。

本当に何なんだ、これは。感情といった感情が己の中から爆発しそうでこのままでは気が狂ってしまう。

そしてもう限界だと思った時――

風がそよいだ気がした。

頭上の霧が徐々に晴れてくる。

ああ、もう少し……もう少しで見える。そうすればこの激情も治まるはず。

その先には何があるのか。期待感を募らせながら、俺は刮目する。

そして目に入っただのは、

真っ赤に染まった景色。

血のヘドロがぶちまけられた場所が広がっていた。

ドク……ドクン……ドクンッ……

――既視感から現実へ。

「……くふう」

そうか――そうだったか。

なんだ、簡単なことだったじゃないか。この暴れ狂う激情を治める為に至極簡単なことをすればいいだけのことだったのだ。

「おい、貴様聞いているのか――」

口元が奇怪に歪んだ。

「皆殺しにすればいい」

ただ、それだけのこと。

二章！（後書き）

感動！

三章

朦朧としながらも俺は懸命に住処へと向かっていた。

土砂降りの中、ぬかるんだ道が俺の足に悲鳴を上げさせる。

——寒い。長時間雨に晒せれて凍えそうだ。

しかもその雨が容赦なく叩きつけ、されに俺を苦しめる。

ただでさえ重力のみに打ち負かされそうなのに、容赦ない豪雨にさらには背中にミフユを担いでいては、身体が悲鳴を上げるのも仕方が無いことだった。

ボロ雑巾のようになってしまった彼女の身体からはおびただしいほどの流血が俺を伝い、戦慄させる。

『マグスマグヌサム』……！

俺は心の中で呪文を唱える。

「ハア……ハア、………ぐうッ！」

——どうしてこんなことになったんだろうか。

先程から俺の疑問はこの一点に尽きた。だが——答えが見つからない。該当するものが多すぎて、本質的な原因が分からないからだ。

俺は気付くと地面に這いずり、泥水を掻き集っていた。

——コイツを救わないといけないのに……このままじゃ……駄目だ。

——駄目なんだ……俺にしか救うことは出来ないのに………俺が

……俺がミフユを救わないと……絶対、に……。

次第に遠のく意識に俺は抗うことができなかった。

暗転。

鼻腔を刺激する木材の匂い。一人住むには十分、二人住むには幾分狭い空間。乱雑に積み重ねられた本。

俺は自分の住処にいた。

——……ミフユはッ！？

俺はミフユが見当たらないことに気付き、慌てて立ち上がるとそれ

は真後ろに鎮座していた。

先程と何一つ変わらない真っ赤な物体。それはもう人とは言えないものだった。

それでも諦められない俺はそれを大事に扱いながら仰向けにする。俺には魔術しか取り柄が無い。だがそれで——彼女を救うには十分だった。

「……………ま、待つてろ、ミフユ……………俺がお前を救って見せるかな……………！」

俺は『医療魔術』^{メディ・マギ}などの『魔術書』^{グリモワ}を重点的に読みあさり始める。最初は手掛かりの『て』の字も見つからなかったが、『再生魔術』^{リジユ・マギ}に関する『魔術書』^{グリモワ}を調べていく内に光明が差してきた。

それで分かったことは——抉り取られた皮膚、脂肪、筋肉の元となる筋細胞、骨格を構成するのに必要な骨、肺、肝臓、内臓、子宮、そして圧倒的に足りない血液——これらを再生することができる相応の物を集めることができればミフユを救えるということだった。確かにこのレベルの損傷では医療の分野では全くの意味をなすはずがない。これはもう、再生の領域にすぎる他ないのだ。

俺は直ぐに彼女の材料となるものを捜すために樹海中を駆け回った。——以外に簡単に集めることができた。

それもそうだ。生命とは全てが自然の恵みによって生まれてきた産物だ。もちろん人間もその例外ではない。ならば人間一人を修復するのには樹海一つで足りないわけがない。人間一人再生するなんて簡単なことなのだ。そう、簡単なことなのだ。

——あとは俺の魔力と材料を結び付け、魔術を詠唱するだけ。全身が身震いする。今までやったこともない魔術だ。身体全身に緊張が駆け巡るのは必然だった。

しかし——

それ以上に、もう直ぐミフユを救うことができるという感動——いや、恍惚に近いものが俺を支配する。そして、

極度の集中により、凄い疲労感に襲われる。しかし、そんなことはどうでもよかった。

俺はすぐさま彼女の元に駆け寄り、その肩を揺らす。

「ミフユ……？ 大丈夫か……？」

最初は弱く——揺らしてみる。

「おい、ミフユ！？」

次は強く——揺らしてみる。

「……ミフユ、起きてくれ！ だ、大丈夫なのか！？ おいッ！」

最後にはさらに、さらに強く——揺らしてみる。

が、それでも起きる素振りもない彼女に俺は焦燥感に駆られる。

しかし、直ぐに落ち着きを取り戻す。

——考えてもみれば、心臓が動いていて呼吸もしている。何の心配もないはずだ。ただ、一度死んだ肉体が蘇るには色々と馴染ませる時間が必要なだけ。——今は待つしかない。そう、待つしかないのだ。

俺は数刻の間、彼女の目覚めを待った。

何も起きなかった。

——いや、正確には何もなかったわけではない。

心臓が止まった。

彼女の心臓がまた停止してしまった。

「おいおい……… どういうことだよ、これ？ ……ふッふふふははは

はははあはははははあああああ——…ッ、ふざけてん

のか！？」

俺は半狂乱状態になってしまう。

——なぜ！？ どうして！？ 何で心臓がッ！？ 何か間違えたの

か？ なら——どこで間違えた！？ 意味が分からない……… 分から

ない分からない分からない分からない分からない。

俺は『魔術書』^{グリモワ}を再読してみるが、全く理由が分からない。

「失敗した理由が分からない。手順は完璧だったはず。確認してもそれは確実だった。」

『魔術書』
グリモワ

なのになに？

認めない——認められない——認めたくない。

俺はミフユを強く揺らす。

——が、結果は同じ。——何度やっても同じ。

無反應。

嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ
嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ
嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ
嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ
嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ
うそdaaa。

《君は途方もない闇に直面したらどうする？　きつと泣き、喚き、
 狂乱するだろう。でもそこから始動、終焉じゃあない。だからそ
 んなに悲しまないで、

——さあ宴の始まりだ》

脳裏に掠めた言葉と共に俺は、絶叫した。

「あああああ ああ ああ ああ ああ ああ
あああああ ああ ああ ああ ああ ああ
あああああ ああ ああ ああ ああ ああ

ツ！！」

俺は意味のない暴力に走る。

目に付くものを片っ端から――殴る。

蹴る。

――投げる。

それはもう、ただの癩癩を起した子どもの見るに堪えない姿だったはずだ。ただ――それが成人手前の男だから手に負えない。

——いつの間にか俺の周りは悲惨な状況になっていた。ガラスは割れ、書物は乱れ舞い、木材の破片が飛び散る。まるで嵐が過ぎ去つ

たかのようなうだ。

——しかし、そんなことどうでもよかった。

「ハアハア……くッ……何が魔術だ！ 人一人救えやしないのか！」
俺にとつて魔術は絶対的な存在だった。いかに困難なことも知恵と工夫で乗り切れると確信していた。それなのに——結果はこれだ。冷めた熱が再び俺の頭を沸騰させる。

目の前にあった椅子を俺は無造作に蹴り飛ばした。それは本棚にぶつかると、呆気なく崩れてしまう。

バサ、バサバサ——……。

本棚から数冊の本が落ちてくる。それに伴い少しずつ揺れ動く本棚。さらに落ちてくる本。

そして——重心のバランスを崩した本棚は俺の頭上に倒れてきた。

「……………！？」

本棚は俺の身長を優に超す高さで、それに下敷きになればひとたまりもなかった。

俺は避けようと足を踏み出す。が、足首からズキとした痛みが襲い、一瞬怯んでしまう——先程の蹴りで痛めてしまったようだ。

気が付くとそれは目の前に迫っていた。

俺は倒れ込む。

「——ッ」

鼓膜がはち切れんばかりの鋭い音が響いた。

——そして静寂。

俺は恐る恐る目を開いてみると、それは眼前にあった。

——幸運にも俺の頭部すれすれに本棚は倒れたようだった。

動悸が激しく高鳴っている。額には脂汗が滲み出ている。

一瞬冷静さを取り戻す俺ではあったが、すぐに頭に血が上る。

俺は床を背に、動悸が速くなってしまうた原因のそれを蹴ろうとする。

——が、それは空を切る。

だが、目標を誤ったわけではなかった。

俺は空中に浮いていた。

⋮
!
?

何が何なのか理解できないまま俺は下へと降下する。

バキ、ゴキ、グキ

鈍い音を出しながら俺はようやく最下層に辿り着いた。

「ツ……ああ……う」

自然と漏れる苦痛の声。

上を見上げると見事に大きな穴が開いていて、そこからこちらに儼い光が差し込んでいた。

まさか床の下にこんな落とし穴みたいな空洞があるとは。

「……ああいてえ。マジで笑えるなこれ。さっきの衝撃で床が抜けるなんてどんだけ劣化してんだよ、ここの床は……ぐうあ」

腹部に鋭い痛みを感じる。

目を向けてみると、本棚の角が俺の脇腹にめり込んでいた。本棚自体も一緒に落ちてきたようだった。

「くふう……くくくつくくくう はははははあ はははははあ はははははあ
はははははは——」

俺は眉をしかめながら笑わずにはいられたかった。

「俺、馬鹿すぎるだろ。一人でキレて一人で穴に落ちて、終いには脇腹を……ぐう！　ハア、ハア……畜生！」

はは……救いようのない馬鹿だな、ホント。

ミフユの顔が頭に浮かぶ。

ああ、結局救えなかったな……俺は、無力だ。

救いたかった……！ なんとかしても救いたかった。だが結果は失敗に終わった。

あと少し……あと少しというところだったのに……！

憤怒の念に駆られようとするが今の俺にはそんな力などなく、すぐに鎮火する。

「……結構深いな」

俺は上を見上げながら、ポツリと呟く。

——ここで埋まってしまおうか。どうせこの傷じゃ到底上まで登り切れそうにない。彼女だけ死なせてしまったせめてもの償いだ。俺も一緒に死ねば彼女も少しは寂しくないだろうか。たとえ雀の涙ほどのものだとしても、やらないよりはマシだろう。

——それにしても湿気が多くて気持ちが悪い。そして熱い。俺は汗ばむ身体に嫌気がさす。そして、敵わないとばかりに額の汗を拭おうとするが——止めた。

ここで朽ち果てる運命の俺がこんなことをする必要はないのだ。もうすぐ死ぬ俺にとって拭うという行為は何の意味もなさない。それなのに、俺の腕は自然と動いていた。——なんだか笑えてくるな。

「くふう……習慣、か」

俺はそう鼻で笑うと、元ある場所へと腕を戻した。

「……？」戻した右腕に違和感を覚える。

不自然なほど冷たいものが腕に当たっているようだった。

俺は痛む身体を懸命に動かし、それを確認してみる。

「これは……」

黒鉄くろがねの箱だった。

その箱はいつの間にかそこに佇んでいた。

俺はそれを認識した瞬間からその強烈な存在感に圧倒されてしまっていた。

正しくは元からそこにあったのであろうが、どうして最初から気付かなかったのか不思議でたまらなくなる。

いや、それ以前に。

——どうしてこんなものがこんな所にあるのか、それが奇怪だった。俺はもう一度注視してみる。

大きさは人間の頭部一つ分ぐらいはあるだろうか。その箱は黒く妖しい光を放ち、見る者を魅了する。加えて重厚な作りでどんな衝撃

にも耐えそうな頑丈さも兼ね備えていた。

——こんなものが俺の住処の下に？ ……もしかするとこれは師匠のものなのかもしれない。

この住処は俺の所有するものではなく、元々は師匠が住んでいた場所だ。だから、もしかすると——いや、そうとしか考えられない。これは師匠の持ち物で、何かの拍子にこんな所に落ちてしまったんだろう。

俺は自然とそれに腕が伸びていた。

ざらざらとした感触のその箱は思った通りの重量のあるものだった。幸運なことに錠は付いていなく開けることができそうだった。蓋を開ける指に熱がこもる。

湿気が原因で錆びついていた蓋を開けるのに苦戦してしまったが、なんとかこじ開けることに成功した。

「……………ッ」

その中身に、声にならない驚きが口から漏れる。

——目に入ったのは、一冊の本だった。

その本は黒かった。

「『黒書』……！」俺は釘づけになってしまっていた。

「悪魔召喚の『黒の魔術書（悪魔召喚のグリモワ）』じゃないか！」

通称、『黒書』——悪魔召喚の為の『グリモワ魔術書』だ。

通常、自身の魔力を使うことで魔術を行使することができる。しかし、それは、悪魔を呼び寄せヤツらの魔力を借りることで魔術を使用することを可能にしている。これらは同じ『魔』に属する術ではあるが決定的に違うことが一つあった。それは——『黒書』を利用した魔術の場合、無から有を生み出せることだった。

最凶最悪の魔術である。無から有を生み出す——すなわち、世界の理から逸脱した行為。

『世界の歪みを生み出す』

いつしかそれは、人類の破滅、世界の破滅を危惧した魔術師たちに禁書とされ、未来永劫使用することを、所持することでさえ禁じられた——はずだった。

——それが今、ここにある。

そんなものをどうして師匠が——あの師匠が持っていたのか。今となつては知る由も無いことに俺は複雑な心境に陥ってしまう。再びそれに目を移す。

——中身にはどんなことが記されているのだろう。

『魔術の真理がそこにはある』『世界の理に近付ける』『悪魔の叡智を我が物にできる』

今まで、噂で耳にしてきたものはまさに悪魔の囁きのようなものばかりであつた。

俺は半ば伝説的だつた『黒書』を前にして心が高鳴ってしまう。

その黒く、無柄で、何の装飾も無い、武骨すぎる本が今の俺には何ものにも代えがたいものに見えていた。

無意識に手が伸びていく。だが、あと一歩というところで萎縮してしまう。

『黒書』の存在自体が禁忌だというのにそれを手に取り、あまつさえ中身を見るなどできるはずがない……！

読んではいけない、読んでは駄目だ！

しかし一方で——読め、読むんだ！ と胸の中で葛藤が渦を巻いている。

——そうだ。別にこんなところ誰かに見られるわけがない。しかも、俺は既に魔術師の禁忌を犯してしまっている。一度や二度、変わりはしない。それに——どうせここで朽ち果てる運命なんだ。もう今後なんてない俺には禁忌など関係がない。

様々な言い訳を陳列した俺はようやく覚悟を決め、その禁忌に触れようと手を伸ばした。

手が震える。

鼓動が急激に速くなる。

固唾を呑む。

——一瞬、再び罪の意識が頭に過る。すると、

《あの娘を救うことができるかもしれないぞ》

不気味な声が俺の頭に響いた。

一切の躊躇がなくなった俺は、

『黒書』を開いた。

「え……」

口から漏れたそれは、驚愕ではなかった。
落胆だった。

そこに、その『黒書』の中身に期待した、期待してやまなかった内容は無かった。本当に何も無かった。

幾らページをめくってみても、

白紙。何も記されていない白紙が延々と続いていた。

——ある意味驚いた。そして絶望した。

「そ、そんな……。これが、『黒書』なのか……？」

急激に熱が冷めてしまう。

胸一杯に膨らんだ期待は気管を通り、溜息と共に口内から溢れ出す。深層心理では、やはり俺はミフユのことを諦めきれなかったのか。だから、あんな言葉が頭に、響いた。

「……ッ」

——何を俺は期待していたんだろう。実際に見たことも無いのに、これが『黒書』だなんて。どこにもそんな証拠は無いのに。少しでも期待した俺が馬鹿だった……くそッ！

一片の希望を見たせいでそれまで消えかけていた炎が再び燃え上がる。

それは苦痛だった。

やっぱり彼女を救えなかった……！

「くそ……くそ……くそッ……くそくそくそくそお……うあ……ぐ、ぐうあああああああ！」

悲哀感が俺を支配する。

《……救いたいか？》

ああ、救いたかった！

《どんなことをしてでも？》

ああ、どんなことをしてでも救いたかった。

《ならば誓え。小僧の命を我に委ねよ》

ああ、俺の命でいいならいくらでも――

「……………」

――俺は誰と話しているんだ？

いよいよもってとち狂ってしまったのか、俺は……。

「くくう……………」

俺は堕ちるとこまで堕ちてしまった自分に苦笑いをするしかなかった。

「ここまでいくと、人間頭がおかしくなっちまうのか――」

《誓うのか、誓わないのか、どっちだ小僧！》

「…………え」

止まない謎の声。

「なんだよ、これ……」

そして急激に下がる温度。

「おいおい、マジかよ……………」

突如、手に持っていた『黒書』が漆黒の炎に包まれ、激しく燃え滾りだす。

ピシ、ピシ、ピシ……………！

その炎に触れたものは瞬く間に凍結していく。

「ぐうあ……………」俺の腕も例外ではなかった。

指から腕へと急速な勢いで凍っていく。

《誓え、早く誓うのだ、お前には誓う他はない》

ま、まさかこの本が俺に話しかけているのか！？

そんな馬鹿なッ！　ありえない！

なら——これはもしかすると、本物の『黒書』！？

《どうした、このままでは死んでしまうぞ！》

無音の怒声が俺の頭に鳴り響く。

それと呼応するかのように漆黒の炎が踊り狂う。

——本物、だ。

確かな確信を持った。なにより、自分の意志とは関係なく響く謎の
声に、この異常現象。疑う余地はなかった。

——そうか、これは正真正銘の『黒書』。
そうか。

《死を選ぶか、小僧——》

「おい」俺は謎の声を遮る。

「本当にミフユを救えるのか？」

《……………》

——これ以上口を動かしては駄目だ。それは分かっていた。だが、
止まらない、止められない。

「……俺の命が欲しいんだろ！　なら答えろ、悪魔！　お前はアイ
ツを蘇らせることができるのか！？」

——この先に破滅が手ぐすねを引いていることも知っている。だが
止まらない、堪えられるはずがなかった。

「おい、なんとか言え——」

《造作も無い》

俺の目が血走る。

「そう、か……！」　歓喜した。

総毛立つ。

俺の口元がわなわなと震える。

「ならば誓う……！ 俺の命——お前の欲望のまま蹂躪しても気にはしない。煮るなり焼くなりしてもいいし、喰らってもいい。ボロ雑巾のように使って、邪魔になれば捨ててもいい。……だから、だから——」目蓋を閉じ、叫んだ。

「どうか……どうかミフユを救ってやってクレエエ——！！」

ここに、

破滅の序章は始まった。

《盟約は結ばれた》

『黒い魔術書（悪魔召喚のグリモワ）』はひとりでにページがめくられていく。先程まで何も記されていなかった羊皮紙に次々と文字が記されていく。

俺の頭上に魔法陣が浮かび上がった。

《後悔するなよ、小僧。お前は俺の傀儡になったのだ。その目玉、その四肢、その血肉、その内臓に至るまで全て我のものだ。だが安心しろ、代わりにお前に魔術の全てを与えてやるわ……！》

『黒書』に記された文字が俺の眼前に浮かび上がったと思った瞬間、俺は意識を失ってしまった。

目を開けるとそこには、

——桃源郷が広がっていた。

「あれ……目の前になぜか二つの丘がある？」
き、きもちい……。むにゅ。

「こん……の腐れ変態野郎——ッ！」

「へばおあッ！」

え……え！？ な、何が起きた！？ ——頬が痛い！？

俺が顔を上げてみると、そこには仁王立ちをした冬桜ミフユがいた。

「起きた途端にこの破廉恥行為……。やはり貴方はとんだ腐れ変態野郎だったんですね！」

俺を見下ろしながら、顔を真っ赤に怒号するミフユ。

「……………」

「な……なんですか？　もしかして怒ってるのか？　で、でもそれは逆ギレというもので——」

ダン！

俺は倒れた身体を起こす為、片足に重心を置く。

「ひゃう……！」ミフユは目を閉じて、たじろぐ。

俺は彼女の身体を強く抱きしめた。

「救えた……！　俺はミフユを……救えたんだ！　良かった……本当に……本当に良かった……！　ううううぐうううううう——
……………」

これ以上は限界だった。押し殺していた感情が破裂したかのように溢れ出す。

「……はあ、もうしょうがない人です、ね」

彼女の温もりを感じた。

「……………」

「えっと……そろそろいいんじゃないで——」

「ハア……ハア……ハア……むにゅ」

殺気を感じた時には手遅れだった。

「——はッ！」

「ふ……ふははははははは——このド腐れ変態野郎がッ！」

彼女のパンチが痛恨の直撃で俺の顎を砕いた。

俺はもう一度意識を失ってしまった。

「それで——体調の方はどうだ？」俺は顎を摩りながら尋ねる。

「……体調と聞かれましても、特に問題はないとしか？」

ミフユはそっぽを向きながら答える。

「——おいおい、まだ怒っているのか？ あれは不可抗力だ。男児が起きた時に、目の前にあんなものがあつたら埋もれたいのが性つてもんだ」

「——二回目もそうだと？」

「あ、あれは——気が動転してだな……。——ああ、それに！ お前だって胸を貸してくれただろう？ なら了承したってことで——」

そ、そこには荒れ狂う鬼が身構えていた！

「全面的に謝罪しますッ！」

閑話休題。

「はあ、こんな人が命の恩人だとは……」

ミフユはこの世の終わりかのような表情で俺を見つめる。

色々とツツコミどころのある彼女の言い分だが、とりあえず一言。

「記憶あるんだな」

「うつすらですけど」彼女は簡潔的に答え返す。

彼女は続ける。

「不思議と貴方の声が聞こえたんですよ。あ、もちろん全てじゃないけど断片的にですが。——『魔術』で私を助けてくれたんですよ？ 本当に『魔術』って凄いですね」

「うん……。まあ、な」俺は歯切れの悪い答えを返す。

——あれが果たして本当の魔術だというのか。世界の理から逸脱した術だ。少なくとも正しいものではないだろうな……。

俺が曇った表情をしているとミフユがこちらを怪訝そうな顔で見上げていた。

「まあ、とにかく——優秀な魔術師である俺のお陰でお前が助かったのは揺ぎのない事実なわけだ。俺を崇め、俺を讃えろ！ わはは——ッ」

「はいはい……」彼女は、また始まったとばかりに俺を軽くあしら

う。

「ノ、ノリの悪い奴だな……くッ」

冗談で言ったつもりが恥ずかしいじゃないかと、俯く俺を横にミフユは呟く。

「まあでも、感謝はしてますけど……」

「え……あ、ああ」

俺は彼女の一転した反応にドギマギしてしまう。

「ごほんッ。——まあ、いい」俺は空気を変えようと、単刀直入に聞いてみる。「これからお前は どうするんだ？」

「そうですね……。色々ありましたけど、やっぱりとりあえずは仲間たちの所に帰ろうと思います」

「……そうか。ならやっぱりレジスタンス運動は続けていくんだな？」

「そうですね……。ね。色々と弱音を言っちゃいましたけど、私は『不能者』^{ラクダ}ですから」彼女は力強い瞳で答える。「逃れられない運命です。それに、せっかく貴方に救ってもらった命ですから」

「……だな」

——こんな表情を見せられては、納得するしかなかった。

「——貴方はどうするんですか？」

「……え？」

「も、もしよかったですけど……!!」

彼女は急に挙動不審になる。

「えつとですね……! あ、貴方も私たちの仲間になりませんか?!?」

更に彼女は捲し立てる。

「べ、別に無理にってわけじゃないんですが、その……『魔術』の力はかなりの戦力になるかなーっと思ひまして……!」

「……」

「……どうですか？」彼女は上目使いで嘆願してくる。

俺は彼女の急な勧誘に驚いてしまう。しかし——それと同様に嬉し

くもあつた。

だが――

「……無理だ」

「……っ。――そう、ですか」

彼女は本当に、残念そうに、表情を曇らせる。

「そ……そう、ですよ！　いきなりレジスタンスに加わらないかって聞かれても、困りますよね！　……あ、別に気にしないでください！　私も全然気にしないんで、はい！」

彼女の反応に心を痛めてしまいが、こればかりはどうしようもなかった。

「ああ、すまないな。基本的に魔術師は特定の間人だけを助けちゃ駄目なんだ。私情を挟んだら無駄な争い事が起きてしまうからっていうルールが、な」俺は苦笑しながら言う。「――と言っても、既に魔術師の在り方に背いているわけだが」

「――いえいえ、こちらが厚かましく言い過ぎました。すいません

……」

「いや、こちらこそ――」

「いえ、私が――」

「……」

場が沈む。

――どうしてこうなった。気まずいぞ。

「あ――……」何か言おうとしても続かない。

「……」

長い沈黙が俺たちを苦しめる。

「えっと――」ミフユが何かを言おうとする。

これは好機到来だと思った俺は、全力で喰らいつこうと相槌を打つ。

「うん！？」

「ひ……っ！？」

あまりの俺の鬼気迫る勢いに動揺してしまうミフユ。

――ああ、しまった！　驚かせてどうするんだ、俺！　そう――紳

士に、紳士に対応しよう。

「——すまない。それで、何かな？」

『よし決まったッ！』と心の中で意味不明なガッツポーズを取りながら喜ぶ俺に、ミフユは俺の隣を指さす。

「えっと、ずっと気になってたんですが……それなんですか？」

「……え？」

その先にあったものは、俺の隣にある『魔術書^{グリモワ}』だった。それも――

「やっぱり『魔術』に関係するものなんですよ？ 凄いです。本がひとりでに動いたり、燃えたりするんですもん……！」

ヤツは好き勝手に、それはもう傍若無人の如く動き回っていた。

「うお……！」

これの存在をすっかり忘れていた俺はつい意表を突かれ驚いてしま
う。

《私の存在を忘れるとは愚かな小僧だ》

「へえ……」。しかも喋る本なんですか。ホント『魔術』ってデ
タラメですね」

しかも平然と喋ってやがる！ ……ていうか、他の人間にも聞こえ
るのか！？

《聞こえる。我が意図的にそうした。もちろん特定の対象だけと喋
ることも可能だ》

——なッ！？ こいつ心も読めるのか！？

《心は読めん。だが小僧の顔を見れば容易に分かるわ》

その『黒書』は俺をあざけ笑うように漆黒の炎をくすぶらせる。

「……えっと？」

このやり取りにミフユは首をかしげる。

「あッ……いや、何でもない」

「——それで、結局これは？」

「え——……っとこれはだな、お前を助けるのを手伝った存在と言
えばいいかな……？」

曖昧な答えしか言えない俺に対して、興奮する彼女はさらに突っ込

んでくる。

「——ということは、それは貴方の僕みたいな存在なんですね!？」
瞳がキラキラと輝いていて、凄く——凄く眩しかった。

「ああ、その通り——いてッ!？」

突如、頭に痛みが走る。

——『黒書』が己の角を武器に、俺の頭を小突いてきたようだった。

《黙って聞いておれば。ぬかせ、小僧!》

「げ……」

《聞け、娘!》

「え…… あ、はい!」

ミフユは困惑気味に返事をする。

《お前を救ったのは我だ。そしてこの小僧は『どうかミフユ救って
やってクレエエ』と泣きながら我に請うことしかできなかったわ……

……!》

「…… ええっ!？」

ミフユは驚愕すると共に、すぐにこちらを見る。

「…… それは本当なんですか？」

「あ…… はい」

「…… 詳しく聞かせてください」

——それからの記憶はあまりない。

ただ一つ覚えている事は、俺の栄光が一瞬で終わりを告げたことだった。

「——ということは、『黒書』さんが本当の私の命の恩人で、愚か
にも、ふてぶてしくも他人の偉業を奪い取ろうとしたのが、この腐
れクズ野郎ってことですか？」

《その通り。この小僧では不可能な『魔術』を我が媒介になり、使
わせてやったのだ。言ってみれば小僧が我の僕のようなものよ》

「……」

「なるほど。何か色々と合点がいました」

うう……言いたい放題言いやがって。ミフユのヤツへの羨望の眼差しが俺の心をざわめかせる。

「——でだッ！」

俺はどうかこの状況を変えるべく、話題を変えてみる。

「ミフユはいつ、ここから出ていくんだ？」

「……」

——？

《せっかちな小僧だ。『空気』というものが読めないのか？》

「はあ、ホントに。何と云うか、無粋ですね」

あれ……？

「……まあ、確かにいつまでもここに居ても意味が無いので、早く出ていった方がいいかもしれないですね」

「あ……っ、いや、そういうわけで言ったわけじゃ——」

「いえ、いいんですよ。これ以上迷惑を掛けるわけにはいかないの
で。——それに、私には大切な役割がありますから」

彼女はそう言くと、せっせと用意を始める。——といっても特に準備する物も無く、すぐに支度が終わる。

急に時間の流れが速くなったような気がした。

「あ……本当にもう行くのか？」

俺は戸口の前で、意味のない言葉をミフユに問い掛ける。

「はい……、今こうしている間にも『不能者』^{ガラクタ}が苦しんでいるんです。私だけが安穩とここに居るわけにはいきませんから」

その表情からは確固たる決心が窺えた。

「……そっか」

ミフユとはここで別れれば、きっともう会うことは無いだろう。――

——これで今生の別れになるな。

「では行きます」彼女は戸口の扉に手を掛ける。

——そして最後に、彼女は頭を下げた。

「本当に、何と云っていいのか……感謝してもしきれません。『黒

書』さん、本当にありがとうございました……！」

《うむ》

そして、ミフユは俺を見つめる。

「えっと……さ、さっきはあんなこと言いましたけど、本当は凄く感謝してるんです……よ？ 貴方の声、聞こえてましたから。——ホント、嫌になるほど『私を救う』って……」

桃色に染め上がった彼女の頬が俺を動揺させる。

「さ、最後に貴方の名前を伺ってもいいですか……？」

「ドウマン」

「……ドウマン。やっと聞けました」彼女はそう言うと、俺に近付いてくる。

「……！？」ふぁつとした甘い匂いが鼻腔を刺激する。

「ドウマン、ありがとう」

ミフユは俺を抱き締めると、感謝の言葉を伝えてくれた。

「……あ」

俺は想定外のことになったように、上手く言葉が出なかった。

——高鳴る鼓動が止まらなかった。

《あの娘、人間にしては道理をわきまえていたな》

「……ああ、本当に」

彼女はいつの間にか脱兎の如くこの場から立ち去っていた。

この光景には既視感がある。——が、今度は追わない。

——心にポツカリと大きな穴が開いた気分だ。

《あの娘は自分を『不能者^{ガラクタ}』と言ったな？》

「ん……あ、ああ」

急に尋ねてくる『黒書』に俺は適当に答える。

《——ということは、『祝福の石』が扱えないのだな？》

「『祝福の石』？ ——『悪魔の石^{デーモンストーン}』のことか。ああ、扱えないぞ。」

それがどうかしたの——」

《あの娘を追うぞ》

「……………はあ!？」

意味不明。

「——ちよ、なんでいきなりッ!? 意味が分かんねえよ! それにアイツのところには行けない! 魔術師にもルールってもんが——」

「——」

《意味など小僧が我の傀儡の他にあるか! さつさと支度をしろ!》

「な……ッ。言つとくがな、俺はお前の傀儡なんかじゃ——」

《五月蠅い小僧だ》

——『強制支配 (force - to - rule)』——

「へッ……………!？」

次の瞬間、俺は予想だになかったことをする。——いや、そうされた。

俺の意志とは無関係に身体が勝手に支度をしている。それも、超高速に!

《あまりこの術は使いたくはなかったが、止むを得ん。——だがこれで理解したはずだ、お前は我の傀儡だとな……!》

踊り狂う『黒書』の炎が俺の身体中を取り巻く。

ああ、なんてことだ……! これじゃ真正銘の操り人形じゃないか。くそッ……これが悪魔と契約を結んだってことなのか。

そっこうする内に支度を終えていた俺は——……って、「ああああああああああ!」

《娘を見失っては敵わんからな。全速力で行くぞ》

『黒書』の無慈悲な言葉と共に俺は息をつく暇も無く住处から飛び出すと、全速ダッシュで駆けだした。

景色が次々と塗り替えられていく。これが足の速い人の見る景色か。はええ——ッ！

最初はあるなにか小さく見えていたミフユの後姿がどんどん大きくなってくる。

ドドドドドドッ！

背後から迫る強烈な足音に気付いたミフユは走りながら後ろを振り返る。

——その顔が一瞬で凍りついた。

それもそうだ。

俺だってこんな猛烈な勢いで後ろから走ってこられたら全く同様の反応をすることだろう。

と、冷静に分析していても俺の身体は意志とは関係なく超人的スピードで疾走する。ホントこれどうなってんだ……。

そして、着実に近づく俺は、ついに——ミフユの隣に並ぶことができた。

「へ……え？ え……えっ……ええええ——っ!？」

俺はミフユの狼狽に強く頷く。

分かる。分かるぞ、その反応。だが錯乱状態に陥ってもそれはお前のせいではない、と俺が断言してやる。——てか俺もしているし！色々ツツコミどころのある今の俺だ。『なぜ？』『どうやって？』

『全身に纏っているのは？』『てか怖っ』、と頭上に疑問が飛び交っても仕方がないことだ。——てか俺もしているし！

——だが、その……なんだ。

こうやって論じ合う前に。

まあ——とりあえず、

「一旦止まろうか」

ギュギュギュギィ——ッ！

俺の提案が合図に俺たちは急停止する。

「ゼーハーゼーハー——……ぐッふう………キツイッ!？」
俺の意志とは関係なくても俺の身体だから普通に苦しいんだな……。
それもそうか。

「……………???」

未だに状況を整理できていないミフユは俺の顔を見て、狼狽している。

《お前は私の傀儡だ。これで分かっただろう》

『黒書』の声が俺の頭に直接伝わってくる。すると、それまで身体中を纏っていた漆黒の炎が消えていく。

——くそッ、コイツ俺を脅してやがる。『俺にはお前をいつでも操れるんだぞ』ってわけか。だから素直に命じられた通りにしろと。
俺は『黒書』を睨みつけるがそいつは悠然と宙で踊っていた。——
憎たらしいヤツめ。

俺は舌打ちをしながら、ミユフの方へと顔を向ける。

今なお『?』の表情でいる彼女に俺は不覚にも癒されて、また惑わされる。

別に孤独感到苛まれているわけではなし、一人身が辛いわけでもない。ただ、楽しくも無い。その狭間で俺は揺らいでしまっていた。それに加えて『黒書』の無言のプレッシャーが俺を追い込ませる。

——『黒書』に屈するのを選択するのにそう時間はいらなかった。というか、その他に選択肢が無かった。俺が反抗しても、どうせさつきの術で強制的に操られてしまうのがおちだ。

俺はそう意を決すると、一連の流れを全く把握していないミフユに俺は向き合う。

「やっぱり俺も行く」

「え……………」

「だから、俺もお前の行く場所に行くって言ってんだよ」

それでも彼女は意味が分からないと、俺に尋ねてくる。

「……………えっ。——な、何故ですか!？」

「……………き、気が変わった」

俺は素っ気無く言う。我ながら無理矢理すぎる動機だ。

急に背中に猛烈な冷気が伝わってきた。

「おわ……！」

振り向くと『黒書』の猛り狂う炎が俺を襲わんとしていた。

「……コイツ相当怒ってるな。——だが、しょうがないだろ！ 実際、理由も糞も無くて、お前に命じられて俺は仕方がなくだな——

《……………》

ぐ、ぐう……ッ。何て気圧だ。さすが悪魔といったところか。

——鬼気迫るプレッシャーと対峙して気がいつてしまっていた時、

「う、嬉しいです」

「……へ？」

突然のミフコの言葉に、俺は不意を突かれてしまった。

「いや、別段特別な思いがあるわけじゃないんですが——、『魔術』の力がレジスタンスに加わればこれ以上心強いものはないのは……

当然でしょ？」

「あ……」

俺の頬が緩む。

「——べ、別に勘違いしないでくださいよッ！？ あ、貴方個人に魅力があるわけではなく、むしろ……そう！ その『黒書』さんの力が魅力的なんです！ 貴方は……まあ、おまけです」

「うえ……！？」

褒められたと思ったら、一瞬にして貶された！？

《分かっているではないか、娘。我に任せておけ》

「はい、お願いしますね『黒書』さん！」

——いつの間にか元に戻っている『黒書』は調子に乗り、それにミフコも悪ノリする始末。

これはやばいッ。俺のアイデンティティーを喰らおうとする悪魔がいる！ 俺に『魔術』という個性がなければただの凡人だぞ！？
くそう、自分で言ってて哀しくなる。

《小僧も我の力を存分に頼るがいい。ただ余計なことはするなよ？

《増長する『黒書』は止まることを知らない。

ぐぬぬぬぬ……俺をナメてやがるな。いつかその鼻をへし折ってやる！——いや、待てよ、俺だって優秀な魔術師だ。俺が『黒書』の力を使わずに活躍すればいいだけの話じゃないか！ そうすれば『黒書』の存在意義も無くなるし、ミフユだって本当に頼り甲斐のあるのは俺だって気付いてくれるはずだ。

そう思うと不思議と焦りが消えてくる。「……くふう」

「な、なんですかその気持ち悪い笑みは!？」

《気でも狂ったか、小僧?》

「ふふ……今は好き放題言ってるがいいさ。だがいつか後悔するはずだ。そう——あの時なぜアイツを敬わなかったのか、とな……!」

「……」

《……》

俺はミフユ達を見下ろし、啖呵を切る。

「俺は意地でも『黒書』なんかの力は頼らない!……だが安心して、優秀な魔術師である俺が力になってやるんだ。必ずレジスタンスに大きな貢献をしてやるから大船に乗ったつもりでいぐはあ腰が痛いッ!？」

たからかと宣言していた俺は急な激痛に襲われる。

《ぬう。やはり負担が大きかったか。だからあの術は使いたくはなかったのだ》

気付くと腰だけではなく、全身に痛みが生じてくる。さっきの術が今頃になって身体に影響し始めたようだ。

俺はあまりの痛みに倒れ込み、地に伏せる。だが——それでも立とうと、尊厳を保とうと、痛みに痙攣する腕を懸命に動かし、ミフユ達の方へと手を向ける。

「た……たすけ——」

「泥船ですね……」

《ああ、泥船だな》

そこには無情な言葉を吐く『冷徹少女』と『黒書』が俺を見下ろし

ていた。

俺は全てを理解した。そして俺は朦朧とする意識の中、一つだけ思った。

最初は俺こんなキャラじゃなかったはずなのになあ……。

ピクピク……ピク

ピ、ピク……ガク

こうして少年の数奇な運命が始まった。

三章（後書き）

しゃあんなろー！ありがとう！

四章でっす！

「凄いな……」

思わず感嘆の声が漏れていた。

「そうですか？」

ミフユはそんな俺の反応に対して素っ気なく答えるが、これが凄いや
と言わずしてなんとするんだ。

公道を走るは俺が見たことも無い自動車。正確には形そのものに関
しては俺も見たことがある。ただ決定的に違ったことは、それに一
つもタイヤがない——つまり無輪の自動車だったということだ。

それは低空で、優雅に疾走している。もちろんタイヤがないからア
スファルトとタイヤ同士が削り合う不快な音も皆無だ。

加えて、歩道には悠悠と宙に浮くスケートボードに乗りながら談笑
する人々が見える。

「バクトウ・ザ・なんちゃらかッ！」

俺はつい興奮して叫んでしまっていた。

「——え、ばくとうざ……何ですか、それ？」

「……いや、すまない。何でもない」

理性を保てず、自分に反省。——だが、これはしょうがないだろ？
宙に浮いている自動車、スケートボード。あと目に付く限り俺の
知らない物ばかりだ！ まるで超未来にでもタイムトラベルした気
分だ。……やっぱり俺の常識は間違っていたのか。それにしても、
凄いな。

「——ちよっと、ドウマン。キョロキョロないでください、怪しま
れます！」

「あ……すまん」

怒られた……。

《くく……この程度で動揺するとは、小僧の肝っ玉は小さいな》
「くっ……この減らず口め。——というか堂々と喋るなよ、それこ

そ怪しまれるぞ」

《安心しろ。ちゃんと二人だけに聞こえるようにしておる。小僧と違い、そこは抜かりないわ》

背中袋に入っている『黒書』は人を小馬鹿にしたように言葉を並べる。

ぐう……！　どんな顔か分からんが絶対コイツ笑ってるだろ。その歪んだ顔を殴りてえ……殴りてえよお……。——ぜってえいつか絶対ぶつ殺してやるッ！

そう心に誓う俺を横目にミフは溜息をつく。

「はあ……ホントどうでもいいですが、余計なことだけはしないでくださいよ？　もうすぐ、レジスタンスの拠点がある首都『スプライド』に到着するんですから。黒さんも人で遊ばないように。いちお、この人にも尊厳の欠片はあるんですから」

《ミフユが言うならば、まあ仕方がない——》

「ちよつと待てよッ！　なんかそれじゃ、俺が小さい子どもみたいじゃ——」

《まあ、小僧であろう？》

「……」

「ぷつ——」ミフユは口に手を当て、身を震わせる。「ちよ、ちよつと黒さん！　だからやめてくださいって！　怪しまれますぅ……」
ふふ、ふはははあはは……。コイツら絶対楽しんでるな！？
いいだろう、孤軍奮闘上等じゃないか。やってやる！

「ふん……後で吠えず面をかくがいい！　——そして優秀な魔術師である俺にひれ伏すことに——」

「いや、マジで黙ってもらえますか？　殺しますよ」

ミフユの絶対零度の言葉に俺は凍結する。いつの間にか俺たちはかなり目立ってしまったようだった。

「あ……ごめんな、さい」

《愚かな也》

——ここで俺は一つの理を知った。

『この世に神はいない……！』

「ふう……」ミフコは額の汗を拭いながら、足を進める。「ああ……『スカコーラ』が恋しい。早くこの乾ききつた喉を潤したいです」聞き慣れない単語に俺は尋ねる。「——『スカコーラ』？　なんだ、それ？」

ミフコは驚愕の表情で俺を見る。「ええっ！　あの『スカコーラ』を知らないんですかあ！？」

「——ッ！？　彼女の急な変貌に俺は後ずさった。

「——ってドウマンはレジスタンスでもなかったし、加えて記憶に障害があつたんですよね。それでは知らなくて当然ですね。でも、人生の四分の三は損してますよ」

「四分の三もッ！？　それって限りなく殆どの人生を損してるってことだぞ」

「間違いありません」ミフコは即答する。「あんな崇高な飲み物を今まで飲んだことがなくて、ましてや知らないとはなんて残念な人生を送ってきたんでしょうね貴方の人生は本当に残念です」

「——俺の人生をけなされた！？　それもケロつと残念な人生って二回言つたよ、コイツ」

「残念な人生を残念な人生と二回言つては駄目なんですか？　……とは言いませんが」いや、言ってるよね？　「——はあ、残念です」ツッコミつてえ……。

——とりあえず。

「——それは飲み物でいいんだな？」俺は色々と納得できなかったが話を進める為に我慢することにする。

「その通りです」そう言うとミフコはベルトについていたものを取り外す。「これを見てください」

俺の目に入ってきたものはスナップフックに取りつけられた、束になつた特徴的な形をした小さい瓶だった。

「これは……キーホルダーか何かか？」

「はい……」彼女の手が震えている。若干頬も赤い。

——ん？ 体調でも悪いのか？ 俺は少し心配になり、聞いてみる。「もしかしてお前、具合でも悪いの——」

「可愛くないですか？」

「……え？」

ミフユは涎が垂れんばかりに、恍惚的にそれを見つめていた。そしてすかさず、俺にグイッと突き出して見せると「ドウマンもこれ可愛いと思いますよね！？」と尋ねてくる。

「……ううえ……え？」

この奇怪な光景に動揺を隠せない俺は間抜けな声が漏れてしまう。

「はあ……いつ見てもなんて可愛らしい……。このつやつとした肌触りに、猛々しくも愛くるしい形。黒く輝く妖しい光は見る者をうつとりとさせ……先端から溢れんばかりのツンとした匂いに蕩けてしまう。まさに神が創造した飲み物。ああ……早く飲みたい……じゆる」

「ゴ、ゴク……！」

ここに官能はあった！

「——はっ！？ す、すみません。私としたことが取り乱しちゃいました……！」

「あ……ああ大丈夫」

もう少ししてもよかったかも……と思う俺は変態なんだろうか。いや、健全な男なら今のはしょうがないはず、うん。

「ゴホンっ！——まあ、つまりはこのキーホルダーのモデルとなっている飲み物が『スカコーラ』というレジスタンスが製造している清涼飲料水ってことです、分かりましたか？」

ミフユは顔を真っ赤にさせ、機関銃の如く喋る。

「——えらくかいつまんだ説明だな。まあ、でも何なのかは理解できた。というか実際に製造してるって凄いな。味も期待できそうだし」期待しててください、多分ウマすぎて感動しちゃいますから。——拠点に着いたら一緒に死ぬほど飲みましようね」

「死ぬほどは勘弁だが、楽しみにしとくか」
レジスタンスの拠点はどんどころか分かんが、これでまた一つ
楽しみが増えたな。

「ああ、キツイ……気持ち悪い……」

俺は眉間にしわを寄せながら不満を口にする。

全身から汗が吹き出し、気持ち悪い。人の熱気でさらに熱い、気持ち悪い。

「——ミ、ミフユが飲み物の話をするから余計に辛くなったじゃねえかよ……」

「私のせいにしないでくださいよ。あの味を知ってる私はもっと辛いんですから」

そう言うミフユの眉間にも若干しわが寄っていた。さすがのミフユにも限界が見えてきたらしい。

《これしきで屈するとは情けないぞ、小僧》

「ああ……」『黒書』の嫌味さえもろくに頭に入ってこない。

「——まあ、でも確かにここまでの道程は厳しかったですね。『ミツイヤ』を通り抜けるのが最短ルートでしたけど、あんな騒ぎがあったすぐ後に通るのはさすがに無理がありますしね。そのお陰で、遠回りでも蛇行したルートを通らないといけなくなりましたから。——でももうすぐですよ、あれを見てください」

ミユフはそう言うのと、前方を指差す。

摩天楼の門と言えはいいだろうか。それは巨人ですら楽々と通れそうなほど巨大な門だった。

「別名、『要塞都市スプライド』。都市を丸ごと囲む巨壁が一切の攻撃から守ってくれる。——政府の売り文句です」

「これは確かに、とてつもない要塞だな。——おい、『黒書』。お

前の力を使ったら、これブチ壊せるか？」

俺はふと冗談交じりに『黒書』に聞いてみる。

《我に不可能なことは無い。ただし小僧の全生命力を消費することになるがな。——やってみるか？》

「……いや、今は遠慮しとこう」

『黒書』の冗談とも本気とも取れる言葉に俺は背筋に冷たいものが走る。

「これみよがしに見せつけてますね……」

——歯が歯を噛み砕く音が聞こえてくる。ミユフは汚物を見るように要塞を見据えていた。

「政府のヤツらはここが攻撃されるなんて想定していないんですよ。ただ、力を誇示しているんです。——『お前らじゃ無理だ。諦めろ』とね」

「……」

彼女の眼ははつきりと言っている。『いつか全てを壊してやる』と。

《——我を忘れるなよ？ 最悪、最終手段は残しといてやる》

『黒書』の言葉に俺は首を傾げる。——最終手段？

ガシィ……！

ミフュは俺の手を両手で力強く握り締める。

「誠心誠意頼らせてもらいます、黒さん」

《うむ》

「…………って待てうおおい！ 勝手に決めるんじゃないねえ！ 最終手段ってあれだろ？ 俺の全生命力をってヤツだろ！？

しかも『黒書』に言ってるのに俺の手握るとか、何か二重の意味でム力つくわッ！——は、離せこのヤロオオ——！」

俺はどうかミフュの手から逃れようとするが、俺の手と同化したのではないかと思うぐらいについて離れない。

「では黒さん行きますか？」

《うむ。行くでしょうか》

そう言っただけミフュは俺の手を引きずりながら前進していく。

「やべえ、この悪魔二人から逃げ切れる気がしねえ……！」俺は戦々恐々としてしまう。「——て、あれ？」

ここで俺はミフユの不可思議な行動に首を傾げる。

「えーと、ミフユさん？　俺たちはレジスタンスの拠点に向かってるんだよね？」

「はいそうですよ」

「ならどうして門のあるあっちの方向に行かないで、ここを右に曲がるんだ？」

俺は至極当然の疑問を述べる。事実、向かおうとしている方向には廃れた街道が続いているだけで、どう考えっても都市の入り口に続いているとは思えない。

すると彼女は当然のように返答する。

「門には検問が敷かれているんで、私たちはこっちです」

「……教会？」

目の前にあるのは街道同様に廃れた教会しかなかった。

「ここから都市に入り込みます」

教会↓都市への入り口。……どうということだ？

淡々と答える彼女に対して俺は疑問が止まない。

「ここから入り込むって、ここ教会だろ？　都市はあっちだぞ？

方向も違うし、もしかして地下道があると——ぐむう」

突然ミフユが俺の口を閉じたおかげで言葉の最後が間抜けな感じになっってしまう。

「よく分かりましたね。ただし黙っててもらえますか？　あそこ

……」目をやると兵士が巡回中だと分かる。「ヤツら遠聴器を付けてるんで、聞かれちゃいます……」

「……」

俺は気が付かなかったのにミフユは気付いた。だてにレジスタンスの名は語ってないというわけか。

「ふう……」

兵士たちは過ぎ去ったようだ。

「ここからは不要な会話は慎んだ方がいいかもしれないですね。少しのミスで私たちの首はおろか仲間の首が飛びかねませんから」

「……………」

——もうあんなことはいやだ。俺は脳裏に不安が過るがすぐに振り払う。

「……分かった」

「——では入りますね」

ミユフが教会の扉に手を添えた。

息を呑んだ。

神聖、と言えいいだろうか。扉の風貌から想像していたが時代を感じさせるほどの朽ちた大理石の建物。しかし、その老化すらも聖へと昇華される不思議な空間がそこにはあった。そして、上を向くと広大に広がる絶景——ステンドグラスが見る者を魅了する。素晴らしかった。

そんな感慨にふけっている俺をよそにミユフはズカズカと奥へと進んでいく。

俺も一コマ遅れで彼女に続いた。

礼拝者は誰もいない。ただ一人、老いた神父が一番奥で鎮座している。

神父は、決してきらびやかな服装ではなかったが神威を感じさせるオーラに包まれていた。そして、その目を見る者を動揺させ、過去の過ちを悔い改めさせられる。しかしその反面、優しさに抱擁され、穏やかな気分へと導いてくれる。

まさに聖職者に相応しい老人だった。

「——教会に何ようかな、迷い子たちよ」

声も神秘的で威厳のある声だ。

「……………」

神父の言葉が聞こえなかったのかミユフは何も答えようとしな

そればかりか、どことなく、その神父を睨んでいるようにも見える。
「お……おい、神父様が声を掛けてくれてるぞ……？」

それでも何の反応も示さない彼女に俺は猛烈に焦り、気が気じゃなくなる。しかし、そこは偉大な神父様だ。何の不満も言わずに、そればかりか暖かい言葉を与えてくださった。

「何か悩み事でも？ それではまずは一緒に祈りませんか？ 己の心を落ち着かせ、心に巣くう邪念を取り払いましょう」

な——なんて優しい言葉……。神父様の顔を見るだけで救われそうな気分になる。……それなのに、それなのに、ミフユは……！

「——五月蠅いですよ、この腐れ神父。貴方はいつ見てもクソ豚野郎ですね」

「……！？」

——どういうこと！？ 気でも狂ったかミフユ！ 神父様になんてことを……！ ああああ……。やばいやばいぞ……。何が何だか意味が分からんが、ヤバい気がする。ようは神に暴言を吐いたと同義だろ？ ……神父様の顔が見れねえ。

すると——

「——ふむ。許す」

「……ええ、神父様！？」

「だから、その暴言許すと言っておろう？」

な、なんてお方だ……。！ 優しい、優しすぎるぞ！ まさに神の使いに相応しいお方だ！ 人間にもこんな人格者がいるとは。——いや、聖職者も魔術師同様に汚れた俗世から一線を引いた存在だ。なら何の不思議もなかったか。それにしても素晴らしい方だ。

「ミフユも見習わないと——」

「……だから、もう一回言ってくれんかな？」

「……………」

俺は今、神父様にとってとても無礼な、侮辱的な聞き間違いをしてしまった。だから——うん、そんなはずはない。絶対にあるはずがないんだ、天が裂けない限り。

「い、今なんて——」

「だからこのクソ豚野郎であるわしを罵ってくれと言っているんじゃない——」

——天が裂けた。

「——ホントどうしようもねえジジイですね」ミフユの様子も明らかにおかしい。「なら、何回でも言いましょう。貴方はとんでもないクソ豚野郎で卑しいジジイです。こんな少女に罵られて興奮するなんてホント変態野郎です。聖職者の身でありながら、こんな性癖があるとは神様が泣いて呆れてますよ？」

「ハア……ハア……ハフウ……ン……もっと！ もっと……！」この常軌を逸した光景に俺は、開いた口が塞がらなかった。俺はとんでもないものを見てしまっているらしい。

「——こ、この人は本物のマゾヒストだ！ しかもかなりの場数を踏んでいる！」

他にも俺がいるっていうのに一切気にしないで己の性欲を貪り喰らっている！ しかもあの老体でマゾって——きっと百戦錬磨のマゾヒストに違いないぞ、これは！

「——つと、冗談はこれぐらいにしますか、神父？」唐突にミフユが平常に戻る。「それで、認証はオーケーですか？」

「……え？」

「ふむ……もう終いかい。しょうがないのう、——確かにそちは『ガラクト不能者』解放軍の『レジスタンス』の一員だと認証した」

老体の神父がそう言うと、突如として祭壇の奥の壁から何かが外れ

た音がする。

——すると地下へと続く通路が現れた。

「ふう——……毎回ながらこの認証方法どうにかありませんか、神父様」

「そうはいつでも、この方法が一番安全だからのお。まあ、時間は確かに掛かるがな」

——問題の二人が話している間、俺の頭の中は文字通りぐちゃぐちゃになっていた。

先程の一連の流れとは一転して、普通に話している二人。まるで先程の奇天烈な光景が無かったかのようだ。

「——ちよつと、待ってくれないか！」何事もなかったかのように話している二人に俺は割りこむ。「えつと——……」

しかし次の一手が中々出てこない。——マゾ的行為に認証、そして開門。……まったく理解不能だ。

——俺はおとなしく意味が分からないと聞いてみた。

「おつと、すまない少年。あまりの快感に君の存在を忘れていたよ」と俺の疑問に答えてくれそうな神父さ、いや……もう神父でいいかなんか残念になる。

「知ってるか知らんがわしはマゾだ」

「いや、知っているが!？」

「ふむ、そうか。……は、恥ずかしいのう」

いや、なに恥ずかしがってんの、このジジイ!? ——はあ、もういいか。猛烈にツツコミたいがここは耐えなければ。

「ごほん! ……まあよい。——説明するとだな、ようするに神父であるわしに開口一番に罵ってくれれば『レジスタンス』だと認証するわけじゃよ」

実に簡潔的な説明だった。——なるほど、全然分らん。

「……もういいです。ここは私が説明しますね。最初に説明しなか

「つたは私の責任ですし」

と、助け舟として間に入ってきたミフユの言葉に俺は耳を傾ける。

「簡単に言えば、神父様に会うなり侮辱的発言を一定時間言うことで私たちは『レジスタンス』の一員だと認証されるわけです。そして認証されたから祭壇奥にある『レジスタンス』の拠点に繋がっている隠し通路が開けられたってわけです。——そして、貴方の一番の疑問である、なぜマゾと認証が繋がっているか。それは単純に、この認証方法を知らない人が口を開くなり、よりにもよって神父に対して暴言を吐くなんて間違ってもないからです。だからこの認証方法は『レジスタンス』にとって安全だと言えるわけです」

「……なるほど」

ミフユの説明で理解できた俺だったが、なんてふざけたシステムなんだ……とは決して言わない。この手順を行った当の本人が目の前にいるからな。

「ふざけたシステムですよ、これ」

当の本人言ってるし！

「なにお！ 実務と性癖を兼ね備えた素晴らしいシステムではないか！」

「……マゾの鑑だな、アンタは」

——まあ、そんなこんな unnecessary ことがあつて数刻後。

「……もう行くのかのお？」

「はい、疲労もありますし、報告しないといけないことがありますから」

そうきつぱりと言うミフユに老いた神父は本当に、残念そうに頷く。

「——そうか。ならば気を付けていくがよい。隠し通路といつてもどこから犬が入り込んでくるか分からんからな。わしはいつでもお前たちを見守っておるぞ。ぬしらに神の御加護があらんことを……」
マゾやろ、もとい先程の神父とは一転して、敬虔な聖職者の表情をする神父に俺は少なからず驚いてしまう。——腐ってもやはり聖職

者なのだろう。老人の評価を改めることにした。

「そしてまたこの老体を痛めつけておくれ……！」
俺は改め直した。

「——あんな邪念の塊のような神父は初めて見たぞ」

「まあ、マゾヒストですからね」ミフユは呆れた表情をする。「——

でも、本当は素晴らしい人なんですよ？」

「——ん、というところ？」

ミフユがあの人を褒めるとは意外だ。

「——実はあの方は『不能者^{ガラクタ}』じゃないんです」

「え……」

「そう、普通の人間なんです。それでもこの世の中は間違ってるって考えてくれて『レジスタンス』の協力者になったんですよ。——

あれでも昔は凄い司祭だったらしいです。でも、『不能者^{ガラクタ}』の人権を唱えるばかり、今ではこんな小さい教会に追いやられてしまっ

……」

「あの神父が……意外だな」

あの神父がそんな偉い人だったのか……。いや、それ以前に『不能者^{クラクタ}』じゃないって、驚きだ。人は見た目じゃ分からないものなんだな。——マゾも然りだが。

「まあ、気持ちは分かりますよ。初対面であの衝撃は凄惨なものですからね。第一印象は別として、あの神父……いや、あのジジイ……

……クソ豚野郎は情欲の塊ですからね」

徐々にドス黒いオーラがミフユの身体から滲みでてくる。

「……こっちは疲れてるっていうのに、なんであの豚野郎の頬が染まった顔を見ないといけないんですかね。それに無駄に口を動かしたから余計に喉が乾いてくる始末……。ああ無性に腹がたつてきました。次会ったらあのジジイ、快感に変換不可能なぐらい度の超えた肉体的痛覚を与えてくれましようか、ふふふふ……」

不気味に笑うミフユに俺は戦々恐々としてしまう。

「——ス、『スカコーラ』を早く飲まないとな！」

「ええ、早く飲みたいものですよ……はあ」

覇気を感じさせない彼女の返答に、思った以上に彼女が堪えていることが窺えた。実際、俺も限界に近かった。

息苦しい地下道、しかも生臭い匂いが辺りに充満している——ミフユの話ではこの地下道は一本道ではなく、所々破棄物処理場に繋がっているらしい。そして極めつけは風景もクソもない単調な道に、神父から貰ったランタンが照らす僅かな視界以外は全てが暗闇。——俺たちは肉体的にも精神的にも追い詰められていたのだ。

コツ、コツ、コツ、コツ——……

静かな空間にやたらと響く足音。何だか居心地が悪い。

「——どうでもいいんだが、さっきから何も喋らないけどどうかしたのか『黒書』？」

この状況で沈黙だけは阻止したかった俺は、何気ない疑問を聞いてみることにした。

「あ……確かに」ミフユも同意する。

そう考えてみると不自然なことだった。道中、暇さえあれば嫌味を言っていた『黒書』が先程からシンと静かになってしまっていた。考えれば考えるほど気になってくる。

最初、『黒書』らしからぬ歯切れの悪い口調で要領の得ないことを口走っていたが、観念したかのように話し始める。

《別段問題は無いのだが……何と言うか、むう……つまり教会は生理的に苦手なのだ》

……。え。悪魔が教会が苦手？——まあ、確かに言われてみれば何の違和感もないことだが悪魔が生理的につて……。……。

「……なんか笑えるな」

《……もしや小僧。侮辱しておるのか、この我を》

「いえいえ。そういうわけではないのですが、『黒書』殿にしては可愛らしいことを言うものだ」と

俺はそう言いながら微笑する。これまでのうつぶんを全て返す為に今が好機と嫌味ったらしく言葉を陳ずる。

「ホント意外ですね。まさか黒さんにこんな一面があるとは……。メモっとかないと」

——いいぞ、もつとやれ！ 悪意はないが、天燃でメモメモしているミフユに俺は心の中で盛大に褒め称える。

《…………… 我を侮辱するか小僧。なるほど、ああ分かった。今一つ私の畏れを認識していないようだ。ならば、見せよう——あの教会ごとき一瞬で消し飛ばせるとな！》

只ならぬ雰囲気を感じた瞬間、『黒書』はひとりでに背中袋から飛び出し、憤怒の波動を辺りに撒き散らす。

「…………… ひつ」 本能的に危険を察知しているのだろうか。無意識に身体が震えだす。

——な、なんて威圧だ。やべえつてもんじゃねえぞ、これ。俺はもしかしたら絶対に怒らしてはいけないものを怒らしてしまったのかもしれない。

《フハハハハハハハアアアアア——ッ》

怒り狂う悪魔……………。——どうしよ、これ。いや、ホント。このままじゃコイツ、マジでやりかねんぞ……………。どうすればこの悪魔を鎮められる？

……………つ。

俺は一つの活路を見いだす。しかし、それは、あまりにも辛い選択だった。

《よし、思い知るがいい人間。これが我の力——》

『黒書』はカウントダウンに入る。

俺は悩む、悩みに悩む。だが、残酷なことに時間は待つてはくれない。このままではヤツは間違いなく教会を消滅させるだろう。ぶっちゃけあの変態神父なんかどうでもいい。教会と一緒に燃え尽きてもそれこそ神父の本望だろうさ、うん。でも——礼拝者がいたらどうする？ 彼らに罪は無いのに消滅されてしまったら、……………そんな

理不尽、俺は認められない！

……だから、俺は英断する。屈辱という汁を飲み込んで、俺一人犠牲になる。他の皆が助かれれば俺なんてどうでもいい。だから……俺は喜んで、地面に両手を添えた。

「ごめんなさい」

——そう、謝罪ここに極まる。土下座だ。

……っ！？ 場が凍りつく。

ふふ、そりやそうだ。この俺が土下座をしているんだぞ？ ホント大人になったよな。ホント偉いよな、俺。——きっとこの心意気を酌んでくれてるはずだ。それに、これからはミフユだって尊敬の目で俺を見てくれるはずだ。

そう思っていた。

《……ふむ。まあ、とりあえず殊勝だな、小僧。——だがそれでは足りぬ》

「え……！？」

「私も同感です。このくらいの謝罪で許してもらおうなんて、甚だ可笑しいです」

「ええ……！？」

ていうかお前も一枚噛んでいただろうに、何その上から目線！？

——まあ、天然で噛んでいたんだろうが。

いや、それ以前に！

「お前ら……断腸の思いで土下座をした俺に言う言葉がそれか！？」

「断腸の思い？ はっ、何を戯言を。——まあ、それなら、そうで

すね。貴方の意を酌んで、文字通り腸はらわたを断つてもらいましょうか」

「それじゃ俺死んじゃうよ！？」

《——言葉に誠意が伝わらん。『黒書様、この卑しい小僧めがとんだ御無礼をしでかしてしまい、本当に申し訳ありませんでした』と額を地面に擦り付けるぐらいしてもらわんな》

「俺に人間を辞めろと!？」

「もう辞めてるじゃないですか。これ以上とない醜態を晒してるんですから諦めたらどうです？ どうせもう尊厳の欠片も無いことですし」

——ああ。俺、なに盲目的になつてたんだろう……。コイツらは血も涙も無い悪魔たちだった。非情で、残忍で、人の苦しみをすら糧にする非人間。コイツらに頭下げた俺が馬鹿だった。……くそ……くそう、色んな意味で情けねえ……！

《くくつ、小僧。我が情けをやっているのだぞ？ 貴重な時間も与えているというのに、何をそこで一人震えている。さあ、早くこっちにきて首をたれ——……》

「……？」

突然、忌ま忌ましい『黒書』の声が途中で止まる。

「どうかした——」

《黙れ、小僧》

有無を言わせない『黒書』のものの言いに俺は少し眉をひそめる。

「な、なんだよ。そこでお前が怒るのかよ。普通ここは俺が怒るとこ——」

《誰か来るぞ……》

「——っ!」

俺たちは瞬時に動きを止めた。

そして、五感を研ぎ澄ます。

最初、何も感じなかった。

しかし次第と、

コツ、コツ、コツ、コツ——……

空気を伝わる足音が余韻と共に俺たちの耳元に入ってくる。

足音からして人数は一人。しかし、誰なのかは見当もつかない。ここにきて神父の忠告が脳裏に蘇ってくる。握る拳が汗ばむ中、俺と

ミフユは互いに頷き合う。——もし、敵だったら迷わず討つ。
光が届かぬ暗闇の奥から徐々に、徐々にそれは近付いてきた。
そして、

「……ッ！」暗闇の中から現れたその手には拳銃が握られていた。
——敵だ！

俺はすかさず魔術の詠唱に取り掛かる。——あまり威力が大きくて
もこちらにも危険が及ぶから最小限の魔力でやらなくてはいけない。
俺はコンマ以下で案をめぐらせ、すぐに対象へと掌を向けた。

「——んぐふッ！？」

「キルト！」

——俺は詠唱中にミフユにぶっ飛ばされた。

「やあ、ミフユ長旅お疲れ様」

キルトと呼ばれた中肉中背の根暗っぽい少年は拳銃をしまうと、ミ
フユに手を差し出す。

——その手には妙な瓶が携えられていた。まさか！

「それは『スカコーラ』……！ さすがキルト！ ああ……待ちに
待ちました！」

そうミフユは喜喜して言うと、いつの間にビン開けを持っていたの
やら豪快にそれを開けた。そして勢いよく口元にぶち込んだ。

「グビグビ——……プ、ブハア——ッ。う、ウマすぎるッ……！
やっぱり『スカコーラ』サイコーッ！」

「喉が乾いたときに飲む『スカコーラ』はやっぱり何ものにも代え
難いよね、うんうん。凄く分かるよ」

その少年はさも共感できると言わんばかりに深く頷く。

「ふう——……。生き返った。ホント『スカコーラ』さえあれば人
生なにもいらなくて感じですよ、ゲプッ」

「うん、でもミフユ。それは一概には言えないかな。そこに『苦し
み』、今でいうと『乾き』がなければ今の『生き返った！』感は得

られないと思うんだ。ようするに、『スカコーラ』の全てを引き出すには他のものもとても大切だということなんだ」

「へ、へ……。さすがキルト」

「まあでも——少なくとも『スカコーラ』は喜怒哀楽の中心であるというのは間違いないことさ」

「……」

「ん——どうしたんだい、ミフユ？」

「いや、ただやっぱ私はまだ未熟な『スカコーラリアン』だと痛感して——」

「何を言っているんだい。僕だってまだまだ未熟さ。——一緒に切磋琢磨し合って『スカコーラリアン』の真髓を極めようじゃないか！」

「キ、キルト……！」

「ミ、ミフユ……！」

「なにこの三文芝居!？」

俺はこの酷い光景にこれ以上我慢できなかった。——てか、なに！

『スカコーラリアン』ってなに!? 色々ツツコミどころありすぎだろ……！」

「えっと、……君は誰だい？」

少年はきょとんとした顔で俺を見つめてくる。

「あ、俺は——」

「待った。名を尋ねる時はまずは自分からって言うよね。——僕の名前はキルト。ところで君は『スカコーラ』の中身はなんだと思う？ 僕は宇宙だと思ってるけど」

——コ、コイツ、バ……いや、本気だ！ 目が凄いもん。最初、ふざけてると思ったけど、間違ってた。コイツ普通じゃない！

「——えっ、……と、俺はドウマン。『スカコーラ』の中身は……ちよっと分からないな」

俺はキルトの無言のプレッシャーに押されながら歯切れ悪く応える。
「……分からない、か。確かにちよつと難しい質問だったかな。初めて出会うなり、おかしいこと言つてごめんね。はいドウマン、友好の証に」

握手かなつと思い、俺も手を突き出す。――が、どうやら俺の勘違いだったらしい。

――その手には瓶が握られていた。
やっぱり。

「――これつて『スカコーラ』、だよな？」

「うん、そうだよ。初めて会った人には友好の証としていつも『スカコーラ』をあげてるんだ。これ以上とない僕の気持ちだよ」

キルトの澄んだ瞳が辛い。――うん、真つ黒だ。ミフユには聞いてたけどこんなに黒いとは思わなかった。これつて飲み物なのか、とさえ思えてくる。ミフユが今さつき飲んでいたら身体に害はないんだろつが……。いかせんあの色に抵抗を禁じ得ない。

「……？ どうしたんだい、ドウマン？ ほら、グビつといっちゃいなよ」

キルトはそう言い、強引に『スカコーラ』を俺の口元に押しやろうとする。

「ちよ、ちよつと待、て……！ うおおお、とととと、とつ――」

それでも抵抗する俺に対してキルトは困惑したような顔で見る。それを横で見ていたミフユが耐え兼ねた様子でキルトに告げる。

「……キルト、驚いたことにこの人は『スカコーラ』を知らないし、飲んだこともないんです」

「えっ――な、……それ本当かい！？ なんてことだ、信じられない……。――どうやら君は人生の四分の三も損しているようだね君の人生は本当に残念だ」

「またそれかッ！ もしかしてそのテンプレ流行つてるとか！？」

『スカコーラリアン』の間で流行つてるとか――！？」

そんな俺の悲鳴も彼らはお構いなしに話を進める。

「もし僕が君だったらとつくの前に精神を破綻していたことだろうに。それなのに君は今まで——」

ガシッ……！ キルトは激しく同情の眼差しを向けると共に急に俺の両手を驚？みしてくる。

「耐え忍んできた！ 君はなんて——君はなんて強い人なんだ！」

「——あつ、確かに。意外と凄い……人かも。やるじゃないですか、ドウマン」

こいつらは何を言っているんだろう。本当に。

「ああ、彼は凄い。——だからこそ、是非にも『スカコーラ』を飲ませたい！」

——結局そうなるのか！

「——つて、ちょっと、ちょ、ちょおおおうおお——！？」

「いいかげん諦めなさい、ドウマン。黙って『スカコーラ』を飲んで逝きなさい」

俺はどうか抵抗をする。しかし狂気に満ちた二人に同時に抑え込まれにこられたらさすがの俺も無力に等しかった。いつの世の戦いも質より量がものを言うのだ。

結局その毒々しい黒い液体が俺の口内へと入り、喉を通り、体内へと侵入してしまう。

「——ッ！？」

突如、激しい痺れが喉を駆け巡る。

一瞬、頭が真っ白になってしまった。

「……………ウ、ウマすぎるッ！？ なんだこの喉を走る快感はああああああ！？」

「ふふふふ」ミフユとキルトは満足げに頷く。

「——キンキンに冷えた『スカコーラ』が口内に広がり、喉を通る。そのとき強烈な刺激が喉を走るはず。もしかすると、一瞬抵抗を感

じるかもしれない。でも次の瞬間、それが快感になる。しかも——あれ、なんだこの飲みやすさは……甘いのにスツキリ!? うっおおおお、なんて爽快な気分になるんだああああ!! ……となる」

「そう、そうなんだよ!」

俺はキルトの説明に激しく同意する。というか、めっちゃくちゃ興奮してる。やばい。

「や、やべえこれ……青天の霹靂だ」しかし、転じて急に残念な気持ちになってくる。「ってことは今まで俺はこんな素晴らしい飲み物を知らなかったってことか。なんだよ、これじゃ本当にお前たちが言ってるように俺は人生の四分の三も損していたようだ俺の人生は——」

「本当に残念だった」

最後はキルトが代わりに言う。

「過去なんてどうでもいいじゃないか。それよりも今君が『スカコーラ』の存在を知り、味を知ったことに感謝しなくちゃ。——これからは好きなだけ堪能できるんだから、ね?」

キルトは見た目の根暗とした雰囲気影をひそめ、無邪気にニヤつと俺に笑いかけてくる。

「キ……キルト!」

俺はキルトの優しさに胸が熱くなる。

「ここに新たな『スカコーリアン』が生まれた。新しい仲間を歓迎しようじゃないか。そして僕らをめぐり合わせた『スカコーラ』の永久の繁栄を願おう」

キルトの手には『スカコーラ』が握られていた。

「『スカコーラ』に乾杯!!」

カチーン……!

ここに、確かな友情が生まれた。

《面妖な……》
『黒書』は、解せなかった。

四章です！（後書き）

とっちらー！どっもありがとっ！かんどっ！

後生ですから……！

「ここを開ければ僕らの拠点だよ」キルトは立ち止まり、俺に言う。
「ホント長旅だったね、御苦労様」

気付くと、何の変哲もない扉が壁に張り付いていた。それは一見、紙用紙に描かれた扉を壁に貼り付けたただだと錯覚させるが、突き出ているドアノブによって辛うじてそれが扉だと認識させてくれる…… ああ、もうこれ以上歩けないってほどに、本当に疲れたな。でも目の前の扉を見ると不思議と達成感に近い感情が湧いてくる。こんな長旅はした記憶がないし、今後もすることはないだろう。『黒書』のいいなりになるのは癪だが、自分の見聞を広げる為にもいい機会かもしれない。——この扉が開いたらどんな世界が広がっているんだろうか。そう思うと少し緊張してきてしまう。

「ゴク……」

「じゃあ開けるね——」

そうキルトは言って扉を開けた。

鼻腔に何かが侵入してきた。

「——ッ！？ な、なんだこれ、鼻に何かゲフウ、——バクションッ！」

異物が俺の鼻から侵入し、くしゃみを強制される。

「あつ、ごめんごめん」キルトは別段慌てることも無く、俺に説明する。「ここを開けると最初に倉庫に入っちゃうんだよね。それもうくに掃除もしていないから、埃が酷くて」

そう言うキルトはいつの間にかマスクを装着済みで全然平気そうだった。ミフユも同上。

そういうことは先に言ってくれよと、キルトたちを睨むがキルトは笑い、ミフユに至っては特に悪びれずにさっさと行けと言わんばかりに手を宙で揺らしている。

「さっきの友情は何処に！？」っと言おうとしたが止めた。埃が酷

過ぎてなんか気持ちが萎えた。

キルトは最後に「ごめんね、拠点は倉庫の先だから」と言って踵を返し、先に進む。

——キルトの爪の垢を煎じてミフユにも飲ませてやりたいと切に願った。

よく分らない備品やらで散らかった倉庫をさらに奥へと進み、途中あつた階段を上る。

そしてついに、

「さあ、ここからが本当の意味での僕らの拠点だ」

キルトはそう言つて、目の前に佇んでいる両面開きの大扉を開けた。

「酒場『ガラクトラル・リズム』へようこそ！」

俺の耳に真つ先に入ってきたのがけたたましい騒音だった。

叫び声、歓声、笑い声、罵声——いくつもの種類の声が重なり合い、騒音として俺の耳朵を震わせる。

目に入るのはカウンター越しで談笑する者、乱雑に置かれたテーブルで会話する者。——その殆どの人々の片手にはジョッキが握られていた。

「お、キルト。そこで何やってんだ、早くこっちに来て——」一番近くにいた一人の男がこちらに近づいてくる。

「——ってあれ、ミフユ……？」

男はミフユを見ると硬直する。

——そして叫んだ。

「ミ、ミフユじゃないか！？ 無事だったんだなッ！」

その瞬間、騒ぎはしゃいでいた他の人々も一斉にこちらを見るやいなや押し迫ってきた。

「無事だったんだな！」

「無事でよかった！」

「ミフユ、怪我は無いか！？」

「心配したんだぞ、ミフユ！」

「ああ、本当によかった、よかった！」

歓声が沸き起こる。

「あつ——……。えと、えと、えと……」

突如として彼らに囲まれたミフユは慌てふためく。

大波の如く押し寄せてきた人々に俺も飲み込まれてしまう。

しかし、キルト一人だけは違った。その大波にも怯まず苦笑いしながらも、興奮する彼らを落ち着かせようと試みていた。

「ちよつと皆、ミフユがビツクリしているじゃないか！ それに長旅で疲労が溜まっているんだから、ここはミフユの為に落ち着こうよ？ とりあえずは皆で『スカコーラ』を飲みながらさあ——」

キルトはそう言うと、本当にどこから取り出したのであるうか——両手の指の間に挟んだ大量の『スカコーラ』を彼らに勧める。

——が、無情にも誰一人としてその存在に気付かなかった。そして、また不運なことにそれが一人の身体に接触し、キルトの手から滑り落ちてしまった。

ガシャーン……！

辺りに鋭い音が響き渡る。

「えっ……」

キルトは硬直する。

それまで興奮状態だった彼らもさすがに異変に気付いたのか、静かになる。

「あ——……なんだキルトか。何ボーっとしてんだ？」

一人の眩きが引き金になった。

「うつ——」

——ドスッ！

眩やいた男が突然前のめりになって倒れ込む。

キルトは割れた『スカコーラ』の破片を手にとつと——勢いよく、倒れた男の脳天に振り下ろした。

バリン……ッ！

俺は呆気にとられてしまっていた。現実が起こっていることに理解が追いつかず、身体が動かない。辛うじて動かせる眼球をキルトの顔に向けると、戦慄してしまった。

——目が血走っている。顔に『万死に値する』っていう文字が浮かんでいる！

「……てめえら、許せねえ許せねえよ。てめえらのそのちんけな命よりも大事な『スカコーラ』が無駄に散っちゃった。ああ……可哀想な『スカコーラ』たち！ 本来なら沢山の人々に胸キュン万歳を与えているっていうのに……なんて無残な姿に……ちく、しょうツ！ 彼女たちの女体が割れちゃったじゃねえかああああア！？」性別は女なのか。

「ああア、どうしてくれようか、どうしてやろうか！？」——とりあえず、だ。てめえらのゴミ同然の命でも供えなきゃ彼女たちが恵まれねえよな！？ あア！？ おいコラア——！！？」

次の瞬間、キルトの周りにいた人間が人形のように吹き飛んだ。

俺は夢でも見てるんだろうか。決して身体の大きくない、ましてや筋骨隆々ではないキルトが一度に何人もの人間をなぎ倒すことができるのか。——げに恐ろしきは、『スカコーラ』の恨みか……！

「——てめえらああア、万死に値するぞおおオオ！？」
そこから乱闘が始まった。

戦力的に圧倒的に不利なキルトだが、『スカコーラ』の鬼と化したヤツは次々と敵をなぎ倒していく。——しかし、量で勝る敵人も次から次へとキルトに切り込んでいき、混戦状態へとなってしまふ。その渦中、俺とミフコは身動きが取れず、狼狽するしかなかった。

「——ちよつと皆！ とりあえず落ち着いて、落ち着いて下さいよ、もう！ ねえ、キルトも冷静になって！？」『スカコーラ』のせいで争うなんて哀しすぎます……！」

ミフコが懸命に場を收拾させようと試みるが、無情なことに怒り狂う彼らの罵声により掻き消されてしまふ。

「——うお、マジで洒落になんねえぞ！ これじゃ関係ない俺たち

にまでとばつちりを喰らぶほおッ!？」

不意に裏拳が俺の顔面を直撃した。――鼻に違和感を感じるが堪える。

「ぐう……! ちくしょう、なんで俺がこんなヤバくはあ!？」

後頭部に衝撃が走る。

「え、ちょ、ホントに……ぶッ、がッ、げッ、ぐはあアベシ!？」

――やべえこのままじゃ俺、死ぬ!? いや、マジでなんで関係ない俺がこんな目に遭わなくちゃ――って、あれ、気のせいかな。なんだかの確に俺を狙ってきているような。

「――がはあアッ!？」

いや、気のせいじゃないぞ! コイツら確かに俺を狙ってやがる。きつと、キルトの仲間って立ち位置になっているに違いない。

「きゃ……!」

突如、ミフユの悲鳴が俺の耳に入ってくる。

声が出た方向を見てみると、ミフユが荒れ狂う人々の波によって乱戦の中心に押し寄せられているのが確認できた。

――このままじゃミフユが危ない! 俺は本能的にミフユに危険が迫っているのを感じ取る。

俺は形振り構わず、道なき道を無理矢理こじ開けていく。途中、パンチを喰らおうが、頭突きを喰らおうが一心不乱でミフユの傍に近付こうと突き進んだ。

「貴方たち、本当にいい加減にしないと……え?」

いいかげん腹の立つてきたミフユが文句を言おうとした刹那、

――怒りに我を忘れた一人の肘がミフユの顔面へと突貫してきた。

「ミフユ――!」

俺はとっさにミフユを庇おうと、ミフユと肘の間に割り込む。

ガス……ッ!

俺は本能的に閉じられていた目を恐る恐る開けてみると――気付くと、眼前には長身の男が仁王立ちしていた。

「——皆止めないかッ！」

その澄明な声に、今まで猛牛と化していた人々は一斉に停止する。キルトですら鼻息は荒いまでも、動きを止めていた。

「どうしたんだ、キルト？ 『スカコーラ』の魅力を出し切るにはそれ単体だけじゃなくて、他の要素も大切だっけいつも言っていたじゃないか。俺はそんなお前の『ロジック』好きだったんだけどな」その男の温和な表情にキルトは毒気を抜かれた様子で、次第に、顔に浮かび上がっていた例の文字が薄れていく。

「——その場合の要素に仲間が含まれないのかい？」

男はキルトの頭に手を添えながら微笑む。

「……すいません。ほんの少し頭に血が上りすぎて自分を見失っていたようで。——僕もまだまだ『スカコーラリアン』としては駄目駄目ですね」キルトは自身の鼻を掻く。「ここは一つ非礼をお詫びして、皆で『スカコーラ』パーティーなる宴会でも開催しませんか？」

「さすがキルト、実に『ロジック』的だ。——それで、お前たちはそこで突っ立っているだけなのかい？ キルトがこうやって男を見せているのに——そんな『ロジック』、俺は認めないぞ」

すると、先程から固まっていた人々がまるで先程の出来事を忘れてしまったかのように、一斉に歓声を上げる。

「よし、それでこそ『ガラクタ不能者』解放軍の同胞だ」

——俺は目を丸くしながら立ち尽くしていた。

この人は何者なんだ。急に現れて瞬く間に乱闘騒ぎを収めるとは、驚いた。——と思った瞬間、

「ミフユッ!!」

鼓膜が破れてしまっんじゃないかと思うぐらいの大きな声が辺りを響かせる。

「もう……っ、本当に心配したんだぞ！ お前が政府の連中に捕ま
ったって聞いたときは心が砕けそうになったんだぞ、ホントにもう
っ……」

その人は先程までの威厳に満ちた雰囲気とは一転して今にも腰が砕
けそうな、なんとも情けない顔つきでミフユの傍に駆け寄ってくる。

「ハル兄……」

「——でも、もういいんだ。無事に帰ってきてくれれば俺は何も言
わないよ」

「ん……ごめんなさい」

この光景を眺めていた俺が凍りついたのは言うまでも無い。もちろ
ん、豹変した男の姿にちよつと驚いたこともある。でもそれ以上に
——この男がミフユに抱擁をかまし、あまつさえミフユ自身もそれ
を受け入れているということだ。はつきり言つて、面白い。

俺は一瞬、『とんだ阿婆擦れ野郎もいたもんだ』と脳裏に過つてし
まったが、口が裂けても言わない。——というか、別にミフユが何
をしようが俺には関係ねえし、もとよりどうとも思わねえし。てか、
正直ミフユに対してそんな興味が湧かねえし、うん。

まあなんだ、とりあえず答えを出すのは早計すぎる。まずはキルト
に尋ねてみるか。

「見て分らない？ どこからどう見ても徹頭徹尾、相思相愛じゃ
ないか。あ、もちろん血は繋がってないよ」

空気に亀裂音が聞こえた。

残念な気持ちになった。

頭に『ジーザス』の文字が木霊する中、俺とミフユは個室に連れて
いかれていた。

「君がドウマン君か。話はミフユに聞いたよ。本当にありがとう、

君はミフユの命の恩人だ。——ささ、遠慮しないで座っておくれ」
俺は軽く会釈をし、勧められたソファ^{ガラクタ}ーに座る。

「自己紹介が遅れたが、私は『不能者』解放軍スプライド拠点の責任者である、伝道ハルミ。血は繋がってはないがミフユの兄だ。——貴殿の助力に感謝する」

ここの責任者か。なるほど、凄く納得。そんな気はしていた。

「——つとまあ、堅苦しいのはここまでにしといて」伝道ハルミは一転して、少年のような表情になる。「正直言うただね、俺は『魔術』なるものを見たくて見たくて堪らないんだ。無礼を承知で尋ねるけど、『魔術』を披露してもらうことはできたりはしないかい？」俺と対面してソファ^{ガラクタ}ーに座る伝道ハルミは拳を強く握りながら懇願してくる。

「ふふ……、ハル兄は不思議な力に凄い興味があるんです。少しでいいんで見せてやってはくれませんか？」

俺の隣で座っているミフユも俺にお願いしてくる。

「……あ、ああ、少しぐらいなら見せても問題はないが——」

俺は少々困惑していた。——さつきからコロコロと表情が変わるこの人の本質が分からない。どっちが本物のこの人なんだろうか。

「ああっ！ 本当かい！？ 嬉しい、嬉しいよ！」すると、伝道ハルミはテーブルから身を乗り出して爛々とした瞳で俺を見つめてくる。鼻息がこちらまで吹いてくる。「さすがは『稀代の魔術師』だ！

やはり懐が違う！——さつ、早く俺に『魔術』を見せてくれないか？ さあ！」

予想以上の反応に驚いてしまったが、不思議と悪い気はしない。純粹に『魔術』に興味を持ってくれるなんて、なんだか心が高鳴るじゃないか。——色々と不信感を持っていたが、意外と良い人なのかもしれない。

「ふむ、致し方ないですね。そこまでお願いされてはそれに応えないといけません。——ならば『魔術』の真髄をお見せしようじゃないですかッ！ 腰を抜かしても知りませんよ！？」

それからが至高だった。

なんて充実した時間だったんだろうか。——いつの間にか小一時間が経っていた。

俺は順々にちよつとした魔術を披露してみせると、それに対してハルミさんは一から十まで驚嘆してくれた。——俺がヒートアップしたのは言うまでも無い。

「はあ、はあ……腰を抜かしてしまったよ。『悪魔の石』^{デーモンズストーン}無しで、まさかここまでとは……。——うん本当に、実に『魔術』は素晴らしいな」

「ハルミさんにそう言ってもらえたら光栄です」

「ハッハッハ、ドウマン君は面白い人だな。俺相手にそんなに恐縮しなくてもいいだぞ？」

「いえいえ、目上の人に敬意を表すのは当然のことですよ。——それに、これからも末長くお付き合いする予感がしますから、ね？」

「奇遇だね、俺もそう思っていたところだよ。本当に何から何まで君とは気が合うなあ！」

「——もうっ、ハル兄ったらテンション上がりすぎ。ドウマンに至っては気持ち悪すぎです」

俺たちのあまりの友好の深さに呆れかえるミフユもそれとなく楽しそうだ。……最後の言葉だけ余計だが。

「——最後にもう一つ図々しいお願いをしてもいいかな？」ハルミさんは片目を閉じながら両手を合わせてくる。

この際どんな願い事でも叶えてやるという気概の俺は当然ながら承諾した。

「助かるよ」ハルミさんはそう言って、俺の背中袋に熱い視線を送る。「話によるとその中に『黒の魔術書（悪魔召喚のグリモワ）』があるらしいね。——できたらそれを使った『魔術』を見せて欲しいなあって……。どうかね？」

——なんだ、そんなことか。

「もちろん、お安いご用です」俺は『黒書』を取り出し、ハルミさんの目の前に掲げる。「この地味で無地の真っ黒い本が『黒書』になります。……あ、ビックリしました？ 意外に普通ですよね——」

《……もう二度目は無いと思え？》

俺は既視感に背筋が凍る。

「あつ、凄いですよこの本。実は喋るんです、普通ではないんです！」

『黒書』を一瞥すると、満足したかのように穏やかな炎がヤツの周りを踊っている。……ふう、さつきみたいなのは勘弁だからな。

「ああ……本当に凄い。——話には聞いていたけど本当にあつたんだな」

よく見るとハルミさんの足が震えているのが分かった。——そんなに驚いてくれたんだろうか。まあ、確かに本が喋るなんて普通じゃないよな。

「——では早速コイツを使って『魔術』を披露したいと——」

コンコン——……「えつと、失礼しま——……あうっ！？」

突如として耳に入ってきた悲鳴に俺は振り返る。——次の瞬間、

ガシャーン！

おかっぱの幼い女の子は扉の奥から現れるやいなや転倒し、両手で支えていたお盆を見事としか言えないくらい見事にひっくり返した。それと共に、お盆にのせていた湯のみが木っ端微塵になってしまう。

「あ……」

刹那の沈黙が流れ、俺は無意識のうちに言葉が漏れる——といったも、声にならない声だったが。

いきなり現れた彼女は地べたにうつむけに張り付いてプルプルと震

えている。前方へ伸びきった両腕の先は割れた湯のみの破片や床が水浸しやらで、見るに堪えない惨状だった。

「——もう、モ力は相変わらずのあわてんぼうさんね」

「ハハハ、ドジはモ力の専売特許だからな。——大丈夫かい、モ力？」

「……」

小動物のように震えていたモ力と呼ばれる女の子はむくりと立ち上がると、淡々と片付け始める。

「あつ、ちよつとモ力、素手で扱っちゃ危ないでしょ!？」

「——えつと、別に気にしないで下さい。それでもモ力は大人なんですけれども」

ミフユの注意に耳を傾けない女の子は会話するのを避けるように黙々と片付け続ける。

「……？」ミフユは困惑の表情を浮かべた。

「はあ……、最近こうなんだ。ことあるごとに自分は大人だからって」ハルミさんは苦笑いをしながら首を振る。

「モ力に何かあったの？」

「うーん、それとして無いからこつちも困ってるんだ」

「そう……」ミフユは膝を曲げ、女の子と向かい合う。「モ力、どうしたの？ 何かあったならお姉ちゃんに言っても良いんだよ?」

ミフユは優しさに包まれた言葉を女の子に投げ掛ける。しかし、それでも女の子は目を合わせようとしない。

「……えつと、別に何もありませんけれども。大人になるのは自然なことですから——それとも、モ力は大人になつては駄目なんですか?」女の子は口を尖らせる。「私がこうやって頑張ってるっていうのに——皆は困った顔をしたり、馬鹿にしたり。そんなに私は駄目な子なんですか?」

「そんなわけではないじゃ——」

「もついいです! そんなこと言つて、ミフユお姉ちゃんも思ってるんでしょ? モコは駄目な子だつ——」

すると、捲し立てていた女の子の言葉が途中で切れる。

「あ……」女の子は口から小さい声を漏らし、自分の人差し指を見つめる。「う……ふえ……ふえええん！」

女の子の指から血が出ていた。

「あ、だから言ったのに！ 手を貸してみて！」

「うう……えぐっ……う、うん」

「ん……」ミフユは女の子の指を口で咥える。「——これでよし。

あとは包帯を巻けば大丈夫」

「包帯ならこれを使うといい」ハルミさんは机の引き出しから包帯を取り出し、ミフユに渡す。

「ありがとう、ハル兄」

そう言いながらミフユは慣れた手つきで女の子の指先に包帯を巻いていく。

「——ふう、大丈夫そうで良かった。でもモ力、心配を掛けちゃ駄目だろ？」

ハルミさんは少し怒ったようにモ力を叱る。

「ぐす……、う……うん。……ごめんなさい」

「モ力が無事ならそれで良いの。でも、危ないことだけはしないで欲しいな。心配し過ぎてお姉ちゃん、心臓が破裂しちゃうよ」

ミフユはそう言うとお女の子の頭に手を添えた。

「うん…… 本当にごめんなさい。モ力、もう絶対に危ないことしないよ？」

「ありがとう。——でも、どうして急に大人になったなんて言い出したの？」

「……えっと、えっとね。お姉ちゃん、お仕事でここを離れていたでしょ？ 最初、モ力、凄く寂しくて辛くて。でも、これじゃいけないって——お姉ちゃんの代わりにしっかりしないといけないって思っ、大人になろうと考えたの。でも……実際には皆に迷惑を……。モ力はやっぱり駄目な子なん——」

「——君は偉い！　そして、かわゆいつ！」

俺は感動していた。モコちゃんの思い、そしてそれを実行にまで移した気概。——素晴らしいじゃないか！　こんないたいけな子が寂しさと戦って心配を掛けまいとするなんて。結果はどうであれその過程が健気じゃないか！　……そして、それ以上に。なんといつてもあの容姿が可愛いすぎる！　クリつとした大きな瞳に、桃色の頬。そしてあのモフつとした髪の毛がとても愛くるしい。思わず撫で撫でしたくなるじゃないかッ！

「……モコちゃん？　き、君は何歳なのかな？　教えてくれるかい？」

「……へうつ？　し、知らない人とは喋っちゃいけないってハルお兄ちゃんにキツク言われているんですけれども……」急に尋ねてきた俺に怯えたのか、モコちゃんはミフコの後ろに隠れてしまう。

むう、残念。ならば——

「なあ、ミフコ。モカちゃんの頭撫で撫でしてもいいのかな？」

「ド、ドウマン……。まさか貴方という人はそっち気があるんですか？」

「ドウマン君。流石の俺もそれには異論を唱えさせてもらっよ」

ミフコはドンと引き、ハルミさんはその長身を生かし、俺を見下ろしてくる。

「な、何を言ってるんですか二人とも。俺は純粹にモカちゃんが可愛いなあっと思っただけです。別にやましい気持ちなんてあるわけないでしょ！？」

俺は心外だと言わんばかりに、両者に異議申し立てをする。

「さあ、どうだか？　前に私の胸を顔で擦り付けた前科がありますからね。……この雑食腐れ変態野郎」

「……うん、なるほど。そこら辺の話を詳しく聞きたいかな」

肩に感触を感じた次の瞬間、肩が外れてしまいそうなほどの力が圧迫する。ハルミさんは俺の真横でにこやかに笑いながら、俺の耳元

で囁やく。一瞬だけ顔に青筋見えた気がしたが、それはまあ……気がしたただけだろう。

「ち、違うんです！ あの時は、というか二回あるんですが——」

「へえ……！ 二回もあるんだ」

「い、いえ……！ いや、そうなんですけれど、それには深いわけがあります。……そう、一回目はミフユ自ら飛び込んできて自分はどうしようもなかった。そして、二回目の時は自分が凄く動揺していました、ミフユが俺を落ち着かせる為というかですね、自ら胸を貸してくれたわけです。——つまりは不可抗力なんです」
「だよな？ だよな？ 確かこんな経緯だったよな？ だから俺は現実なはず。」

「……最低です。事実を捏造してますよ、この野郎は」

「な、そんな馬鹿なッ！？ た、確かにこんな経緯だったはずだが？ ……少なくとも一回目の時は確実にミフユから胸を突き出したはずッ！」

「ちよつと、それは酷すぎませんか！？ 言い方ってものがあるでしょ！ それじゃ私に変態みたいじゃないですかッ」

「だって、ホントのことだもの」

「この野郎……」とミフユは犬歯をむき出しにしながらうなる。

「まあまあ、落ち着いて二人とも。モ力が怯えてるぞ？」見るとモ力ちゃんは小動物のように怯え、縮こまっていた。「とりあえずこの問題についてはここで終わりにしようじゃないか。……後でゆっくりと聞くとして、な？」

——やっぱり聞くんだ。本当に恐ろしいのはハルミさんなのかもしれない。

「そう、ね。モツカが怯えてるし、無益過ぎる会話だったわ」

「——ああ、そうだな。それより早く俺をモ力ちゃんに紹介してくれないか？」

俺の気持ちは早々に幼い女の子に傾いていた。

「……もし、モ力に何かあったときは覚悟して下さいよ。死よりも

恐ろしいことをしてやりますから」

「んなことは分かってるよ。『イエスロリータノータッチ』は基本中の基本だからな」この言葉はどこかで聞いたことがあった。

「——ミフユ、ドウマン君を信じようじゃないか。この目を見てみる、凄い決意に満ちているよ」

なかなか納得のいかなそうなミフユに対してハルミさんは説き伏せる。

「ああもう、分かりましたよ。どう見ても腐った目にしか見えないけどここは信じてあげます。……はあ。モカ、こっちにいらっしい」

ミフユに呼ばれて、おずおずと傍に寄ってくるモカちゃん。

「この目の前にいる人がドウマンって言って、不思議な力を使うお兄ちゃん——嬉しいことに晴れて私たちの仲間になったのよ。だからそんなに怯えなくても良いの。……こんな感じで良いですか？」

「ああ、上出来だ」ミフユのなかなかの紹介に俺は満足し、モカちゃんと向き合う。「やあ、初めましてモカちゃん。仲間になったドウマンだ、よろしくね」

「……は、はい、こちらこそよろしくです」

「それにしても、モカちゃんは本当に健気で可愛いね」

「……へっ！？——……そ、そんなこといきなり言われてもこ、

困りますけれども」モカちゃんは赤面して、あたふたする。

「さっきも言っただけど、モカちゃんは本当に偉いと思うんだ。まだそんなに幼いのに大人になろうと頑張って——うん、ホント偉いよ」

「……えっと、褒めるばかりの人には裏があるから注意しろって誰かに聞いたことがあるんですけど……？？」

より一層警戒するモカちゃんはじりじりと俺から後退していく。

——なんて聡明な女の子なんだ。いや、まったくもって彼女の言うとおりだ。こんな初めて会った人間がいきなり褒めるばかりじゃ警戒されるのも頷ける。

それならばと、俺はゆっくりと指先を巾着袋の中に突っ込む。そし

てそれから、空中に指をなぞり、炎の文字を浮かび上がらせた。

『ごめんね、どうか怖がらないで』

「わぁ……………凄い」モカちゃんは空中に浮かび上がった赤色の文字を見て驚嘆する。「……………これって『悪魔の紅石^{デーモンズストーン}』を使つてやったのですか？」

「いいや違うよ」

「えっ、本当なお姉ちゃん？」

モカちゃんは驚くように、ミフユに確認を求める。

「ホントビックリだけど本当よ」ミフユは両肩を浮かばせながら答える。

「へえ……………へえ……………！」モカちゃんは恐る恐ると俺に近付いてくる。「もしかして他のこともできたりしますのですか？」

「——ああ、もちろん！」そう言つて俺はさっきの要領で空中に簡単な絵を描いていく。

「わぁ、わぁ！ 凄い、凄いですよ！ ドウマンお兄ちゃんは凄いい人なんですネ！」

「えへえへ……………そうかな——？」

「うわっ。こんな幼い子にデレデレするなんて気持ち悪すぎですよ、ドウマン」

ああもう、うるさいな。こんなときぐらいいいじゃないか。モカちゃんと距離が縮められて嬉しいんだよ。

「俺のボロボロの心を癒してくれるのはモカちゃんだけだよ」

そう言いながら俺はモカちゃんのそのモフモフな髪の毛を撫で撫でする。

「あう……………ドウマンお兄ちゃん止めてください。何だか恥ずかしいんですけれども……………」

あうあう言つモカちゃんも可愛いなあ……………つと、これ以上やったら後ろの二人に何されるか分からないから今回はこれで終わりにするかな。未練たらたらでモカちゃんの頭から手を離す。

「むう……………」モカちゃんは頬を風船玉のように膨らませ、口先を尖

らせる。しかし次に、何かを思い出したのか声を漏らす。「あ……
っ」

「「……？」」

「あ——っ、忘れてました……！」

ドツドツドツド！

——それは突然だった。

階段を駆け上がる音が聞こえてくる。その音は徐々に近付いていき

「失礼する！」

勢いよく現れた女性はズカズカとこの部屋に入ってくる。そして間髪いれずにモ力を睨めつけ、叱咤した。

「まだこんな所にいたのか、モ力！ 早くハルミ隊長にドウマン殿を私の元に連れてくるように連絡してくれと頼んでおいたのに、なんたる様だ！」

「あひつ、すいません……！」

五臓六腑まで響き渡りそうなほどの大声にすっかり怯え縮こまってしまうモ力ちゃん。

「ミフユがいなくなった後のあの決意はどうしたのだ！ もしやあれは一時の気の迷いだったとでも言うのか。——これが戦場だったら致命的な損害を被っていた可能性もあるのだぞ！ 連絡伝達は戦場の命だと思え！」

荒ぶる女性は鎮まる気配を見せない。モ力ちゃんは当然ながら、ハルミさんとミフユもどどういうわけか何も言わず——いや、何も言えずに直立しているだけだった。何と言うか、解せない。

「あれほどのまで重要なことだから早急に伝えてくれと——」

「なあ、それぐらいにしてもいいんじゃないか？」俺は涙目のモ力

ちゃんが不憫すぎてこの厳格な女性に対抗することを決意した。

「な……っ、馬鹿ドウマン！」

すると先程まで黙り込んでいたミフユが慌てて俺を制止しようとする。——が、俺はそれを無視して強行する。

「状況も十分に把握してない新参加者が言うのもなんだがモ力ちゃんも凄く反省してるし、もう勘弁してくれてもいいだろ。——それに元はと言えば俺がモ力ちゃんを弄っていたせいで時間をくっていたわけだし」

「ドウマン君……」

ハルミさんもなぜか苦々しい顔をして俺を見つめてくる。——俺は過ちを犯しているのか？ いや、正しい行動だと思うのだが。それともこの女性に口答えができないとか？ ここの責任者であるハルミさんもできないなんて可笑しな話ではないか。俺は納得ができずその問題の女性の風貌に目を向けてみる。

背はミフユより少し高いぐらい。長髪なんだろうが後ろに髪を結んでいて男性特有の凛々しさが垣間見える。その身は今にも戦場に出向くことができそうな重厚な軍服に包まれている。そして、肩に巨大な銃器。腰に刀身の長い剣が携えられて……えっ？

その姿は実際に、今にも戦場に行ける格好をしていた。

シャリ……

「ひ……っ」

俺は思わず腰が砕けそうになる。——い、今この人俺を斬ろうとしなかったか？ だって、シャリって音がしたもん。……やばい、鞘に手を添えてやがる。俺は今、この人の間合いに入っている！？

俺が全てを理解したときには全てが遅かった。気が付くと、俺は蛇に睨まれた蛙の状態になっており、全ては目の前の女性のさじ加減に委ねられていた。

「ゴク、リ……」

「ドウマンさ……殿。お、お会いできて光栄です……！ この度は、我々の仲間になっていただいて恐悦至極であります」

女性は直立不動の姿勢で言葉を陳列する。妙なことに女性の目が若干泳いでいるように見えた。

「……！？」

皆が息をのむ。俺だつてそうだ。予想外の展開に面食らう。

「モカを許せと、そうですか……。ドウマン殿がそう言うのであれば、そういたしましょう。——寛大なドウマン殿に感謝するんだ、モカ。ただし、次からは頼んだぞ？」

「あ……ひゃい、了解しました！」

モカちゃんはその女性に何度も頭を下げ、俺にも下げる。

「えと——……」俺は急な展開に言葉に詰まる。

「ああ、申し訳ない！ 私は戦闘総構成部隊長のベレッタと申します。ドウマン殿の力は拠点中に広まっていますよ。その力期待しております」

「あ、ありがとう。ベレッタ……さんって言うん——」

「私にさんづけなどおこがましい！ どうかベレッタでお願いします」ベレッタさ……いや、ベレッタは慌てるように懇願してくる。

「あと、これから戦友になるわけですから気を使わないで、ため口で結構です。——ちなみに私はこれが素なので」

「……あ、そうかな。了解した。ベ……ベレッタ、今後ともよろしく」

見た目と違ってそんなに激情的な人じゃないかもしれない。——なんだ、全然怖くないじゃないか。凄い礼儀正しいし。

俺はベレッタに手を差し出し、握手を求める。すると、一瞬躊躇するような素振りを見せるベレッタ。

「……？」

「——あ、いえ。そうですね。我々は戦友ですから握手は当然です、

はい。戦友戦友戦友戦友……」

俺は一片の違和感を覚えながらも彼女と握手を交わした。

「はは、うそでしょ……」

「信じられないな……」

またもさつきから黙り込んでいた二人が口を開く。が、その表情は驚愕を越して、口元が笑みが漏れていた。

「——っと、すまない」ベレッタは思い出したかのようにミフユに顔を向ける。「お帰りミフユ。無事でなによりだ」

「あ……ベレッタさん、ありがとう」思考が停止していたミフユが戻ってくる。

「初めての戦場はどうだった？ 怖かったか？」

「そうです、ね。正直何度も死を覚悟しました。戦場は生ぬるくないと教えられました」

「だが、生きて帰って来た。——良い経験をしたな」ベレッタはミフユに笑みを浮かべると、ハルミさんの方へと目を向ける。「そら見てください、私が言った通りじゃありませんか。ミフユは強い子です。今のうちに経験を積ませれば大きな戦力になるはず。それを貴方が阻害するから伸びるものも伸びやしない。——ハルミ殿は過保護すぎる」と

「はは、いや全くもって何も言えないな。ミフユは俺が思っている以上に強い子だ。でも、それでも兄の俺からしたら戦場にはあまり行かせたくはないんだよ。これは理屈じゃないんだ」

ハルミさんは苦笑いをしながら、自分の頭を掻く。

「はあ……。まあ、これ以上は何を言っても無駄でしょうから私の口からは何も言いませんが。それはそうと」ベレッタは俺を見ると提案してくる。「ドウマン殿はまだ市内を歩いたことがないと思いますが、どうであろうか——ここは一つ地理的なものを把握する為に少しばかり歩いてみては？」

ベレッタの提案に俺は相槌を打つ。

「——うんなるほど、確かにそれは良い提案かも。後々役に立つこ

ともあるだろうし、それ以上に純粹に俺自身興味がある。あ、——でもハルミさんにまだ『黒書』を使った魔術を見せてないからその後からかな」

すると、ハルミさんは軽く手を振って遠慮する。「もういいんだ、『黒書』の存在を確認したかったただけだから。それよりもドウマン君が望むことをすればいいと思うぞ」

「そうですか？」

まあ、本人がこう言うんだからいいのかな。

「——あ、それなら私が少しだけ案内しましょうか？」そう名乗り出るのはミフユ。「まあ、『スカコーラ』を飲んで体力は全快ですし、しょうがなくですよ？ それに市内には兵士がたくさんいますから地理に詳しい案内人がいないと危険ですからね」

大きなお世話だと俺はミフユに文句を言うが、言われてみればその方が俺にとっても好都合だ。しかし俺はハルミさんを一瞥する。

「その方が俺にとつてはいいんだがミフユは帰ってきたばかりで、ハルミさんとも……そのなんだ、積もる話もあるんじゃないか？」

「何らしくも無い遠慮をしてるんですか。それこそ大きなお世話です」

「そうだよ、ドウマン君。俺なんかを気にしないで市内を周ってくるといい」

それならばと俺は頷く。「それじゃ、行かせてもらいます。——時間をもつたいないからすぐに出て大丈夫か、ミフユ？」

「大丈夫です」

俺たちは軽く支度を整え、この部屋から出ていこうとする。

そんな中、モカちゃんは目をパチクリさせながら俺たちのことを眺めていた。そして純粹無垢に、言つてはならない言葉を呟いた。

「何だかこれってデートみたいですよ」

——空間に亀裂が生じた。

「な、ななななな何言ってるんですかア!? こ、こんな奴と誰がデートするんですか! あり得ないですよ! いや、ホント何言ってるのやらモ力は……」そしてミフユはすぐさま俺を睨みつける。「勘違いしないで下さいよッ!? いや、マジで! 頼みますからその腐った目を私に向けしないで下さいッ」

……そこまで言うか。何だか哀しくなってるじゃないか。というか、そこまで言われる筋合いはないはずだぞ。いちお、俺はお前の恩人という立場だったはずでは……。

この無礼千万の女に憤怒の念が湧いてくることは別段不思議なことではなかった。

「——何をそんなに動揺してるんだ? もしかしてまんざらでもないとか? はっ、それじゃ逆に意識しているように見られるじゃないか。——ほら、見てみる俺を。この微動だにしていないのが物語っているだろ、お前のことなんてこれっぽっちも意識していないとな!」

「はあああああああ!? 何言ってるのアンタ!? もしかしてあれですか、あのいわゆる勘違い野郎ってやつですか! 自意識過剰も甚だしいわ! ——てか、アンタも指先震えてるしッ!」

「いやいやいやいや、こんなの震えてるなんて言わないだろ。お前ちよっと細かすぎやしないか? ——知ってるか、細かすぎる女はもてないんだぞ? お前はその典型だッ」

「——なッ!? アンタに言われたくないですよ! どうせ貴方こそもてるわけがないんです! ええ、宣言します! ロリコンで変態で自意識過剰でクソったれなドウマンはこの先未来永劫女に縁がない、とッ!」

「クッ——言つとくがな、俺はロリコンではない、フェミニストだッ! それにいつか春が来ると信じている!」

「はいはい、信じていればいいですよ。どうせ最後は惨めに死に体になって腐れるオチですから」

「——ひ、酷い! それはあんまりだ、そんな哀しいこと言っなん

てお前には血も涙も無いのか!？」

あまりのミフユの言葉に俺は涙目になりながら憤慨する。

「し、知りませんよ! ド、ドウマンだって結構酷いことを私に言っただですよ。それを棚に上げて罵倒するなんてやっぱり最低ですね」

「ぬう……!」

「——ちよつと落ち着かないか、ミフユもドウマン君も!」この不毛なやり取りに終止符を打ったのはハルミさんだった。「どっちとも言い過ぎだ。こんな下らないことで争うなんて『ロジック』的じゃない」

むう……、確かにそうだが。

「キルトにも言ったけど、俺たちは仲間だ。仲間同士で争うのはナンセンスだ」

「まあ、そうですね……」

「それに時間がもったいなかったんじゃないのかい?」

……忘れていた。白熱するあまり時間のことがすっぱり頭から無くなっていった。そうだ、こんな無駄なことしてもなんの利益も無い。

ミフユ相手に熱くなりすぎたか。

「そうですね。私としたことがドウマン相手に熱くなりすぎました」ミフユはいけしゃあしゃあとそう言った。

「……っ。お前に言われたく——」

「ドウマン君?」ハルミさんは俺をじつと見て制止する。

ぐぬう……! 分かっている、分かっているがああミフユの人を小馬鹿にしたような表情が堪らない! しかし、ここで俺がまた突っかかれば俺の負けだ。だから——和の精神で接しなければ。

「……たしか、に。言われてみれば時間が凄くもったいない。こんなことをするより早く外に出た方が数段有意義というものですね」
「そう、その通りだよドウマン君! だから、さあ早く市内を周ってくるといい」ハルミさんは急かすように俺たちに促す。「ミフユ

もしっかり案内するんだぞ？　あと、決して外では喧嘩しないように。周りに注目を浴び過ぎると危険だからな」

「……分かった。心配掛けてごめんね、ハル兄」

「いいから、いいから、さあ行つておいで」

ハルミさんの優しい言葉に反省した俺たちは足を動かし始める。

「待った」

そんな俺たちを立ち止らせたのは抑揚のない声だった。後ろを振り向くと、ベレッタが仁王立ちでミフユを見据えていた。

「……ミフユはここにいろ。ドウマン殿とは私が行く」

「……へ？」

『わけが分からないよ』とはこんな時に使う言葉なのだろう。

「——ベレッタ君？　何を急に言っているんだい？　話が見えてこないんだが……」

ハルミさんは困惑気味にベレッタに尋ねる。

「いや、なに。熟慮したところ、やはりミフユでは何かあっては心もとないと結論付いたまでです。ドウマン殿は重要な戦力、私が同伴するのはいたって必然なことだと考えますが」

「それは、そうなんだが。……隊の長である君が拠点を離れてもいいのかい？」

「それなら問題は皆無です。私の部下は優秀ですから大丈夫かと」
「……」

「それに、実際ミユフは疲労が溜まっているはず。ここで身体を休めるといい」

「——あ、いや……私はこう見えても体力だけは自信ありますし、『スカコーラ』を飲んだんで意外と大丈夫ですよ？」

ミフユは自分は元気だと強調するかのように四肢を目一杯動かす。しかし、

「私の目は誤魔化せられない。自分自身気付かない内に溜まった疲

劣がお前の身体を蝕んでいるぞ。ああ、間違いない」

ベレッタの言葉に一刀両断され、半ば強制的に訴えを抑え込まれてしまった。

「それとも……」ベレッタは指をモジモジしながら俺を見つめてくる。「ドウマン殿は私が同行しては不服であろうか？」

熱い視線で俺を見つめ、時折目を逸らす彼女の仕草に何だかグツと来るものがあつた。

「いや、むしろ嬉しいというか」

「ああ……！ それは僥倖です！」ベレッタはそう言う俺の手を掴み、部屋に出るように促す。

「——ちよ、ちよっと待って下さいよ」ミフユは俺のもう片方の手を掴んでくる。「理屈は分かりましたが納得いきません。私が先に行くって言ったのにそれを無理矢理ベレッタさんが行くなんで、さすがにそれは強引すぎます！」

俺はミフユの反発する姿を見て目を丸くしていた。不思議と必死に食い下がるミフユに対して理解できなかったからである。

「……ほう、喰らいついてくるかミフユ。しかしドウマン殿は私が良いと言つたのだ。彼の言葉を尊重するのは当然のことだと思っただが？」

「さっきの言葉を都合良く解釈しすぎじゃないですか？ ——私はその、ドウマンのはつきりとした言葉を聞きたいんです」

そう言うミフユは顔を伏せ、どんな表情をしているかはこちらからじゃ分らない。ただ、握っている手が少し震えているような気がした。

俺は二人に両手を握られ、案山子のような状況に陥らせたこの話の流れに戸惑いを隠せなかった。

——どうしてこんなことになったのか分からない。だが、二人の必死さは伝わってきた。いかせんこんな状況に俺は困惑してしまつたが、二人が市内の案内をしたいと言ってくれるのは嬉しいことだ。ベレッタは少し怖いけど時折見せる恥じらいがグツと来る。おっぱ

いも凄くでかい。——ミフユはこの長旅で付き添ってきた仲だし、気兼ねすることなく案内してもらえそうだ。

——ただ、やはりここでハルミさんのことが気になってしまう。キルト曰く、二人は……まあ、そういう関係らしい。それを俺がズカズカと中に入ってくるのは迷惑だろうし、それ以上に俺が嫌だ。そういう関係の人たちの間に割り込むのは、なんというか非常にめんどくさいのだ。だから、ミフユはハルミさんと一緒に拠点に残っていた方がいいと思う。

「……うん。ミフユはやっぱりここでゆっくり休んでいた方がいいんじゃないか。さっきも言ったけどハルミさんとも積もる話があるだろうし——」

「——」

その時のミフユの無機質な表情に俺は衝撃を受けてしまった。

「あ……ミフ——」

「そうですか。行ってきたいいですよ」ミフユはそう言うと、手を放し俺に背を向ける。

「おっと——」俺は一瞬バランスを崩してしまう。「おい、どうしたんだよミフユ？ 何か気でも悪くさせたのか？」

「ドウマン君、行ってきたさい」ハルミさんが間に入ってくる。

「え、でも——」

「気にしないでいいから。君がしたいようにすればいいんだ。……だから、ここはすぐに行ってくれないかい？」

微笑む表情とは裏腹に冷たい声に俺は戸惑ってしまう。しかし、

「……分かり、ました」

ハルミさんがそう言うなら大丈夫かな。彼に任せれば問題ないだろう。そう結論付き、俺は部屋から出ていくことに決めた。

「ドウマン殿、ここからは気を付けるようお願い致します」

そう言われて連れてこられたのが先程の部屋からもう一階上になる

酒場だった。ベレッタによると拠点の最下層と最上階であるここ一階にそれぞれ酒場が設けられているらしい。つまり最下層の方は『レジスタンス』の酒場で、一階は一般の酒場になる。ようするに、ここは拠点のカモフラージュとして設置されているわけだ。しかし、一般の客が入ってくるということは危険が伴うという意味でベレッタが俺に注意を促したのである。

「それでドウマン殿——」

「……」

「ドウマン殿？」

「——ん？ ああ悪い、何だ？」

「いえ……特には。——ドウマン殿は、やはりミフユのことが気になるのでしょうか？」

「……っ。な、何を急に言っているんだ？」

「先程から曇った表情をしていますので……」

「そんなことは、ないと思うぞ？」

そう言いながらもミフユのあの表情が頭から離れない俺は形容し難い感情に悩まされる。

「そう、でありますか」

「ああ……」

そうだ、俺は何を思い悩んでいるんだ。別に俺が気にしたところではうがなないじゃないか。ハルミさんがどうにかしてくれるはず。

——そう自分に言い聞かせながら俺は足を進める。ふと、顔を上げると目の前にカウンターがあつた。

パリーン……ッ

何の前触れもなく鼓膜に鋭い振動が伝わってくる。

「……失礼致しました」

抑揚のない声の持ち主は静かに、ゆっくりと、散らばったグラスの破片を片付けていく。

その酒場の亭主らしき人物はこちらを見るとゆっくりと頭を下げた。
「……お初にお目にかかります、ドウマン様」

ハルミさんより遙かに縦にも横にも大きい男性はゆっくりとした口調で言葉を陳列する。見た目は巨漢で武骨だが、実際には礼儀正しい男性のようだった。

「こちらはここの酒場のマスターであります」ベレッタはそう紹介する。

「よ、よろしくマスター。景気の方は如何ですか？」

俺はそう言って、親しみを込めてマスターに握手を求める。

「……」

反応は無かった。いや、もしかするとあったのかもしれないが少なくとも俺には感じ取れなかった。

俺は釈然としない気持ちを押し殺して、居場所のない手を引っ込める。

「申し訳ないドウマン殿。マスターはいかせん不器用な男でありまして、彼の時間は我々が共有している時間から逸脱しているのです。

——この通り」

そう言うベレッタの目線の先には、俺に差し出されたマスターの手があった。

さつき求めた握手が今返ってきた！？ 俺たちとは時間の感覚に差があるっていつても、タイムラグありすぎだろ。これは果たして不器用っていう枠に収まるんだろうか……。

「実は、マスターは『不能者』^{ガラクタ}ではありません」ベレッタは不意に、

今度は確かに握手が成立した俺に耳打ちしてくる。「彼自身は『悪魔の紅石』^{デーモンストーン}を使うことが可能であり、何ら変わりない人間なのであ

ります。——彼の協力がなければ拠点のカモフラージュは易々と見破られていたことでしょう」

なるほど、そういうことか。最初話を聞いた時は堂々と市内に酒場を経営し、その下に拠点を置くなんて正気の沙汰じゃないと思っていたが、そういうことなら納得できる。政府の連中もまさか一般市

民が経営している酒場の下に『不能者^{ガラクタ}』の根城があるとは思えないはず。

一見物静かなマスターではあるが心の中には熱い信念に燃えているのだろう。協力者になった経緯は知らないが、大より小を取るとは立派な人だ。

「では、そろそろ行きましょうか」

ベレッタはそう言い、俺が頷くのを確認してから酒場の出口に向かい始める。

俺は軽くマスターに断りを入れて、後に続いた。

「……行つてらっしゃいませ」

後生ですから……！（後書き）

マジで感謝、ありがとう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0987y/>

エロイムエッサム

2011年11月15日03時05分発行